
日本保健医療社会学会ニューズレター No. 60 2005/1/13

日本保健医療社会学会事務局

東京大学大学院医学系研究科健康社会学教室内

東京都文京区本郷 7-3-1

(編集：福島道子 発行：的場智子)

I. 第31回日本保健医療社会学会大会のお知らせと発表演題募集

第31回日本保健医療社会学会大会を下記のように開催いたします。

本大会はメインテーマ「保健医療社会学のフロンティア」を掲げ、これまでの日本の保健医療社会学がどのような社会的現実に取り組んできたのか、あるいは取り組めてこなかったのかについて再考し、いまあらためて保健医療社会学の視座から何を問うことが可能かについて議論を深めていきたいと思っております。とりわけ、熊本の地で開催させていただくということを踏まえまして、シンポジウムでは「水俣病」と「ハンセン病」という2つの問題から今後保健医療社会学は何を問うべきかを検討し、その上で、ラウンド・テーブル・ディスカッションにおいて「ケアの社会学」や「病の社会学」というテーマや領野においては何を問うことが可能であるのかについて学会員の皆様と一緒に考えていきたいと思っております。

学会員の皆様のご参加をお待ちしております。また、非会員の方のご参加も歓迎いたしますので、どうぞお誘いあわせの上お越しくください。

[記]

1. 日程 2005年5月14日(土)、15日(日)
2. 会場 熊本学園大学 (JR 豊肥本線・水前寺駅、徒歩約10分/熊本空港からは空港リムジンバス・味噌天神下車、徒歩10分)
3. 大会長 羽江 忠彦 (熊本学園大学・商学部)

4. プログラム概要

5月14日(土)

09:30～ 受付開始

10:30～12:30 一般演題セッション、要望演題セッション

12:30～13:30 昼休み

13:30～16:30 シンポジウム A 「水俣病問題からの問い」

原田正純 (熊本学園大学・社会福祉学部)

船橋晴俊 (法政大学・社会学部)

牛島佳代 (福岡大学・医学部)

司会：羽江忠彦（熊本学園大学・商学部）
16:40～17:30 総会
18:00～20:00 懇親会

5月15日（日）

09:20～ 受付開始
10:00～11:30 一般演題セッション、要望演題セッション
11:30～12:30 昼休み
12:30～14:30 シンポジウム B「ハンセン病問題からの問い」
中村文哉（山口県立大学・社会福祉学部）
蘭由岐子（賢明女子学院短期大学・生活学科）
司会：田口宏昭（熊本大学・文学部）

14:40～16:30 ラウンド・テーブル・ディスカッション A
テーマ：「ケアの社会学」では何を問うのか
三井さよ（法政大学・社会学部）
古城門靖子（神戸大学医学部附属病院）
司会：武井麻子（日本赤十字看護大学）

ラウンド・テーブル・ディスカッション B
テーマ：「病の社会学」では何を問うのか
立岩真也（立命館大学大学院・先端総合学術研究科）
周藤真也（早稲田大学・社会科学部）
司会：進藤雄三（大阪市立大学大学院・文学研究科）

5. 参加費

- * 大会参加費 学会員 4,000 円（4月30日までの申し込み）、学会員 5,000 円（5月1日以降、当日申し込み）、非会員 6,000 円
- * 学生参加費 学会員 3,000 円（4月30日までの申し込み）、学会員 4,000 円（5月1日以降、当日申し込み）、非会員 5,000 円
- * 懇親会費（事前申し込み、当日申し込み、いずれも）一般 4,000 円、学生 2,000 円
- ◆参加費は同封した郵便振り込み票にて送金してください。懇親会に事前申し込みされる方は大会参加費と合計して送金してください。

（同封した郵便振り込み票（日本保健医療社会学会大会宛）は第31回大会参加費・懇親会費の振り込み専用です。この振り込み票で学会年会費を振り込まないでください。）

6. 演題募集

昨年度に引き続き、本大会でも「一般演題」と「要望演題」を募集します。
発表は、「一般演題」と「要望演題」とも、以下の要領でお願いします。

(1) 1 演題につき、発表は 12 分、質疑は 8 分の予定です。

- (2)発表の際に、OHP またはパワーポイントを使うことができます。使用を希望する場合は、同封した「演題申込書」の該当箇所に○印を付けてください。なお、会場の設備の都合上、OHP、パワーポイントいずれも可能な方はできるだけ OHP をご利用ください。
- (3)OHP サポートは各自でお願いします。
- (4)配布資料がある場合は、各自で 50 部用意し、当日、会場で配布してください。
- (5)発表日時は 4 月にお送りする抄録集に載ります。各自でご確認ください。

要望演題は、以下のように、保健医療社会学が取り組むべきテーマを掲げ、皆様に議論し、交流していただきたいとの趣旨で設けました。

- (1)病をめぐる差別の歴史性
- (2)保健医療の地域化
- (3)保健医療制度の歴史的変容
- (4)福祉国家と保健医療政策

7. 演題申込み方法

- (1)申込み方法は「一般演題」「要望演題」とも同じです。なお、「一般演題」で申し込まれた場合でも、「要望演題」セッションで発表していただくことがありますので、ご了承ください。
 - (2)発表資格は、研究者、共同研究者とも会員であることが必要です。会員でない方は、大会までに入会手続きを済ませてください。入会手続きは、学会事務局（東京大学大学院医学系研究科健康社会学教室）までお願いします。
 - (3)発表抄録を下記の要領で作成し、その原本 1 部、コピー 1 部の計 2 部を、そのファイルを保存したフロッピーディスク、「演題申込書」と一緒に、大会事務局（熊本学園大学・社会福祉学部・天田研究室）へ 2005 年 2 月 25 日（金）までにお送りください。大会事務局では、抄録を頂戴した時点で、受理した旨のハガキを郵送します。なお、フロッピーディスクは返却しません。
 - (a)締め切り：2005 年 2 月 25 日（金）必着
 - (b)形式：A4 判 1 枚、ワープロ横書き、40 字×40 行、明朝体
 - (c)上下 30mm、左右 25mm の余白
 - (d)演題を第 1 行中央寄せで、氏名（所属）を第 3 行に右寄せで、本文は第 5 行から始めてください。連名の場合は、発表者に○を付けてください。
- ◆なお、抄録は抄録集の段階で B5 判に縮小されますので、文字や図表の大きさに注意してください。

8. 事務局

（大会事務局）

〒862-8680 熊本市大江 2-5-1

熊本学園大学社会福祉学部 天田研究室内

第 31 回 日本保健医療社会学大会事務局

E-mail

TEL・FAX

(学会事務局 (学会入会の問い合わせ))
 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
 東京大学大学院・医学系研究科・健康社会学教室内
 日本保健医療社会学会事務局

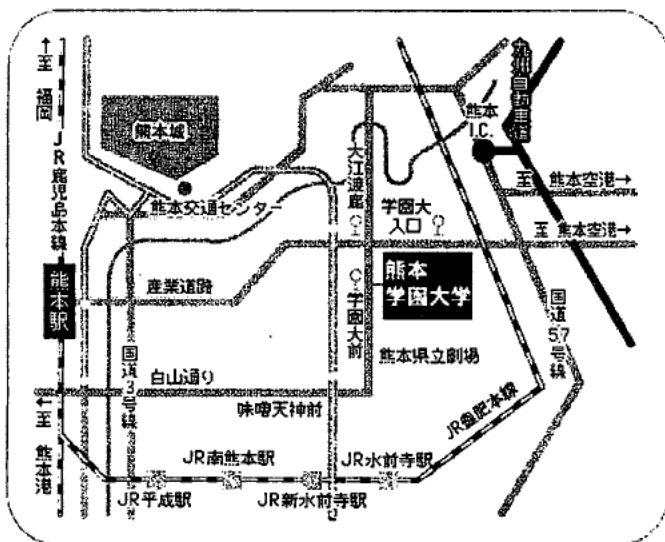
E-mail : [REDACTED]

TEL [REDACTED]

FAX [REDACTED]

9. 大会会場周辺図

交通のご案内



- JR熊本駅より
 自動車利用：約15分
 市営バス利用：
 (1) 第一環状線 (大学病院回り)
 バス停「大江渡底(おおえとろく)」
 下車5分
 (2) 中央環状線 (大学病院回り)
 バス停「学園大前」下車
- 交通センターより
 自動車利用：約15分
 市営バス利用：子飼園線(こかいえずせん)・
 子飼長瀬線(こかいながみねせん)
 バス停「学園大前」下車
 産交バス利用：託麻原通り経由
 バス停「大江渡底」下車5分
- 熊本市電
 電停「味噌天神(みそてんじん)」より徒歩約15分
- JR豊肥本線
 水前寺駅(すいぜんじえき)より徒歩約10分
- 九州自動車熊本インターより
 自動車利用：約15分
- 熊本空港より
 自動車利用：約40分

- ◆ なお、熊本学園大学までのアクセスは <http://www.kumagaku.ac.jp/annai/gaiyou.html> をご参照ください。

(第31回大会事務局長：天田城介)

II. 理事会報告

第10回理事会報告 2004年12月9日(木) 於 東京大学

出席者：米林喜男(学会長)、小澤温、木下康仁、福島道子、的場智子(各理事)、小出昭太郎(学会事務局次長)

1. 第31回大会について：大会事務局で策定中の大会プログラム案に関して、シンポジストの人選やタイムスケジュール等について討議した。
2. 学会誌『保健医療社会学論集』の編集と発行等について：担当の黒田理事欠席のため、事前に連絡されていた次号の発行予定と次次号の投稿状況・発行予定が会長より報告された。また同じく黒田理事より審議事項として挙げられていた、編集事務局の常設化、投稿締め切り時期の設定、査読規程のマニュアル化の必要性などについて討

議した。これらは今後の検討事項として次期理事会へ申し送ることになった。

3. 定例研究会について：関東地区例会の今後の予定などについて担当の小澤理事より、報告があり、討議された。
4. 学術会議会員候補者の情報提供について：日本学術会議より、学術会議会員候補者情報を各団体より提出するようにとの連絡を受け、理事会で審議した結果、米林会長、黒田理事、林理事と、山崎喜比古会員に必要情報の作成を依頼することとした。
5. 新入会員の承認ならびに退会者の確認について：小出事務局次長より、9月11日以降12月6日までの入会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。
6. ニュースレターについて：担当の福島理事より掲載記事のアウトライン等について提案があり、討議、決定された。
7. その他：2005年3月の理事改選に関しては、選挙管理委員会を立ち上げ、そのもとで作業を進めることになった。次回理事会は、2005年3月7日（月）18時より東京大学で開催となった。

（総務担当理事：的場智子）

Ⅲ. 関東地区定例研究会について

平成16年度の2回目（第180回）は12月10日に東洋大学・白山キャンパスにおいて開催されました。講師は、青山陽子会員（東京大学大学院・客員研究員）、テーマは「ハンセン病療養所における生活世界—ハンセン病元患者の語りから」で、参加者は会員を中心に15名程度の参加でした。報告内容は、ハンセン病患者を取り巻く近年の状況、ハンセン病療養所における生活世界（発病から入所までの経過、入所体験の意味、ハンセン病のやまい体験、患者同士の相互扶助体系）、まとめおよび今後の課題、などを中心に、これまで、報告者の行ってきたハンセン病療養所における聞き取り調査研究や資料分析を中心になされました。報告後の討論では、患者同士の相互扶助体系の是非および両価性、今回の研究方法における仮説のあり方、などについて活発な意見交換がなされました。

今回の企画は、平成17年5月に予定されている第31回大会（熊本学園大学）企画の事前学習会としての位置づけもあり、これまで、系統的に把握することが困難であったハンセン病対策の歴史的な経過、ハンセン病元患者の置かれている現状とその課題、に関して、論点が整理され、明確になった点では、事前学習として意義深い定例研究会でした。

今後の定例研究会でも、第31回大会（熊本学園大学）企画の事前学習会としての位置づけを、さらに、進めていきたいと思っています。第182回定例研究会は、3月17日（午後6時から8時）、東洋大学・白山キャンパス（5号館5302教室）で行います。講師は、関礼子先生（立教大学・社会学部）で、「阿賀野川流域の生活世界と新潟水俣病：地域の「社会学的疫学」の視点」（仮題）を予定しています。

（関東地区定例研究会担当理事：小澤 温）

Ⅳ. 関西地区定例研究会について

2004年度第二回関西地区定例研究会および関連研究会のご案内

今年度後半の関西地区定例研究会を以下のとおり開催いたします。今回は、大阪府立大学の中河伸俊氏のご協力により同大学総合科学部社会学教室の共催で、『逸脱の医療化』（P.コンラッドと共著）で著名な、かつ近年、中国における老人介護をフィールドに、ポ

ストモダン・エスノグラフィーを実践中の研究者でもいらっしゃるドレイク大学のジョセフ・シュナイダー先生をお迎えし、ご講演いただくことになりました。またとない機会ですので、ぜひとも奮ってご参加ください。

テーマ：	「『逸脱と医療化』再訪—二十五年後の回顧と評価（仮）」
講師：	ジョセフ・シュナイダー教授（ドレイク大学）※逐語通訳あり
進行：	進藤 雄三教授（大阪市立大学）
日時：	2005年3月5日（土）
場所：	キャンパス・ブラザ（京都駅前）
時刻：	13時～17時
共催：	大阪府立大学総合科学部社会学研究室
参加費：	会員・無料 非会員（資料代および会場費として500円）

なお、シュナイダー教授の来日に伴い、他に2回の研究会を予定しております。こちらも併せてぜひご参加ください。いずれも詳細は以下までお問い合わせください。

<来日研究会 No.2・京都>

3月6日（日）13:00～17:00（予定） 場所：龍谷大学大宮キャンパス

テーマ：「ケアを提供し、自己を記述する—クロスカルチュラルなエスノグラフィーの試み（仮題）」

問合せ先：京都精華大学人文学部・山田富秋 [redacted] ；
大阪府立大学総合科学部・中河伸俊 [redacted]

<来日研究会 No.3・東京>

3月8日（火）13:00～17:00（予定） 場所：淑徳大学池袋キャンパス

テーマ：「厳格派構築主義からポストモダン・エスノグラフィーへ（仮題）」

問合せ先：大阪府立大学・中河伸俊 [redacted]
淑徳大学社会学部・山本功 [redacted]

（関西地区定例研究会担当理事：林 千冬）

V. 看護研究部会報告とご案内

11月の例会は「ヘルスケア領域における職種間の協働について」と題し、宇城令氏（聖路加看護大学博士後期課程）の報告がありました。ヘルスケア領域において医師主導型の医療提供から多職種が協働して医療を提供することの重要性が指摘されています。本報告では、ヘルスケア領域における「協働」の使われ方を文献より検討し、各職種が示す「協働」の内容や「協働」のめざすところ、「協働」に必要な条件などの現状をとらえることが目的とされていました。この発表を通して、そもそも「協働」とは誰のために行われるのか、アウトカムは何か、「協働」という用語が用いられてきた背景等、「協働」という用語に込められた意図を探る必要性や具体的にどのようにすれば「協働」が可能になるのかなどの疑問が投げかけられ、充実した貴重な意見交換の場となりました。

次に2005年の例会予定を2件お知らせ致します。1月8日（土）13:00～15:00 「戦前の日本赤十字社救護員の点呼召集について—ジェンダーの視点から見えてくるもの—」
山崎裕二氏（日本赤十字武蔵野短期大学） 於：順天堂医院 6号館 2F 第3カンファレンスルーム

なお、3月は、今一度ケア提供者とは何かを問い直したいと考え、公開企画を行います。
3月26日(土) 14:30~16:30 於: 順天堂医院6号館2F第3カンファレンスルーム
く라운드テーブルディスカッション: ケア提供者の光と影ー必要なケアを続けるための模索>司会: 吉田澄恵(順天堂大学医療看護学部)、発言者: 社会学的観点からー三井さよ(社会学: 法政大学)、看護史的観点からー山崎裕二(教育学: 日本赤十字武蔵野短期大学)、福祉研究の立場からー山田健司(社会福祉学: 京都女子大学)、高齢者看護の現場からー千葉京子(老年看護学: 日本赤十字武蔵野短期大学)。

皆様のご参加をお待ちしております。お問い合わせ等は看護研究部会事務局 三井さよ
[redacted]、中村美鈴 [redacted] [redacted] までお願いします。
(看護研究部会: 千葉京子)

VI. 編集委員会からのお知らせ

編集委員会では、目下、機関誌『保健医療社会学論集』第15巻2号の発行に向けて、編集作業を行っています。当号では、第30回(2004年度)大会の記念講演、大会長講演、シンポジウム「保健医療社会学と社会福祉学」の報告、リレー講演「日本における保健医療社会学の歴史と展望」の講演を掲載予定です。また、原著論文3本、研究ノート2本、書評1本が掲載予定です。未提出の原稿が3本ほどありますが、12月中旬にそれを入手し、1月末ころに完成できればというところです。

今次の編集委員会が発行する号はこれが最後になります。今次編集委員会は、14巻1号から15巻2号までの発行が責任でした。すべての号が予定よりも遅れた発行となり、この点では課題を残すことになりましたが、なんとか責任を果たせそうです。これは、副編集委員長の木下康仁先生、および編集委員の方々、論文を投稿頂いた会員の方々、査読をして頂いた会員および非会員の方々のおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。なお、編集委員の方々および査読頂いた会員・非会員の方々については、次号の編集後記でその名前を記してあらためて感謝の意を表するつもりでおります。

なお、編集委員会では、次期の編集委員会への引き継ぎ事項の検討・整理も行っております。前号のニューズレターにも記しましたように、編集とくに査読に関して、いくつかの問題が生じており、これらの問題に対して、規定・要項に明記されていないところは、前委員会から引継いだ慣例および今次委員会の裁量でもって対応していますが、規定・要項の改正、査読方法の改正・明文化などが必要な次期に来ていると思います。これらの問題およびそれらに対する対応策についてとくに引き継ぐつもりです。

会員の皆様には、引き続き、論文の投稿をお願い申し上げます。また、編集委員会の運営に関しましても、ご要望やご意見をお待ちしております。

(編集委員会委員長: 黒田浩一郎)

新入会員および退会者(敬称略)(9月11日~12月6日)

・入会

[redacted] [redacted]
[redacted]
[redacted] [redacted]
[redacted]

[REDACTED]
[REDACTED]
[REDACTED]
・退会
[REDACTED]

(学会事務局次長：小出昭太郎)

編集後記

新しい年を迎えることができました。昨年は地震や津波など天災や人災に見舞われ、多くの方々が心を痛めていることと存じます。今年は災いの少ない、福の多い年となりますよう心から祈っております。

さて、会員からの投稿も積極的に載せていきたいと思いますので、「会員の声」欄への投稿、学会や研究会の告知、最近出版した著書の紹介などお寄せ下さい。投稿の方法は郵送、ファクシミリ、Eメールが可能です。

郵送：〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3 日本赤十字看護大学内
日本保健医療社会学会広報担当理事 福島道子

FAX： [REDACTED] (日本保健医療社会学会広報担当理事 福島道子)

Eメール： [REDACTED]

なお、紙面の都合等により、原稿の採否、若干の修正は当方にご一任願います。

(広報担当理事：福島道子／文責：千葉京子)

日本保健医療社会学会ニューズレター No. 61 2005/4/22

日本保健医療社会学会事務局

東京大学大学院医学系研究科健康社会学教室内

東京都文京区本郷 7-3-1

(編集：福島道子 発行：的場智子)

I. 第31回日本保健医療社会学会大会のご案内

第31回日本保健医療社会学会大会を下記のように開催いたします。

本大会はメインテーマ「保健医療社会学のフロンティア」を掲げ、これまでの日本の保健医療社会学がどのような社会的現実に取り組んできたのか、あるいは取り組めてこなかったのかについて再考し、いまあらためて保健医療社会学の視座から何を問うことが可能かについて議論を深めていきたいと思っております。とりわけ、熊本の地で開催させていただくということを踏まえまして、シンポジウムでは「水俣病」と「ハンセン病」という2つの問題から今後保健医療社会学は何を問うべきかを検討し、その上で、ラウンド・テーブル・ディスカッションにおいて「ケアの社会学」や「病の社会学」というテーマや領域においては何を問うことが可能であるのかについて学会員の皆様と一緒に考えていきたいと思っております。学会員の皆様のご参加をお待ちしております。また、非会員の方のご参加も歓迎いたしますので、どうぞお誘いあわせの上お越しく下さい。

なお、大会開催期間、熊本県内において様々なイベント等が開催されるため、熊本市内のホテルが非常に混雑しております。そのため、参加者の皆様の便宜を図るため、西鉄旅行熊本学園大学営業所 (TEL 096-371-8563/FAX 096-371-8367) に宿泊等のお世話をさせていただいております。ご希望の方は、先日『保健医療社会学論集』第15巻2号などとともにお送りした、西鉄旅行による「日本保健医療社会学会大会 宿泊のご案内」をご参照の上、お早めにお申し込みください。

<大会のご案内>

日 程：2005年5月14日(土)、15日(日)

会 場：熊本学園大学

〒862-8680 熊本市大江2-5-1

(JR 豊肥本線・水前寺駅、徒歩約10分/熊本空港からは空港リムジンバス・味噌天神下車 [乗車時間約40分]、徒歩10分)

大会長 : 羽江 忠彦 (熊本学園大学・商学部)
事務局長 : 天田 城介 (熊本学園大学・社会福祉学部)
大会事務局 : 〒862-8680 熊本市大江 2-5-1
熊本学園大学社会福祉学部 天田城介研究室
第 31 回日本保健医療社会学会 大会事務局
TEL [REDACTED] FAX [REDACTED]
E-mail [REDACTED]
URL <http://square.umin.ac.jp/medsocio/>
<http://www2.kumagaku.ac.jp/teacher/josuke/medsocio31.htm>

参加費

大会参加費 学会員 4,000 円 (4 月 30 日までの申し込み)、
学会員 5,000 円 (5 月 1 日以降、当日申し込み)、非会員 6,000 円
学生参加費 学会員 3,000 円 (4 月 30 日までの申し込み)、
学会員 4,000 円 (5 月 1 日以降、当日申し込み)、非会員 5,000 円
懇親会費 一般 4,000 円、学生 2,000 円 (事前申し込み、当日申し込み、いずれも)

(第 31 回大会事務局長 : 天田 城介)

II. 役員選挙結果

選挙管理委員会から、去る3月30日に行われた開票の結果にもとづき、得票数の多い方から5名および次点の方について報告を受け、理事就任の依頼をした。最終的に受諾頂いた5名の選出理事は、以下の方々である (敬称略、50音順)。

小澤 温 (東洋大学)
木下 康仁 (立教大学)
進藤 雄三 (大阪市立大学)
野口 裕二 (東京学芸大学)
山崎喜比古 (東京大学)

続いて行われた上記選出理事による協議の結果、指名理事として選ばれ、かつ、現時点までに就任を受諾した指名理事は以下である。

的場 智子 (東洋大学)
(残り1名に関しては、現在交渉中)

同時に行われた会計監査選挙の結果、選出され、就任の受諾も頂いた2名は以下の方々である（敬称略、50音順）。

河口てる子（日本赤十字看護大学）

園田 恭一（新潟医療福祉大学）

（総務担当理事：的場智子）

Ⅲ. 理事会報告

第11回理事会 2005年3月7日（月） 於：東京大学

参加者：米林喜男（会長）、小澤温、木下康仁、福島道子、的場智子（各理事）、小出昭太郎（学会事務局次長）

1. 第31回大会について

第31回大会事務局より報告された大会に向けた準備状況、大会プログラムについて討議した。

2. 第32回大会について

2006年5月（予定）に開催される第32回大会の候補地について検討した。

3. 学会誌の編集と発行について

編集委員長の黒田理事から事前に提出されていた資料をもとに、次号、次次号の発行予定について報告を受けた。理事3選の禁止規定により、黒田理事が今期限りになることを受け、編集委員長の交代、編集事務局の変更、編集委員の改選について討議が行われた。また編集委員長の交代に伴い2005年5月1日～31日の間は編集委員会を休止することについても討議し、承認された。

4. 定例研究会について

関東地区例会の今後の予定などについて担当の小澤理事より、報告があり、討議された。関西地区例会については、ジョセフ・シュナイダー教授の来日が急遽中止になり、関西地区例会も中止になった、との林理事からの報告が事務局よりなされた。

5. 日本学術会議の登録について

「日本学術会議法の一部を改正する法律」により、2004年4月より登録学術団体制度が廃止されたとの報告が事務局よりなされた。

6. 選挙について

投票締め切り日（3月18日）とその後の進行予定について事務局より報告された。

7. 理事の引継ぎと総会に向けて

事務局より、2004年度の会計の現状について報告がされた。また今後、本学会の設立40周年に向け、新たに学会賞の設置などの可能性について討議した。

8. ニューズレターについて

担当の福島理事より掲載記事のアウトライン等について提案があり、討議、決定された。

9. 新入会員の承認ならびに退会者の確認について

小出事務局次長より、12月7日以降3月1日までの入会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。

(総務担当理事：的場智子)

IV. 関東地区定例研究会について

平成16年度の3回目(第182回)は、3月17日に、東洋大学・白山キャンパスにおいて開催されました。講師は、関礼子先生(立教大学・社会学部)、テーマは「阿賀野川の生活世界と新潟水俣病—社会学的な疫学の視点」でした。参加者は会員を中心に15名程度の参加でした。内容は、これまでの新潟水俣病の歴史的な概観、健康被害の地域集積性、住民による健康調査と調査によるエンパワーメント、汚染暴露とそれによる健康被害に対する地域の視点、に関して、これまでの報告者の行ってきた地域事例研究の成果を基に報告がなされました。特に、住民による健康調査の実施とその調査による住民のエンパワーメントに関する報告では、従来の疫学の限界についてふれ、それを乗り越える社会学的な疫学の重要性が指摘されました。

報告後の討論では、対象地域で住民による健康調査と調査によるエンパワーメントがなぜもたらされたのか、地域の地縁やリーダーのあり方について、エンパワーメントをもたらしした社会学的な疫学と参加型リサーチの類似性、生活世界の意味などの点に関して活発な意見交換がなされました。

今回の企画は、本年5月に予定されている第31回大会(熊本学園大学)企画の事前学習会としての位置づけで開催されました。新潟水俣病に関する疫学的な方法をめぐる論点の整理に加えて、問題の歴史的な経過、現状と課題に関しても、論点が整理され、明確になった点で、事前学習として大変意義のある定例研究会でした。

(関東地区定例研究会担当理事：小澤 温)

V. 看護研究部会報告とご案内

1月の例会は「戦前の日本赤十字社救護員の点呼召集について—ジェンダーの視点から見えてくるもの—」と題し、山崎 裕二氏(日本赤十字武蔵野短期大学)の報告がありました。戦前の日赤救護員(看護婦・看護人)の点呼召集規定の変遷や点呼召集の実施状況などのデータから、例えば応召率や職業別人数などに男女差があり、その理由として救護看護婦の結婚・子育てといった性別役割の存在が指摘されました。また、実際の日赤救護員は多様な職業をもつ集団であり、その実態を明らかにする実証的研究が必要との指摘を受けて、参加者の活発な討論が行われました。

2004年度最後の例会は、3月26日(土)順天堂医院で公開企画を開催しました。「ケア提供者の光と影ー必要なケアを続けるための模索」と題したラウンドテーブルディスカッションで、部会会員外参加者11名とゲスト発表者を含め、計24名の参加者を得ました。

まず、三井さよ氏が個人的な関係におけるケアと区別して、「職業」としてのケア提供に固有の生存戦略を検討するために、患者の看取り後に看護職が抱く「後悔」に焦点を当てた内容を発表しました。次に、山崎裕二氏が看護史・ジェンダー教育史の観点からケア提供者を検討し、ケア提供者が女性に多かったことよっての意義を述べるとともに、一方で、男性医師への従属、ジェンダー画一教育の温床等の問題をはらんできたことを発表しました。続いて、山田健司氏が生活行為への支援としてのケアを権利性となげ検討しました。生活行為は、人間の権利性の発生につながる動作でありケアは介入であるとし、介入の仕方は、その人に食べさせることと、本人が食べるという行為の貫徹を補助するののかという違いに反映、介入の仕方の差異はケアの対象となる人が「生きる場(場面)」によって異なる傾向があることを指摘しました。最後に、千葉京子が高齢者看護について大腿骨頸部骨折高齢者のリハビリテーション・プロセスの一例から、看護師の考える「フシ」と高齢者自身が考える「フシ」のずれがみられたことを示し、看護師が行う他者の生活への支援は限定的にしか行えず、空間と時間と関係性に依存していると述べました。これらの発表を受け、参加者一同の活発な意見交換が行われました。

2005年度第1回目の例会は、4月23日(土)13:00～ 於：順天堂医院6号館2階第3カンファレンスルーム 話題提供者：三井さよ「感情労働とケア」(仮)を予定しています。皆様のご参加をお待ちしております。お問い合わせ等は看護研究部会事務局 三井さよ [REDACTED]、中村美鈴 [REDACTED] [REDACTED] までお願いします。

(看護研究部会：千葉京子)

VI. 編集委員会からのお知らせ

このニューズレターをお読みになるときはすでに『保健医療社会学論集』第15巻2号がお手元に届いていることと思います。この号が、今次の編集委員会が2003年度に発足してから出す4冊目の、そして最後の号となります。何とか4号を発行できましたのも、本誌に論文を投稿頂いた方々、論文の査読をお引き受け頂いた方々のおかげです。この場を借りてお礼申し上げます。

前者の、論文を投稿頂いた方々についてですが、2003年5月から2005年1月までの間に30本の投稿がありました(投稿は2003年5月以前ですが、今次編集委員会が2003年5月以降に査読者を決め、査読を依頼したものを含みます)。そのうち、査読を通過し、掲載可となったものは、13本です(採択率43.3%。ただし、現時点では採択されていない17本の中には、目下、再投稿・再々投稿待ちの状態、今後、再投稿・再々投稿され、採択

される可能性のあるものを含みます)。掲載可となったもののうち、1本が14巻2号に、4本が15巻1号に、5本が15巻2号に掲載されました。残りの3本が16巻1号に掲載予定です。また、掲載可となったもののうち、総説が1本、原著が10本、研究ノートが2本でした。

後者の、論文の査読をお引き受け頂いた方々は、以下のとおりです(厳密に言えば、2003年5月から2005年1月までの間に今次委員会が査読を依頼した方々です。括弧内の数字は査読頂いた論文の本数です。括弧のない方の本数は1本です。再投稿・再々投稿の査読は回数に含めていません)。

朝倉隆司・天田城介(2)・蘭由岐子・市野川容孝・一戸真子・伊藤美樹子・小沢温・樫田美雄(2)・金子雅彦(4)・川村佐和子・菊澤佐江子・木下康仁(2)・栗岡幹英(2)・佐藤純一(3)・佐藤哲彦(2)・杉澤秀博(3)・杉田聡・関由起子・平英美・田口宏昭・田間泰子(非学会員)・田村誠・筒井琢磨(2)・出口泰靖(2)・中川薫(3)・中山和弘・西田真寿美(3)・西村大志・野口裕二(2)・橋本英樹(3)・早坂裕子・林千冬(3)・福島道子(2)・藤澤由和・儘田徹・三井さよ・宮本真巳(2)

なお、編集委員長の黒田は、理事の連続三選禁止規定のために、今回の理事選挙の被選挙権がなく、そのため、2005年度には新しい編集委員長に交代となります。旧委員長から新委員長への引継や新委員長のもとでの新しい編集委員会の立ち上げのために、2005年5月1日から5月31日までの間は、論文を投稿頂いても、査読者の決定および査読の依頼ができません。投稿をお考えの方は、このことをご考慮の上、投稿頂きますようお願い申し上げます。

(編集委員会委員長：黒田浩一郎)

VII. 日本学術会議の登録について

2003年8月発行のニューズレターNo.55において、事務局の手続きミスにより、本学会が第19期(2003年7月～2006年7月)の日本学術会議登録団体から外れてしまっていること、来る20期への登録は滞りなく行うことをお伝えしましたが、理事会報告にも記しましたとおり、「日本学術会議法の一部を改正する法律」により、2004年4月より登録学術団体制度が廃止されました。現在は「広報協力団体」が日本学術会議による広報活動に協力しており、本学会も広報協力団体になっています。また、すでに前号のニューズレターでもお知らせしましたが、2004年12月には学術会議会員候補者情報を本学会も提出しております。

(総務担当理事・学会事務局責任者 的場智子)

VIII. 『会員名簿』について

先日、2004 年度の会員の皆様に『日本保健医療社会学会 会員名簿 (2005 年 2 月 28 日現在)』をお送りしました。発行が遅くなり、誠に申し訳ございませんでした。住所等の変更や記載事項の誤りがある方は、『会員名簿』に同封した「変更届」でお知らせください。

この名簿の配布は会員に限定されております。情報が漏洩しないよう、取り扱いには十分ご注意ください。

(総務担当理事・学会事務局責任者 的場智子)

新入会員および退会者 (敬称略) (12 月 7 日～3 月 1 日)

・入会

[Redacted names and addresses for new members]

※平成 17 年度からの入会者については改選後の理事会で承認し、ニュースレターでお知らせします。

・退会

[Redacted names and addresses for members who have left]

(学会事務局次長：小出昭太郎)

編集後記

新年度が開始となり、会員の皆様におかれましては多忙な日々をお過ごしのことと拝察致します。5月には大会が開催されますので、多くの皆様と熊本でお逢いできることを願っております。

さて、会員からの投稿も積極的に載せていきたいと思っておりますので、「会員の声」欄への投稿、学会や研究会の告知、最近出版した著書の紹介などお寄せ下さい。投稿の方法は郵送、ファクシミリ、Eメールが可能です。

郵送：〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3 日本赤十字看護大学内
日本保健医療社会学会広報担当理事 福島道子

FAX： [REDACTED] (日本保健医療社会学会広報担当理事 福島道子)

Eメール： [REDACTED]

なお、紙面の都合等により、原稿の採否、若干の修正は当方にご一任願います。

最後になりましたが、広報担当理事をつとめさせていただいた福島は、このたびの役員改選に伴い他の方に交代いたします。皆様のご協力、心から感謝申し上げます、ありがとうございました。

(広報担当理事：福島道子／文責：千葉京子)

The Japanese Society of Health and Medical Sociology
日本保健医療社会学会ニュースレター

No. 62 2005/6/30



日本保健医療社会学会事務局
東京大学大学院医学系研究科
健康社会学教室内
東京都文京区本郷 7-3-1
(編集:平野かよ子 発行:的場智子)

I. 第31回日本保健医療社会学会大会を終えて

関東を離れた3度目の大会を、九州の地で無事終えたことに安堵しています。大過なく学会を終えたことだけでなく、発表と熱心な討論がなされたことに、参加者のみなさんはもちろん学会員のみなさん、米林喜男会長、事務局のみなさんに心から感謝しています。

米林会長からの開催を打診されたとき、本学会総会において名誉会員になられた旗野先生のかねてからの願いであったこと等々、学会に先行する保健医療社会学研究会以来の会員として、本学での開催は避けられないと観念しました。幸いにも、大会事務局を担当した天田城介会員の賛同もあり、ようやく決意を固めることができました。

とは言え、遠く東北、北海道の会員のみなさんを考えると、申し訳ない気持ちは現在も消えてはいません。関東と関東以外の地で交互に学会を開催することが、本学会の発展に寄与することは理解できても、九州という広がりの中で、熊本学園大学会員2名で準備する現実には、不安は小さくはありませんでした。

しかし、学会参加者総数168名、学会員107名、本学関係者13名、非会員48名という参加者数には、嬉しく思うメッセージをいただいたと思っています。少しばかり参加者の内容について見ると、個人発表者37名(欠席者1名を除く)、シンポジウム発表者5名(うち非会員3名)、ラウンドテーブル発表者4名、合計発表者45名(うち非会員3名)に対して、非発表者123名という内訳は十分な質疑応答と討論が行われたことを示唆するものであり、実際にそうでありました。つまり、学会が研究発表の機会であると同時に、参加者が切磋琢磨する討論の場として機能したと言えるでしょう。

次に、参加者総数に対する参加学会員64%、本学関係者を含む非学会員36%という結果は、非学会員の参加によって、本学会が学会員にのみに限定され場ではなく、地域の保健医療関係者や保健医療に関心を持つ人々に対して開かれた場であることを示唆しています。これは保健医療の各分野の研究とは異なる、保健

医療に対する社会学的観点からする問題の認識、解明に多くの関係者が注目し、期待をもっている現実が存在しているということだと理解できます。

最近の大学においては、業績主義とも言える改革に忙しく、それが研究者の肩にずしりと重い負担となっています。その中で、保健医療社会学の地平を開くことは、決して容易なことではないと思われまます。しかし、九州、熊本の地での学会開催は、私たちに「がんばれよ」という励ましをいただいたようです。学会のみなさんに御礼を申しあげるとともに、山崎新会長を先頭に本学会の充実と発展を祈るものです。

最後に、下記の方は発表を辞退されました。『抄録集』完成以後にその旨の連絡がありましたので、記録のために、この場に記させていただきます。

第2部会第4発表

立命館大学先端総合学術研究科博士課程 磯邊厚子

「スリランカの母子保健にみる経済的・社会的格差と健康の不平等」

(第31回大会長：羽江 忠彦)

II. 第32回日本保健医療社会学会大会のお知らせ

来年度の第32回大会の開催校を立教大学(池袋キャンパス)が引き受けることになりました。首都圏と地方とで交互に大会を開催するという近年のパターンを踏襲することもあり、関係者の協議の結果、立教大学ではこれまで一度も本学会の大会を開催していませんでしたので、この際にとというお話になりました。

とはいえ、学会の会員は教員では私一人という心細い状態でもあります。施設面の準備だけでも大変になりますので、大会のプログラムは学会長の山崎先生はじめ数名のメンバーからなる企画委員会を設置し、そこが検討を進めていくことになりました。最近の保健医療社会学会の発展には目を見張るものがあり、5月の熊本学園大学での第31回大会の記憶も新しいように大会も成功裏に開催されてきております。これも問題意識の高い会員の参加があってこそといえます。第32回大会もその勢いをかりつつ、充実した内容の大会となるよう準備につめていくつもりでおります。

大会は2006年5月13日(土)、14日(日)で予定しております。土曜日は午前中授業がある関係で、13日の午後からの開催となります。どうぞ、今から来年度のご予定にいらていただきますよう、お願いいたします。

立教大学は池袋駅から徒歩7分ほどのアクセスのよい場所にあります。多くの方々の参加を期待しています。

(開催校担当：木下康仁)

Ⅲ. 総会・理事会報告

1. 第1回理事会 2005年4月29日 於 東京大学

出席者：林千冬、福島道子、米林喜男（以上前理事）、小澤温、木下康仁、進藤雄三、野口裕二、平野かよ子、的場智子、山崎喜比古（以上新理事）、小出昭太郎（学会事務局次長）

- (1) 前理事から引継ぎ事項の報告ならびに新理事の役割分担を決めた。
- (2) 新年度の予算案と活動計画について討議した。
- (3) 事務局次長交替について：小出昭太郎事務局次長より、第31回学会大会終了後より田口良子さん（東京大学大学院医学系研究科博士後期課程）に事務局次長を引き継いで頂くことになった旨、報告され、了承された。

2. 第2回理事会 2005年5月14日 於 熊本学園大学

出席者：小澤温、木下康仁、進藤雄三、野口裕二、的場智子、山崎喜比古（各理事）小出昭太郎・田口良子（学会事務局次長）

- (1) 学会総会の運営、ならびに総会に報告・提案する事項について検討し決定した。
- (2) 次回理事会を7月28日（木）13時より東京大学にて開催することとなった。

3. 第31回日本保健医療社会学会総会の報告

学会の総会は、2005年5月14日に熊本学園大学にて行われた。議事次第と審議結果は以下の通りである。

開会の辞

議長選出

第1号議案 2004（平成16）年度事業報告

- 1). 日本保健医療社会学会大会・総会の開催について
 - ・第30回大会（東洋大、2004年5月）の開催
 - ・第31回大会（熊本学園大、2005年5月）の準備
- 2). 保健医療社会学論集について
 - ・学会大会抄録集を論集の特別号として、第15巻は特別号、1号、2号の3号分を発行した。
- 3). 定例研究会・研究部会について
 - ・定例研究会－関東3回、関西1回の開催、看護研究部会－6回、これらに対し学会から財政的補助が図られた。
- 4). 日本保健医療社会学会ニューズレターについて
 - ・4号分の発行
- 5). 学会員名簿の作成
- 6). 役員の改選 新会長の推挙と承認

7). その他

・「学会事務局＝東大大学院健康社会学にしばらくおく」、「事務局次長を設け、理事会にオブザーバー参加してもらう」として4年経過した。

第2号議案 2004(平成16) 年度決算報告、監査報告

日本保健医療社会学会2004年度決算書

自2004年4月1日 至2005年3月31日

単位：円

収入の部			支出の部				
	予算額	決算額	差異		予算額	決算額	差異
前期繰越金	1,126,349	1,126,349	0	印刷製本費	1,430,000	1,081,080	348,920
会費収入	3,070,000	3,161,000	91,000	郵送費	780,000	792,855	△ 12,855
学会誌刊行物売上	200,000	240,600	40,600	交通費	240,000	228,040	11,960
受取利息	10	10	0	事務局人件費	350,000	370,900	△ 20,900
広告収入	80,000	0	△ 80,000	論集編集費	50,000	50,000	0
				消耗品費	290,000	177,598	112,402
				会議費	30,000	80,058	△ 50,058
				大会・研究会・部会活動補助費	360,000	289,188	70,812
				名簿作成費	230,000	169,956	60,044
				その他(振り込み手数料等)	3,000	5,475	△ 2,475
				予備費	713,359	1,282,809	△ 569,450
合計	4,476,359	4,527,959	51,600	合計	4,476,359	4,527,959	△ 51,600

日本保健医療社会学会2004年度会計についての監査の結果、適正なものと認めます。

2005年5月10日 会計監査 平野かよ子

2005年5月10日 会計監査 細田満和子

第3号議案 2005(平成17) 年度事業計画

1). 日本保健医療社会学会大会・総会の開催について

- ・第31回大会(熊本学園大、2005年5月)の開催
- ・第32回大会：立教大学での開催を予定

2). 保健医療社会学論集について

- ・第16巻の特別号、1号、2号を発行。今年度より、論集の締め切りを年二回(9月、3月)に設け、編集委員会事務局を東大大学院健康社会学におく。

3). 研究活動について

- ・定例研究会、研究部会：2004年度の継承
- ・学会奨励賞の検討

4). 日本保健医療社会学会ニューズレターについて

- ・2004年度と同じ

5). その他

- ・組織体制の再検討を開始する。

第4号議案 2005（平成17）年度予算計画

日本保健医療社会学会2005年度予算書

自2005年4月1日 至2006年3月31日

単位：円

収入の部		支出の部	
	予算額		予算額
前期繰越金	1,282,809	印刷製本費	1,540,000
会費収入(6000円×480人分、新会員7000円×60人分)	3,300,000	郵送費	620,000
学会誌刊行物売上	220,000	交通費	270,000
受取利息	10	事務局人件費	360,000
広告収入	30,000	論集編集費	100,000
		消耗品費	210,000
		会議費	80,000
		大会・研究会・部会活動補助費	360,000
		その他(振り込み手数料等)	3,000
		予備費	1,289,819
合計	4,832,819	合計	4,832,819

第5号議案 名誉会員の推挙

- ・ 篠野脩一会員を名誉会員に推挙、承認された

新学会長挨拶と新理事・新会計監査の紹介（敬称略）

理事

山崎喜比古：学会長、渉外 小澤 温：論集編集 木下康仁：論集編集
 野口裕二：定例研究会(関東) 進藤雄三：定例研究会(関西) 平野かよ子：広報
 的場智子：総務
 会計監査：園田恭一 河口てる子

前学会長 米林喜男会員挨拶

閉会の辞

(総務担当理事：的場智子)

IV. 新学会長としての挨拶

この春、本学会理事に選出され、理事会と総会を経て、今期（2005.5－2007.5）学会長に就任することになった山崎です。私には理事の経験はありますし、大会長も1996年と2001年に2度お引き受けしましたが、学会長は今回が初めてです。前任の米林先生は、本学会の前身である保健医療社会学研究会の1973年発足に関わった先生方の中で最も若かった先生です。そのあとを継いで、当時まだ学部生でしかなかった私が学会長となり、また、他の理事の方は皆、私よりずっと若い方々です。代変わりの感を深くするとともに、責任の大きさに心引き締まる思

いがしています。ここ5、6年は、20数名～30名余の大学院生に教員スタッフ1人（医系教員の専決により助手を剥ぎ取られた結果です）という東大大学院健康社会学教室の研究と教育を守るのに必死で、それ以外のことでは不義理のし通し、迷惑のかけっ放しでした。否、むしろ、それ以外のことを放ることで、かろうじて「過労死」を免れてきたと言っているののかも知れません。これからは、このスタイルを改める必要があり、改めようと決意しております。

日本保健医療社会学会もお陰様で、1989年に学会になって以降、量的にも質的にも確実に発展してきました。1989年時会員数は100数十名に過ぎなかったのが、今日では500名を優に超えています。先の熊本学園大での学会第31回大会が10年前では考えられないほど量的にも質的にも盛況だったことにも象徴されます。こうした発展を縁の下の力持ちのようにして担い支えてこられた理事や関係会員の方々にあらためて敬意を表し感謝申し上げます。

一方で、理事の数や担当も事務局体制も学会発足時とほとんど変わらず、学会の今の組織や体制は限界にきています。学会発足時の4、5倍にもなった会員のエネルギーと力を集め、また発揮して頂けるシステムへと、学会の持続的発展を図っていく見地から、学会の組織や体制の整備・改善・充実は急務であると考えています。また、日本の保健医療社会学と学会の国内外での認知や地位の確立・拡大、そのための渉外活動や研究交流、国内外への発信・広報にも、この間の相対的な遅れを回復し、学会として力を尽くす必要があると考えています。小澤温（東洋大）、木下康仁（立教大、第32回大会長）、進藤雄三（大阪市立大）、野口裕二（東京学芸大）、平野かよ子（国立保健科学院）、的場智子（東洋大）の錚々たる各理事、田口良子（東京大）事務局次長とともに、会員の皆さんのご意見や英知、ご協力を広く得ながら、日本の保健医療社会学と学会の発展に力を注ぐ所存ですので、どうかよろしくご願ひ申し上げます。

山崎 喜比古（東京大学大学院・健康社会学）

V. 関東地区定例研究会

今年度から2年間、関東地区定例研究会を担当させていただきます。よろしくご願ひいたします。これまでの運営方式を継承しつつ、より多くの会員の方々の関心に応えられるような企画を準備したいと思ひます。いまのところ、9月、12月、3月の3回を予定しています。日程等の詳細が決まり次第、皆様にご案内いたします。なお、今年から、e-mailによるお知らせもしていきたいと考えております。取り上げてほしいテーマや演者のご希望がございましたら、ご遠慮なく、野口 [REDACTED] までお知らせください。会員の皆様のご協力をお願ひいたします。

（関東地区定例研究会担当理事：野口裕二）

VI. 関西地区定例研究会

今年度の関西地区定例研究会は、まだ具体的なテーマは定まってはいません。目下考えておりますいくつかの候補テーマとしては、(1) 医療化論の近年における動向、特に「生物医療化」biomedicalization 概念をめぐる議論、およびP.コンラッドの医療化推進主体における変容をめぐる議論、(2) 精神医療領域における「保安処分」の近年における動向、(3) ヘルシズムの功罪、などがありますが、人選を含めてまだ未確定という状況です。(1)は昨年3月に予定していたシュナイダー教授の講演が流れてしまったのを、何らかの形で再開できないかと考えたところからきています。個別事例をとりあげて、そこから議論を展開するというやりかたもあろうかと思えます。(2)は、池田小学校事件以降の法制定を念頭に、「精神鑑定」の意味を日本の精神医療史のなかで一度再考しておく必要があるのではないか、という発想からです。(3)は、70年代以降の文脈のなかで、特に「健康増進法」の意味をここできちんと総括しておいてもいいのではないか、という思いから設定しました。しかし、これらは仮のもので、現段階ではまだ未定とっていい状況ですので、むしろ会員のみなさんからの積極的なご提案、ご要望を受けてゆきたいと思っております。ご意見をお寄せくださいますようお願いいたします。

(関西地区定例研究会担当理事：進藤雄三)

VII. 看護研究部会

平成17年度の第1回例会が4月に開催されました。三井さよ氏(法政大学)による「感情労働とケア」について報告がありました。内容は以下の通りです。

近年、感情労働という概念がケア労働者の分析に有効であるとして導入されることが多くみられます。本報告では、感情労働概念が導入されることでケア労働者の何が見えるようになるのか、従来の議論の再考を試みました。感情労働概念の導入を図った論者たちが強調したのは、感情の管理可能性に注目することによって、(1)実際の臨床現場で働くケア労働者が「自然に」顧客に対して好感情を抱けなくとも当たり前だということを指摘し、(2)感情操作を技法化する可能性に道を開くことでした。しかし、感情労働を論じたホックシールドの議論には、感情の管理可能性と同時に、感情の管理がいかに貫徹不可能かという論点も含まれています。この点に注目することで、感情労働概念の新たな可能性が見いだせる感情労働という概念が有する潜勢力を生かしつつ、ケア労働者の分析において有効なツールとしていくことが可能と考えます。

報告後の議論では、感情社会学や感情労働という概念の有効性や、ケアを考え実践する上で感情という側面に注目することの意義などについて、活発な議論が繰り広げられました。

看護研究部会は、看護に関わる社会学的研究の発展、交流等をめざし、学際的メンバーで活動しています。皆様のご参加をお待ちしております。次回は、7月2日(土) 13:00~ 於：順天堂医院、話題提供者：清水準一氏(首都大学東京)

テーマ「生体肝移植ドナーの意思決定の自律性と看護職のかかわり」を予定しています。お問い合わせ等は看護研究部会事務局 三井さよ ()、中村美鈴 () までお願いします。(看護研究部会：吉田澄恵)

VIII. 編集委員会報告

このたびの役員の改選に伴い、編集委員会の構成が変わりました。黒田前委員長の後を引き継ぎ私、木下康仁(理事・立教大学)が編集委員長をつとめます。副編集長には東洋大学の小澤温氏(理事)、編集委員では金子雅彦氏(防衛医大)、樫田美雄氏(徳島大学)、佐藤哲彦氏(熊本大学)、林千冬氏(神戸市看護大)、佐藤純一氏(高知大学)、橋本英樹氏(帝京大学)、中川薫氏(首都大学東京)、杉澤秀博氏(桜美林大学)の8名が留任され、新たに河口てる子氏(日赤看護大)、杉田聡氏(大分医科大学)、関由紀子氏(群馬大学)の3名が加わりました。この体制で今後2年間編集作業に当たります。

また、編集に関して今回、大きな変更が2点あります。一つは、投稿論文の受付がこれまでの随時方式から年2回の締切方式へと変わります。締切日を3月末と9月末に設定しますので、最初の締め切りが本年9月末となりますのでお間違えのないようご注意ください。これは、近年、投稿論文数が増えてきていることと、編集の作業を集中化することで効率化を図り、コンスタントに掲載論文を確保していくためです。是非、計画的に論文作成し、投稿されますよう期待しております。

もう一つの変更点は、編集委員会の事務局を学会事務局内に設置したことです。これまでは在任の編集委員長の研究室となっておりましたので、交代のたびに新編集長のところに切り替えておりました。この後は事務局として固定されますので、編集事務局が投稿先となります。なお、問い合わせなどに関しては編集委員長も対応します。

論文投稿先：

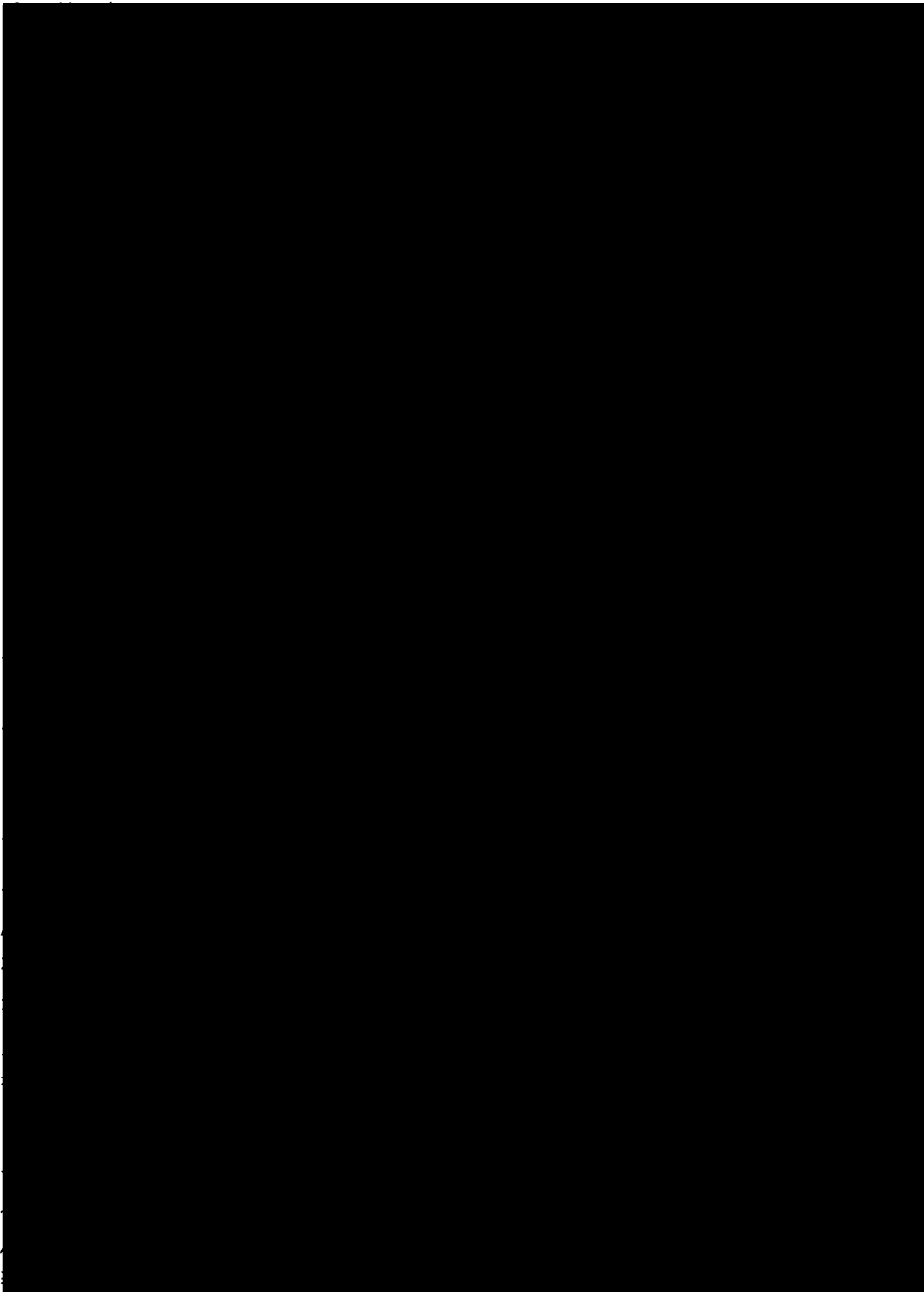
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院医学系研究科健康社会学教室内、
日本保健医療社会学会事務局内、
「保健医療社会学論集」編集事務局
電話：()、ファックス：()

編集委員長連絡先(できるだけメールでお願いします)：

立教大学社会学部 木下康仁 ()
電話&ファックス：03-3985-2310
〒171-8501 豊島区西池袋3-34-1
(編集委員会委員長：木下康仁)

Ⅸ. 新入会員および退会者の承認（敬称略）（2月2日～5月11日）

・入会



計 33 名

・退会



計 11 名

・資格喪失による退会

計3名

(学会事務局次長：田口良子)

X. 編集後記

平成17年度の大会は熊本で開催され、多くの皆さまの参加とご協力により盛大に、そして活発に論議されたことをお伝えしました。今後の新たな会長役員のご活躍を期待するところです。

さて、今年と来年は保健医療そして介護に関連する諸制度が改正されようとしています。これらの改正は少子高齢社会への対応と、財源の確保が大きな課題のようですが、保健・医療といった社会的な共通資本の運用のされ方として、どうあることが望ましく、多くの人々の合意が得られるものなのだろうかと心を痛めつつ、ニュースを聞いているところです。

これらの課題に対しては本学会ならではの社会学の視点からの提言も望まれるところかと思えます。

今年度より広報は平野が担当いたします。ニューズレターの装いも少し新しくしました。ここでは学術研究活動とともに、保健医療のあり方に関する会員の皆さまの声を「会員の声」に載せていきたいと思えます。どうぞ原稿をお寄せください。

投稿は下記にお願いいたします。

「会員の声」等 投稿先：

〒351-0197

埼玉県和光市南2-3-6

国立保健医療科学院 公衆衛生看護部内

「保健医療社会学会ニューズレター」編集事務局

FAX：[REDACTED]

E-mail：[REDACTED]

なお紙面の都合により、原稿の採否、若干の修正はお任せいただきますことをご了承ください。

(広報担当理事：平野かよ子)

日本保健医療社会学会ニュースレター



No. 63 2005/11/11

日本保健医療社会学会事務局
東京大学大学院医学系研究科
健康社会学教室内
東京都文京区本郷 7-3-1
(編集:平野かよ子 発行:的場智子)

I. 第32回日本保健医療社会学会大会のお知らせと発表演題募集

第32回日本保健医療社会学会大会を下記の要領で開催いたします。例年、大会演題募集の第一報は年明け最初にお送りするニュースレターで行っていましたが、木下康仁大会長のもと、6月より立ち上げた第32回大会企画運営委員会での準備状況を会員の皆さまに少しでも早く知っていただき、多くの方が大会にご参加いただけることを願い、一部まだ検討中の部分もありますが、いつもより早く演題募集のお知らせをすることと致しました。皆様方の参加をお待ちしております。また、非会員の方のご参加も歓迎いたしますので、どうぞお誘いあわせの上お越しください。

[記]

1. 日時 2006年5月13日(土)、14日(日)
2. 会場 立教大学・池袋キャンパス (JR山手線、埼京線、東北本線、東武東上線、西武池袋線、東京メトロ丸の内線、有楽町線「池袋駅」下車、西口より徒歩約7分)
3. 大会組織 (企画運営委員会 五十音順)
委員 木下 康仁 (立教大学・社会学部) (大会長・大会事務局長)
中村 美鈴 (自治医科大学 看護学部)
松繁 卓哉 (立教大学大学院博士課程) (大会事務局次長)
的場 智子 (東洋大学・ライフデザイン学部)
三井 さよ (法政大学・社会学部)
山崎喜比古 (東京大学大学院医学系研究科) (学会長)

4. プログラム概要

5月13日(土)

13:30 受付開始

14:00～15:30 一般演題セッション、要望演題セッション

15:40～18:00 メインシンポジウム

「病い・老い・トラウマを生きる ー保健医療の対象者像(他者像)の再発見ー(仮)」

従来、保健医療は、病い、老い、トラウマ等の困難と苦痛に着眼し、その軽減と除去に努めてきた。しかし、保健医療の対象者(他者)は、そうした困難や苦痛を抱えながらもなおよりよく生きようとしている、決して受け身ではない、主体的な人々なのである。本シンポでは、保健医療福祉の新しいあり方を探求する見地から、こうした保健医療の対象者像(他者像)の再発見とそのため新しい理論と方法の開発に挑戦したい。

18:00～20:00 懇親会

5月14日(日)

8:40 受付開始

9:10～12:00 一般演題セッション、要望演題セッション

12:00～13:00 昼休み

13:00～13:50 総会

14:00～16:00 ラウンド・テーブル・ディスカッションA

ラウンド・テーブル・ディスカッションB

ラウンド・テーブル・ディスカッションA

「ケアという経験の多様性：生活者へのまなざし」

近年、医療や看護・福祉においては、クライアントを細分化された領域で捉えるのではなく、生活者として向き合う観点が必要になってきている。そこで、本RTDでは、5名から、多様なケアの実践を、実践者による自身の意味づけも含めて捉え返すための話題を提供していただく。これを端緒とし、クライアント(=生活者)の生活全体を支えていくという視座とは何かについての議論を、現場から立ち上げるとともに社会学的に問い直していきたい。

ラウンド・テーブル・ディスカッションB

「保健福祉のまちづくりが地域にとってもつ意味を問う ー何を変える？何が変わる？ー」(仮)

近年、「地域づくり型保健活動」や「健康都市」などと銘打って、保健福祉のまちづくりが全国の市区町村で取り組まれてきている。本RTDでは、こうした取り組みによって何を変えられ何が変わったのか、言い換えれば、こうした取り組みが地域社会と住民にとってどのような意味をもっているのかについて問い直してみたい。加えて、こうした取り組みの研究方法を論を問う機会ともしたい。

5. 参加費

- * 大会参加費 学会員 4,000 円 (4 月 30 日までの申し込み)、学会員 5,000 円 (5 月 1 日以降、当日申し込み)、非会員 6,000 円
- * 学生参加費 学会員 3,000 円 (4 月 30 日までの申し込み)、学会員 4,000 円 (5 月 1 日以降、当日申し込み)、非会員 5,000 円
- * 懇親会費 (事前申し込み、当日申し込み、いずれも) 一般 4,000 円、学生 2,000 円

◆参加費は次回のニューズレターに同封する郵便振り込み票にて送金してください。

6. 演題募集

本大会でも「一般演題」と「要望演題」を募集します。発表は「一般演題」と「要望演題」とも、以下の要領をお願いします。「要望演題」の詳細については次号のニューズレターでお知らせします。

- (1) 1 演題につき、発表は 12 分、質疑は 8 分の予定です。
- (2) 発表の際に、OHP またはパワーポイントを使うことができます。
- (3) OHP サポートは各自をお願いします。
- (4) 配布資料がある場合は、各自で 50 部用意し、当日、会場で配布してください。
- (5) 発表日時は 4 月にお送りする抄録集に載ります。各自でご確認ください。

7. 演題申込み方法

- (1) 申込み方法は「一般演題」「要望演題」とも同じです。
 - (2) 発表資格は、研究者、共同研究者とも会員であることが必要です。会員でない方は、大会までに入会手続きを済ませてください。入会手続きは、学会事務局（東京大学大学院・医学系研究科・健康社会学教室）までお願いします。
 - (3) 発表抄録を下記の要領で作成し、その原本 1 部、コピー 1 部の計 2 部を、そのファイルを保存したフロッピーディスク、「演題申込書」と一緒に、大会事務局（立教大学・社会学部・木下研究室）までにお送りください。大会事務局では、抄録を頂戴した時点で、受理した旨のハガキを郵送します。なお、フロッピーディスクは返却しません。（「演題申込書」は次号のニューズレターに同封します。）
- (a) 締め切り：2006 年 2 月 28 日（火）必着
 - (b) 形式：A4 判 1 枚、ワープロ横書き、40 字×40 行、明朝体
 - (c) 上下 30mm、左右 25mm の余白
 - (d) 演題を第 1 行中央寄せで、氏名（所属）を第 3 行に右寄せで、本文は第 5 行から始めてください。連名の場合は、発表者に○を付けてください。

☆ なお、抄録は抄録集の段階で B5 判に縮小されますので、文字や図表の大きさに注意してください。

8. 事務局

〈大会事務局〉

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

立教大学・社会学部・社会学科・木下康仁研究室内

第 32 回 日本保健医療社会学会大会事務局

大会事務局 E-mail : [REDACTED]

FAX: [REDACTED]

〈学会事務局 (学会入会の問い合わせ)〉

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院・医学系研究科・健康社会学教室内

日本保健医療社会学会事務局

E-mail : [REDACTED]

TEL [REDACTED]

FAX [REDACTED]

(第 32 回大会企画運営委員会)

II. 理事会報告

1. 第 3 回理事会報告

2005 年 7 月 28 日 於：東京大学

出席者：山崎喜比古 (学会長)、小澤温、野口裕二、平野かよ子、的場智子 (各理事)、田口良子 (学会事務局次長)

- 1) 第 31 回大会の総括：大会事務局長の天田城介氏から事前に提出されていた会計報告が総務担当理事より報告され、討議された。今後の地方開催大会に際しての注意点や、一般報告での抄録査読の必要性についても討議された。
- 2) 第 32 回大会の準備：立教大学 (池袋キャンパス) で 2006 年 5 月 13, 14 日に予定されている来年度大会に向け、6 月、7 月に各 1 回開催された大会企画運営委員会の進捗状況について、タイムスケジュールと、メインシンポジウム、2 本のラウンドテーブルディスカッションを企画していることなどが的場総務担当理事より報告され、討議した。
- 3) 学会誌 (『保健医療社会学論集』) の編集と発行について：小澤副編集委員長より、第 16 巻 1 号を 6 月 30 日付けで発行したと次号 (第 16 巻 2 号) の投稿状況、今後の編集委員会体制について報告を受けた。また、「医学中央雑誌」から「著者抄録の転載・翻訳・複製権の許諾」依頼に関し、編集委員会

内で検討することが確認された。

- 4) 定例研究会の開催について：関東担当野口理事より、9月に医療倫理とナラティブに関する企画を計画しているとの報告を受ける。
- 5) 新入会員の承認ならびに退会者の確認について：田口事務局次長より、5月12日以降7月27日までの入会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。
- 6) ニュースレターについて：平野理事より掲載記事のアウトラインについて提案があり、討議、決定した。
- 7) その他：山崎学会長より、本学会での評議員制度導入に向けて他学会へ聞き取りを計画しているとの報告を受ける。また、学会奨励賞についても今後さらに検討を進めていくことが確認された。次回の理事会は9月27日(火)15時より東京大学で開催となった。

2. 第4回理事会報告

2005年9月27日(火)15時より 於：東京大学

出席者：山崎喜比古(学会長)、小澤温、木下康仁、野口裕二、平野かよ子、的場智子(各理事)、田口良子(学会事務局次長)

- 1) 第32回大会の準備：木下次期大会長より、大会企画運営委員会体制を組んで進めている準備状況に関する報告を受け、メインシンポジウム、ラウンドテーブルディスカッション企画案について討議された。
- 2) 学会誌(『保健医療社会学論集』)の編集と発行について：木下編集委員長より、次号(第16巻2号)の投稿状況について報告を受ける。また「医学中央雑誌」からの「著者抄録の転載・翻訳・複製権の許諾」依頼にまつわる学会誌著作権について、編集委員会からの中間報告があり、来年度の学会総会に向け今後も引き続き編集委員会で検討を進めることが確認された。
- 3) 定例研究会の開催について：関東担当野口理事より、9月28日に新潟大学宮坂道夫氏による「医療倫理とナラティブ」に関する研究報告を予定していると報告を受ける。また、今回からE-mailによる定例研究会案内をスタートさせたこと、関西定例研究会の会員への案内が遅れたことについても事務局から報告があり、今後の会員への案内方法、時期などについて討議された。
- 4) 新入会員の承認ならびに退会者の確認について：田口事務局次長より、7月28日以降9月27日までの入会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。
- 5) ニュースレターについて：平野理事より掲載記事のアウトラインについて提案があり、討議、決定した。
- 6) その他：山崎学会長が中心に進めている本学会の組織体制強化について中間報告を受ける。次回の理事会は11月27日(日)13時30分より東大にて開催となった。

(総務担当理事：的場智子)

Ⅲ. 会員の声

東大・院・医・健康社会学から

山崎喜比古（東京大学大学院）

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻健康社会学教室の略号として、私は東大・院・医・健康社会学を使っている。今回は日本保健医療社会学会の学会長としてではなく、東大・院・医・健康社会学の教室主任として、「会員の声」欄に、許されるならば今回に限らず、しばらく積極的に参加していきたい。しかし、そのこと自体に、このニューズレターを会員相互のより日常的な（学会誌は年2回発行に対しニューズレターは年4回発行）情報交換・意見交換の場として積極的に活用してほしいという学会長としての会員の皆さんへのお願いが込められていることもご理解頂きたい。

東大の大学院部局化に伴い1996年に保健社会学教室が2つに分かれ、一方が健康社会学教室となり、私が教室主任・指導教官（独法化後は指導教員）として院生を迎えるようになって10年目になる。この9年間余、専攻は医学の支配・医学への従属傾向が強まる中、健康社会学の灯を煌々とまではさせないものの何とか守ってきたつもりである。この間に65名の院生を迎え、現在33名の院生が在籍し、東大の中でも最大規模の教室となっている。院生65名の出身別内訳は、東大内から28名(43%)（うち健康科学・看護学24名、社会学・教育学4名）、学外から33名(51%)（うち人文社会科学系学部出身者8名）、留学生4名。ナース有資格者は58%である。また、この9年間に39名の修士号取得者と9名の博士号取得者を出してきた。

世界水準の研究と教育をめざすことをスローガンとする東大とくに医学系研究科にあって、英文筆頭原著論文が個人や教室の業績評価基準として近年ますます比重を高めている。医学系研究科では、今年から、英文筆頭原著論文をもっていることが博士論文提出資格要件になった。そのため、数年前から、健康科学・看護学専攻の博士課程の院生たちは全員、修士論文を英文誌に投稿するようになった。健康社会学教室の院生たちの投稿先で一番多いのは Social Science & Medicine 誌で、この5年間に5本が掲載になっている。『保健医療社会学論集』も、英文タイトルや英文抄録付けの拡大、英文論文の受付などが検討されてもいいのかなと思う今日この頃である。

Ⅳ. 関東地区定例研究会

第182回 関東地区定例研究会報告

日時： 9月28日(水) 午後6時～8時

会場： 東京大学医学部3号館1階 第1講義室(S102)

テーマ： 「医療倫理学の方法 原則・手順・ナラティブ」

講師： 宮坂道夫（新潟大学）
指定発言：小宮敬子（日赤看護大学）
司会： 野口裕二（東京学芸大学）
参加者： 35名（会員20名、非会員15名）

今回は、医療倫理学に「物語論」を導入することで新境地を開きつつある新潟大の宮坂先生をお招きしてお話を伺った。医療社会学は医療倫理学から何を学び、また、両者はいかなる関係に立つべきなのか。この問題を考えることが今回の企画の目的であった。

宮坂先生は、医療倫理学の従来のあるり方を、「原則論」、「手順論」という二つの視点から整理する。「原則論」は文字通り、原則（自律尊重、無危害など）から出発して具体的な問題を解く立場であり、「手順論」は、抽象的な原則を医療従事者の具体的手順に置き換えて考えていく立場である。これに対して「物語論」は、さまざまな原則や手順の「患者にとっての意味」という点に着目する立場である。この観点を導入することによって、「原則論」や「手順論」がもっていた限界を乗り越える可能性がみえてくる。以上の3つの立場を、限られた時間のなかで丁寧にしかもたいへんわかりやすく説明していただいた。

指定発言の小宮先生からは、臨床現場において医療倫理の問題であるにもかかわらず医療倫理の問題として認識されず問題化もしないことが多いのはなぜか、また、結局のところ、現場の力関係によって倫理的判断が影響されてゆく現実などについて指摘があった。また、フロアからは、3つの立場が相互にどのような影響関係にあるのかという問題や、現場の医師が生命維持という目標からなかなか逃れられない現実などについて指摘があった。

いずれも重要な論点であり、さらに議論を深めたかったのだが、残念ながら時間切れとなった。しかしながら、今回の報告で医療倫理をめぐるいくつかの具体的な論点が明らかになるとともに、医療倫理学と医療社会学の関係について認識を深めることができたように思う。

（関東地区定例研究会担当理事：野口裕二）

V. 関西地区定例研究会

第183回 関西地区定例研究会 報告

第183回関西地区定例研究会が、10月1日（土）に大阪市立大学で開催され、お二人の報告者によって、下記の二つの演題のもと、報告がなされました。

1. 『心理士の自己コントロール』再考（中川輝彦：京都精華大学非常勤講師）
2. 「病因をめぐって——糖尿病の場合」（福島智子：関西鍼灸大学非常勤講師）

第一報告は、心理士の自己規制（self-control）に対する調査を進めておられる中川さんをお願いした。報告は、これまでの専門職の自己規制分析の過半を占め

てきた「医師」の自己規制分析を始点に、それとの対比において心理士の自己規制の特徴として「職業的自己の二重化」と「第三者」との相互作用（＝共同体的自己コントロール）の二つのメカニズムを提示し、こうした分析が旧来の専門職—自己規制論に対して持つ意義と、ヒューマンサービス職種一般に通底する課題領域を示唆する可能性を強調するものだった。

これに対して、看護職教育において「職業的自己の二重化」がすでに制度化されているという点、ヒューマンサービス職種には程度の差こそあれこうした「二重化」は共通しているのではないかという点、あるいはスーパーヴィジョンという自己規制のあり方（強制ではなく個人的選択に任されている）の「制度性」をどう考えるべきかという点をめぐって議論が交わされ、さらには今後の臨床心理士の資格・職業化への見通しと展望といった論点にまで話が進んだ。

第二報告は、糖尿病に関して多面的な研究を進めてこられた福島さんをお願いした。報告では、糖尿病の「病因」(aetiology)に関する患者自身の言説と、病気の「自己責任論」との関係を実証的データに基づいて提示するものであり、解釈類型として、特に「遺伝—環境」軸、さらにこの「環境」における「飲酒—食事—運動不足」の主要要因間の原因帰属データが質的データによって補足されつつ提示され、こうした知見から病気の「自己責任論」さらには「医療化」論との関係への考察がなされた。

医療関係従事者からは、患者の「主観的」病因規定に関するデータそれ自体に対する強い関心が示され、こうしたデータが患者教育の「効果」あるいは「評価」として活用されうる可能性が鮮明に示されたとの印象を受けた。また、「糖尿病」という病の社会的・文化的意味に関する論点、さらには「自己責任論」に関する多様な論点が提起され、熱を帯びた議論が交わされた。

準備不足で例会の日程アナウンスが遅れ、情報が必ずしも浸透したとはいえない状況であったにもかかわらず、非会員を含めて10数名の参加者を得て、活発な議論が交わされました。次回は、年明け3月中旬から下旬あたりを予定しています。今回の準備不足をお詫びするとともに、次回での多数のご参加を期待しております。

（関西地区定例研究会担当理事：進藤雄三）

VI. 看護研究部会

7月に第2回例会を開催し、「生体肝移植ドナーの意思決定の自律性と看護職のかかわり」と題し、清水準一氏（首都大学東京）による報告があった。

国内では現在年間500例弱、総数で3000例以上の生体肝移植が既に行われており、多くの肝不全患者に延命のみならず、生命・生活の質（QOL）の向上をもたらしている。その一方で、良好な健康状態にあるドナー（臓器提供者）に対し、全身麻酔と肝臓の一部を摘出という身体的侵襲を加える必要がある。こうした生体ドナーの術前から術後の状況についての全体像を明らかにしようと、報告者らのグループでは2004年に国内の生体肝移植ドナーを対象とした総合的な悉皆調査

を行った。部会では、この調査結果から明らかとなった生体肝移植ドナーの身体的負担のみならず、患者の家族として経済的、情緒的にも患者を支援する役割を抱えるという困難さの特徴を踏まえた上で、生体肝移植におけるドナーになるかどうかという意思決定の特異性や、意思決定が医療職からの情報提供の内容や学会のガイドライン、社会的な望ましさ、家族内力学の影響を受けやすい状況にあることなどが示された。そして、こうした意思決定を支援する看護のあり方や、レシピエント移植コーディネーターの大学院レベルでの養成などについての見解が述べられた。

報告後は、参加者から現在の看護教育や研究における臓器移植の位置づけを確認する質問や家族・親族間で起こりうる問題などについて討議が活発に行われた。

9月の第3回例会は「訪問看護師の日常実践活動で捉える倫理的課題」と題し、長江弘子氏（聖路加看護大学）の報告があった。これについては、要旨がまとまり次第、次号のニューズレターで報告する。

次回、第4回例会は、11月26日（土）13:00～ 於：順天堂医院 6号館2階 第三カンファレンスルーム 報告者：本多康生氏、吉田澄恵氏を予定しています。皆様のご参加をお待ちしております。 お問い合わせ等は、看護研究部会事務局 三井さよ（████████████████████）、中村美鈴（████████████████████）までお願いします。

（看護研究部会副会長：千葉京子）

Ⅶ. 編集委員会

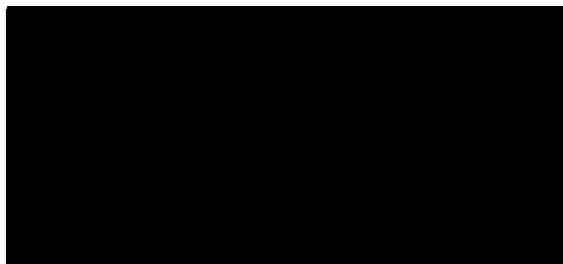
現在、第16巻2号の発行に向けて作業を進めています。5月に熊本学園大学で開催した第3回大会のシンポジウムを中心とした内容になる予定です。

また、投稿論文の受付を9月末と3月末とする新方式になって最初の締切を9月末に迎えました。混乱もなく順調に作業を進めています。

（編集委員会委員長：木下康仁）

Ⅷ. 新入会員および退会者の承認（敬称略）（7月28日～9月27日）

・入会



計7名

・退会



計2名

(学会事務局次長：田口良子)

IX. 編集後記

今回は平成18年に開催される第32回大会についてご案内することが出来ました。大会は企画運営委員会の体制で準備されています。より多くの皆様の発表と参加、そして大会運営へのご協力を期待します。

関東と関西の地区研究会そして看護研究部会では活発な論議がなされている様子が伝わります。

また、早速「会員の声」の投稿を山崎喜比古氏より頂きました。シリーズでお届けするようになるようですが、「会員の声」に対する「会員の声」もブログ調で載せていきたいです。皆様の投稿をお待ちしています。

投稿は下記にお願いいたします。

「会員の声」投稿先：

〒351-0197

埼玉県和光市南2-3-6

国立保健医療科学院 公衆衛生看護部内

「保健医療社会学会ニューズレター」編集事務局

FAX： 

E-mail： 

なお紙面の都合により、原稿の採否、若干の修正はお任せいただきますことをご了承ください。

(広報担当理事：平野かよ子)

The Japanese Society of Health and Medical Sociology

日本保健医療社会学会ニューズレター



No. 64 2006/1/31

日本保健医療社会学会事務局
東京大学大学院医学系研究科
健康社会学教室内
東京都文京区本郷 7-3-1
(編集:平野かよ子 発行:的場智子)

I. 第32回日本保健医療社会学会大会のお知らせと発表演題募集

2006年5月13日(土)、14日(日)に立教大学(池袋キャンパス)で開催予定の第32回大会のプログラムが決まりました。病いや障害をもちつつ日常を生きる人々の経験を理解し、そうした人々の日々の生きる営みを支える保健医療に関わる人々の役割を再確認し共生の地平を展望したいと考え、大会のメインテーマを「病いを生きる、生を支える」と設定しました。保健医療の原点に立ち返って、それぞれが現在の立ち位置を考えるきっかけの大会になればと願っています。

プログラムの概要は以下ようになります。なお、本学会のホームページでも大会のプログラムを紹介しています。

5月13日(土)

13:30 受付開始

14:00~15:30 一般演題セッション、要望演題セッション

15:40~18:00 メインシンポジウム

「病い・老い・トラウマを生きる ー保健医療の対象者(他者像)の再発見ー」

シンポジスト 天田 城介(熊本学園大学社会福祉学部)

朝倉 隆司(東京学芸大学養護教育講座)

溝田 友里(東京大学大学院健康社会学)

司会 立岩 真也(立命館大学大学院先端総合学術研究科)

中川 薫(首都大学東京 都市教養学部)

【懇親会】18:00~20:00

5月14日(日)

8:40 受付開始
9:10~12:00 一般演題セッション、要望演題セッション
12:00~13:00 昼休み
13:00~13:50 総会
14:00~16:00 ラウンド・テーブル・ディスカッションA
ラウンド・テーブル・ディスカッションB

【ラウンド・テーブル・ディスカッションA】

「ケアという経験の多様性 — 生活者へのまなざし」

登壇者 中村 美鈴 (自治医科大学看護学部)
岡部 明子 (東海大学健康科学部)
本多 康生 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)
山田 健司 (京都女子大学家政学部)
土屋 葉 (日本学術振興会特別研究員)

司会 三井 さよ (法政大学社会学部)
清水 準一 (首都大学東京健康福祉学部)

【ラウンド・テーブル・ディスカッションB】

「保健福祉のまちづくりが地域にとってもつ意味を問う

—何を变える? 何が变わる?」

登壇者 平野 かよ子 (国立保健医療科学院公衆衛生看護部)
山根 耕平 (浦河べてるの家)
西嶋 公子 (西嶋医院)

司会 的場 智子 (東洋大学ライフデザイン学部)
山崎 喜比古 (東京大学大学院健康社会学)

一般演題、要望演題のセッションは13日、14日の両日行います。多くの会員の参加を期待して会場の準備を進めています。なお、今回の大会の要望演題は「医療者-患者関係の転換」、「病いと文化」、「福祉制度改革と保健医療」とさせていただきます。

参加費については下記のようになります。できるだけ同封の振込用紙で事前に申し込みくださるようお願いいたします。

大会参加費：

一般会員	4月30日までの申込	4,000円
	5月1日以降・当日申込	5,000円
非会員		6,000円
学生会員	4月30日までの申込	3,000円
	5月1日以降・当日申込	4,000円
学生非会員		5,000円

懇親会費（事前申込・当日申込みいずれも）：

一般4,000円 学生2,000円

大会参加費振込口座：

郵便振替口座番号：00120-5-316696

加入者名：第32回日本保健医療社会学会大会

大会事務局：〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
立教大学社会学部社会学科木下康仁研究室内
第32回日本保健医療社会学会大会事務局

[Email: XXXXXXXXXX] [Fax: XXXXXXXXXX]

(第32回大会企画運営委員会)

II. 理事会報告

第5回理事会報告

2005年11月27日(火)13時30分より於：東京大学

出席者：山崎喜比古(学会長)、小澤温、木下康仁、進藤雄三、野口裕二、的場智子(各理事)、田口良子(学会事務局次長)

1. 組織の拡充整備に向けて：山崎学会長より、かねてより検討を進めていた会員規模の増大に見合った本学会組織の拡充整備に関する提案があり、討議を行った。
2. 第32回大会の準備：大会長の木下理事より、メインテーマと要望演題、メインシンポジウムのシンポジスト、ラウンドテーブルディスカッション(A・B)の登壇者などについて、さらにこれから演題募集、大会までの準備スケジュールについて報告があり、討議を行った。
3. 学会誌(『保健医療社会学論集』)の編集と発行について：木下理事より、16巻2号の進行状況と、9月末で締め切った際の投稿状況について報告がされた。

4. 定例研究会の開催について：関東担当の野口理事より 12 月 9 日に開催予定の件、関西担当の進藤理事より次回は 3 月頃に予定しているとの報告を受ける。
5. 新入会員の承認ならびに退会者の確認について：田口事務局次長より、9 月 28 日以降 11 月 26 日までの入会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。
6. ニュースレターについて：次号は 1 月中旬の発行をめざし、レターのアウトライン、締め切り等について平野理事より案内されることとなる。
7. その他：次回の理事会は 2006 年 3 月 27 日（月）午後 1 時より、東大にて開催する。

（総務担当理事：的場智子）

Ⅲ. 理事会で検討中の「評議員制度の創設と理事会等の拡充(案)」 について

学会長 山崎 喜比古

本学会は、研究会から学会に移行した 1989 年当時会員数は 200 人もいませんでしたが、今では 600 人を越えています。そこで、今期理事会では、会員規模の増大に見合った組織の拡充整備が必要であるとの認識に立って、昨年 5 月の第 31 回熊本大会以降、討議を進めてきました。討議は規約改定を必要とする事項から、予算を伴う変更事項、総会での報告と承認で済む事項にまで広く及んでいます。以下の「評議員制度の創設と理事会等の拡充(案)」については、今年 5 月の第 32 回大会総会で規約改定とともに承認される必要がある事項であり、きわめて大きな組織改革でもあるため、事前に会員の皆さんからのご意見をぜひ求めたいとの考えから、ご報告させて頂くことにした次第です。

(1) 評議員制度の創設

《評議員・評議員会とは》

評議員会は重要事項を審議する。本学会の学会誌編集委員会等委員の過半数は評議員より構成されるのが望ましい。評議員の任期は、理事と同じ 1 期 2 年とするが、理事と異なり、2 期以上の連続選任を妨げないものとする。

《評議員の選出方法》

理事会が会員の中から 10 数～20 人に 1 人の割で評議員を指名し、本人の承諾を取って選出する。現状では 30～40 名。地方ブロック（例えば北海道東北・関東・中部・近畿・中国四国・九州沖縄の 6 ブロック）別に、ブロック別の会員数で 30～40 人を比例（若干傾斜を加味）配分した定員を設け、評議員を選出する。指名は、ブロックごとに、性別、保健医療系・人文社会系別に著しくバランスを欠くことがないように配慮する。また、同一学部からの選出は最大 2 名までとする。

(2) 理事会等の拡充

《理事の選出人数と方法》

理事の選出方法は従来どおりであるが、理事数を、選出理事については現行5名のところ7名に、指名理事については現行2名のところ3名とし、合計現行7名を10名に増やす。指名理事は、選出理事が理事会全体の地方ブロック別、性別、保健医療系・人文社会系別のバランスを考慮に入れて、会員の中から選出する。

《理事会等の体制》

学会長の他に、従来どおりの総務担当理事、名称を変更して学会誌(現行は『論集』編集)担当理事、守備範囲や役割を拡大して研究活動推進(現行は定例研究会)担当理事、会報・広報(現行はニューズレター)担当理事、そして、新しく渉外・国際活動担当理事を設け、原則としていずれも正・副複数の理事で担当する。学会長を含めて理事は担当を兼務できることとする。実際問題、複数の理事で担当するには兼務は避けられないし、また複数で担当するメリットがあり、理事の負担の軽減のためにも必要であり、現在も一部は兼務してきている。

さらに、各理事の役務に対応する事務局機能の充実と、委員会、部会等の拡充・整備・新設が図られなければならないと考える。

IV. 関東地区定例研究会

第184回 関東地区定例研究会報告

日時： 12月9日(金) 午後6時～8時

会場： 東京大学医学部3号館1階 第1講義室(S102)

テーマ： 「精神障害者家族のコーピングに関する日米比較」

講師： 川西結子(東京学芸大学留学生センター助教授)

指定発言：大島 巖(東京大学)

司会： 野口裕二(東京学芸大学)

参加者： 22名(会員14名、非会員8名)

今回は、日米の精神障害者家族へのインタビュー調査の結果をまとめられた川西先生のお話を伺った。調査対象者は日本26人、米国24人の計50名であり、研究全体は、①症状に最初に気づいた時のこと、②家族システムの変化、③病いの意味の探求とその変化、④精神障害者とともに生きるプロセス、の4つのパートからなっているが、当日の報告では④に焦点を絞って、「行動的コーピング」、「心理的コーピング」、「強さの源泉」の3つの論点を中心に報告された。

日米の違いとしては、「行動的コーピング」では、米国ではセラピストに相談するひが多いのに対し日本では少ないこと、「心理的コーピング」では、日本では「運命として諦める」という言い方が米国よりも多いことなどが報告されたが、意外なことに、全体として見ると、日米の相違点よりもむしろ共通点のほうが多く見出されたとのことで、川西先生自身も当初は日米の文化差が色濃く反映することを予想していたが、意外な結果だったということだった。

共通点のほうが多い理由について、コメンテーターの大島先生はじめフロアからもいくつかの意見や質問があった。その理由は今後もさらに検討する必要がある

るが、いずれにせよ、ステレオタイプな比較文化論的イメージとは異なる現実を教えていただいたこと、また、コーピングに関する3つの分析視角の有効性を示していただいたことはたいへん参考になった。なお、研究の詳しい内容については、以下の文献を参照していただければ幸いである。

Yuko Kawanishi, *Families Coping with Mental Illness: Stories in the US and Japan*, Routledge, 2005

(関東地区定例研究会担当理事：野口裕二)

V. 関西地区定例研究会

今回の関西例会は、正式なタイトルおよび日時は未定ですが、医療人類学の池田光穂先生（大阪大学）からの報告をいただくことになっております。予定いただいているトピックは、「日本におけるエスニック状況と医療」とでもいうべきもので、グローバリゼーションがもたらす「内なる国際化」という課題設定のなかで、その医療現場における現実をエスノグラフィを通して提示すると同時に、人類学的方法と社会学的方法の相互関連性を再検討する、という論点をすでにかがっております。開催は3月の中旬から下旬の土曜日の午後あたりを予定していますが、タイトルおよび日時・場所が確定次第、報告させていただきます。

(関西地区定例研究会担当理事：進藤雄三)

VI. 看護研究部会

9月に第3回例会を開催し、長江弘子氏（聖路加看護大学）による「訪問看護師の日常実践活動で捉える倫理的課題—本人および家族と訪問看護師との意見の相違の記述から—」の発表がありました。

本発表は、看護師と本人・介護者との意見の相違について訪問看護師が認識した状況の記述を分析したものである。結果として、訪問看護師は主に主たる介護者と意見が対立していた。対立の内容は【サービス導入の決定】【治療・処置の方法】【病状への対応】など具体的な介護内容に関するものと【入院するか、施設かなど療養場の移行】【家族の役割】など、在宅療養を継続する上での困難感を起因とした内容であった。これらの対立は、専門家の臨床知をベースに状況判断する看護師と日常介護の困難さと対処から得た介護者の経験知に基づいて判断することから生じているものと考えられた。

第4回例会は11月に開催し、2名から発表がありました。まず、吉田澄恵氏（順天堂大学医療看護学部）の発表は「病院看護師支援システム開発にむけた研究デザインの模索—フィールドリサーチからの出発—」でした。

看護ケアの質改善を目指そうにも、個々の看護師にはコントロール困難な状況が多々ある。発表者は、状況分析を重ねる中で多角的な示唆を得、個々の看護師に重責を担わせるだけでなく、看護師を支援するしくみの開発が必要と考えようになった。しかし、こうした解釈を研究として記述しようと考えたものの、特

定概念、論、理論に準拠すると、かえって状況の本質がみえなくなると感じ、一定の方法論を適用してみようと考へても、納得できないでいる。こうした状況への示唆を求めた結果、トラブルの社会学、クレーム研究などの流れが参考になる可能性、組織における位置の異なる看護師から得られるデータの差異、コントロール困難という概念でとらえることが妥当かなど多くの活発な意見交換があった。

次の発表は、本多康生氏（東京大学大学院）の「ハンセン病療養所における看護ケアの可能性」でした。本発表は論文投稿を予定しているため、内容紹介は最小限に留めます。

社会学の立場から、ハンセン病療養所における看護ケアの質的分析を通じて、看護の普遍性を逆照射する報告であった。報告後は、活発な全体討議が行われ、社会学がハンセン病療養所の看護を扱う際に留意すべき前提条件や分析視角等について、学際的な議論が交わされた。参加者一同にとって、看護学と他領野とを架橋する本研究部会の存立意義が改めて確認される有意義な例会となった。

第5回例会は新年1月7日（土）13:00～です。

最後に、第6回例会は昨年同様、公開企画を行います。日時は、3月25日（土）14:30～16:30 於：順天堂医院6号館2階 第3カンファレンスルーム【ラウンドテーブルディスカッション：それぞれのケアという経験】司会：三井さよ（法政大学）、発言者：ケア提供者となる家族の経験—板橋真木子（立正大学）、地域ケアにおける保健師の経験—小玉敏江（東邦大学）、急性期医療現場での看護師の経験—中村美鈴（自治医科大学）、療養施設のボランティアの経験—本多康生（東京大学大学院）。

皆様のご参加をお待ちしております。お問い合わせ等は看護研究部会事務局三井さよ（XXXXXXXXXX）、中村美鈴（XXXXXXXXXX）までお願いします。

（看護研究部会副会長：千葉京子）

Ⅶ. 編集委員会

編集委員会は『保健医療社会学論集』第16巻2号の刊行に向けて作業を進めてきましたが2006年1月末に刊行の予定です。このニューズレターとほぼ同時期の発送となります。すでにお知らせしてありますが、今回の号は昨年5月の第31回大会のシンポジウムの記録を中心とした内容となります。

また、昨年9月末の締め切りに合わせて投稿された論文の査読作業を進めております。従来よりも査読のプロセスも迅速化しつつあり、この形を定着させていきたいと考えております。

次の投稿締め切りは3月末ですので、多くの会員からの投稿を期待しております。新規投稿の際の送付先は下記となります。

論文投稿先

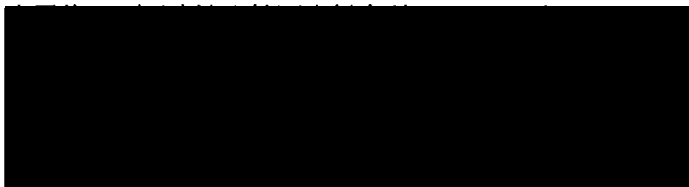
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院医学系研究科健康社会学教室内、
日本保健医療社会学会事務局内、
「保健医療社会学論集」編集事務局
電話：[REDACTED]、ファックス：[REDACTED]

編集委員長連絡先（できるだけメールでお願いします）
立教大学社会学部 木下康仁 [REDACTED]
電話&ファックス：[REDACTED]
〒171-8501 豊島区西池袋3-34-1
(編集委員会担当理事 木下康仁)

Ⅷ. 新入会員および退会者の承認（敬称略）（9月28日～11月26日）

・入会



計5名
(学会事務局次長：田口良子)

Ⅸ. 学会事務局の連絡先（電話番号）変更のお知らせ

学会事務局の電話番号が変更しました。
ご連絡をいただく際は、以下の電話番号までお願いいたします。
TEL：[REDACTED]（旧）→ [REDACTED]
（新）担当：溝田、岡本
E-mail：[REDACTED] FAX：[REDACTED] は変更ございません。

Ⅹ. 会員の声

石川ひろの（帝京大学 衛生学公衆衛生学）

米国 Johns Hopkins 大学で進行中の医学教育カリキュラム改革において、医療面接教育を中心的に担当している Debra Roter、Patricia Thomas 各氏を招聘し、シンポジウムを開催いたしますので、ご案内申し上げます。

日米の医療面接教育担当者、医療コミュニケーション研究者が、それぞれの立場から、これまでの医療コミュニケーションの理論と実証研究、その教育への応用について議論します。

医学に限らず、また医療従事者側だけでなく、患者、一般の方などにも広く呼びかけを行っています。お知り合いでご関心ありそうな方にも、ぜひクロスしてご宣伝いただけますと幸いです。

シンポジウム 「日米の医療面接教育：理論と実践の統合をめざして」

日時： 平成18年3月25日（土） 午後

場所： 東京大学農学部弥生講堂

司会： 橋本英樹（東京大学大学院 医療経営政策学）

シンポジスト： Debra Roter、Patricia Thomas（Johns Hopkins 大学）

伴信太郎（名古屋大学 総合診療部）

大滝純司（東京医科大学 総合診療部）

石川ひろの（帝京大学 衛生学公衆衛生学） <敬称略>

言語： 日本語（通訳つき）

参加費無料、予約不要です。

お問合せは、石川（[REDACTED]）までお願いいたします。

XI. 編集後記

今回は第32回学術集会のプログラムが詳細に紹介されました。一人でも多くの同僚、友人を誘ってご参加下さい。各研究会も活発に活動されていることをお伝えしました。

会長からは、「理事会で検討中の評議員制度の創設と理事会等の拡充(案)について」が報告されました。会員の皆様の忌憚のない質問、ご意見を「会員の声」としてお寄せ下さい。お寄せ頂いた声を総会で活発に議論していきましょう。

「会員の声」投稿先：

〒351-0197

埼玉県和光市南2-3-6

国立保健医療科学院 公衆衛生看護部内

「保健医療社会学会ニューズレター」編集事務局

FAX： [REDACTED]

E-mail： [REDACTED]

なお紙面の都合により、原稿の採否、若干の修正はお任せいただきますことをご了承ください。

(広報担当理事：平野かよ子)

The Japanese Society of Health and

日本保健医療社会学会ニュースレター



No. 65 2006/7/14

日本保健医療社会学会事務局

東京大学大学院医学系研究科

健康社会学教室内

東京都文京区本郷 7-3-1

(編集:平野かよ子 発行:的場智子)

I. 第32回日本保健医療社会学会大会を終えて

第32回大会が2006年5月13日(土)・14日(日)に、立教大学池袋キャンパス(東京都豊島区)で開催されました。今年の5月は週末になると天気が悪かったのですが、大会期間も天候には恵まれず来場者数について危惧致しておりました。しかし、参加者総数は一般会員112名、学生会員45名、一般非会員34名、学生非会員27名の合計218名に達し、当初の予想を上回ることができました。ご参加くださった皆様に感謝申し上げます。

今回はメインテーマ「病いを生きる、生を支える」のもと、二日間にわたり大変活発な交流がなされました。一般報告、要望演題では合計48本の申込がありました。また、メインシンポジウム、二つのラウンドテーブルディスカッションでは、活発な討論が行われ、大会事務局一同たいへん嬉しく思っております。この場をお借りして、参加者の皆様、ご登壇・司会をお引き受けくださった方々、学会員の皆様、そして大会の運営にご協力くださった皆様に心から感謝申し上げます。

立教大学では土曜日にも授業が行われるため、大会の開始が午後からとなりました。そのため全体としてスケジュールが窮屈になってしまいました。プログラムの合間の時間がもう少しあれば、参加者の間での交流もさらにできたのではないかと思っております。

開催を打診された当初は教員では学会員が一名であることもあり責任を果たせるかどうか不安もありましたが、大会運営委員会でプログラムの検討をしていただけたこともありずいぶん助かりました。会場関係の準備もどうにか間に合わせることができました。たくさんの方々のご協力の賜物と感謝しております。とはいえ、事前の準備や大会期間中において確認作業が徹底しきれず数々至らない点もあったかと存じます。大会事務局が気付いていないところでも参加者の方々にご不便をおかけした部分もあるかと思っております。そうした点については、どうかご寛恕のほどお願い致します。

今大会の「病いを生きる、生を支える」というテーマについては、きっと参加者お

一人お一人が、さまざまな形の想いを抱いていらっしやったことと思います。実際に、部会・メインシンポジウム・ラウンドテーブルディスカッションでは、多方面の研究者・実務者、そして生活者・当事者の皆様が、それぞれのお立場から意見を述べてくださり、本学会が目指すところの「集学的な研究実践の場」に近づけたのではないかと感じております。大会懇親会においても多くの参加者があり、大会プログラムに引き続きかたちで、熱心な意見交換が行われていたことがとても印象に残っております。

今後も本学会が、保健医療社会学に関心を持つ人々に対して広く開かれた場として、ますます発展していくことを祈念して、次大会の引受校の新潟国際福祉大学の大会事務局へと引継ぎをして参りたいと思います。

最後に、下記の発表は申込者の都合によりキャンセルされました。『抄録集』完成後にその旨の連絡がありましたので、記録のためにこの場に記させていただきます。

第10部会第4発表

「特殊なニーズのある子どものきょうだいを対象としたワークショップにおける討論に対する提供者の評価（大人きょうだいと専門職者による評価の相違）」

○国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所 北村 弥生、 沖
縄県立看護大学 上田 礼子

(第32回日本保健医療社会学会大会長 木下康仁)

II. 第33回日本保健医療社会学会大会のお知らせ

第33回の大会は、平成19年5月26日（土）、27日（日）の両日、新潟医療福祉大学で開催されます。新潟医療福祉大学は、現在2学部体制から3学部体制への学部再編成を計画中で、平成19年の4月からは、社会福祉学部、健康科学部、医療技術学部の3学部8学科の体制となる予定です。また、東京駅に隣接してJRが建設している35階建てのサピアタワーの10階に東京サテライトキャンパスが開設されることになっております。新潟医療福祉大学はJR白新線豊栄駅（特急で新潟から一駅目）が最寄り駅ですが、市内のバスセンターからも新潟医療福祉大学行のバスが出ており、所要時間は45分程かかります。また新潟空港からはタクシーで15分程の至近距離に位置しております。大学の足場はやや悪いのですが、新潟は食と温泉にめぐまれた自然の豊かな土地です。会員の皆様には今から来年の5月26日と27日にはぜひ新潟出張のご予定を組んでいただきたくお願いを申し上げる次第です。

日本保健医療社会学会の大会が初めて東京以外の地で開催されましたのは、奈良女子大学で開催された第26回大会でした。その後地方での開催は、龍谷大学（第29回大会）と熊本学園大学（第31回大会）でお引き受けいただき、新潟医療福祉大学が4校目になります。今後とも東京と地方で交互に大会をもつことが継続できるように、33回大会に向けて精一杯の努力をしたいと思っております。大会が成功するか否かは、

ひとえに会員の皆様のご協力、つまり大会への参加と発表にかかっておりますので、どうかご準備の程宜しく願いいたします。

大会の統一テーマにつきましては、目下の所白紙状態ですが、7月23日から29日にかけて、アフリカ大陸で初めて開催されます第16回世界社会学者会議（於 南アフリカ共和国ダーバン市コンベンションセンター。統一テーマ「The Quality of Social Existence in a Globalising World」）に参加をいたしますので、世界の動向もふまえて、学術担当理事の方々のお知恵も拝借しながら、最終的に統一テーマを決めたいと思っております。

なお、第33回大会用の電子メールアドレスを下記の通り開設いたしましたので、なんなりとご意見をお寄せいただければ幸いです。

第33回大会用電子メールアドレス： XXXXXXXXXXXX

（第32回日本保健医療社会学会大会長：新潟医療福祉大学 米林喜男）

Ⅲ. 理事会報告

1. 第6回理事会報告

2006年3月27日（月）13時より 於：東京大学

出席者：山崎喜比古（学会長）、小澤温、木下康仁、進藤雄三、野口裕二、平野かよ子、的場智子（各理事）、田口良子（学会事務局次長）

- (1) 第32回大会準備：大会長の木下理事より、開催校での施設関係や演題申し込み数、実施体制準備について報告を受けた。
- (2) 2005年度の決算と新年度の予算案、活動計画について討議した。組織の増強・拡充にむけ、必要な増額点について検討を行った。また大会総会の議題についても検討した。
- (3) 学会誌の編集と発行について：木下理事より16巻2号の構成、17巻特別号の納品予定、さらに投稿・査読の状況について報告を受けた。
- (4) 定例研究会の開催について：担当の進藤理事、野口理事より今後の予定について報告を受けた。
- (5) 広報活動（「学会案内」の作成について）：次大会に向け、学会案内の増刷を行うことを決定し、内容の修正について討議した。
- (6) 新入会員および退会者の承認：田口事務局次長より11月27日から3月26日までの会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。
- (7) その他：事務局より住所不明会員への対応について提案があり、今後ニューズレターで不明会員について情報提供を求めていくようにすることが決まった。また、事務局より、入会申込書の形式変更について提案があり、承認された。次回の理事会は5月13日（土）立教大学にて10時より開催されることとなった。

2. 第7回理事会報告

2006年5月13日(土)10時より 於：立教大学池袋キャンパス

出席者：山崎喜比古(学会長)、小澤温、木下康仁、進藤雄三、野口裕二、平野かよ子、的場智子(各理事)、田口良子・溝田友里(学会事務局次長)、望月美栄子(学会事務局次長補佐)

- (1) 第32回大会の運営ならびに総会に報告・提案する事項について、検討し決定した。
- (2) 山崎学会長より、溝田・新事務局次長と望月次長補佐の紹介が行われた。
- (3) 新入会員の承認ならびに退会者の確認について：溝田事務局次長より、3月26日以降5月12日までの入会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。次回理事会は7月1日(土)13時より、東京大学にて開催することになった。

(総務担当理事：的場智子)

IV. 総会報告

学会の総会は、2006年5月14日に立教大学にて行われた。議事次第と審議結果は以下の通りである。

開会の辞

学会長 挨拶

議長選出

朝倉隆司(東京学芸大学)が議長に選出される。

第1号議案 2005(平成17)年度事業報告

1. 日本保健医療社会学会大会・総会の開催について

第31回大会(熊本学園大、2005年5月)の開催。第32回大会(立教大学、2006年5月)の準備

2. 保健医療社会学論集について

学会大会抄録集を論集の特別号として、第16巻は特別号、1号、2号の3号分を発行した。

3. 定例研究会・研究部会について

定例研究会—関東3回、関西2回の開催。看護研究部会—6回。これらに対し学会から財政的補助が図られた。

4. 日本保健医療社会学会ニューズレターについて：3号分の発行。

5. その他：「学会事務局は当分の間、東大大学院健康社会学教室におく。」「事務局次長を設け、理事会にオブザーバー参加してもらう。」として5年経過。「編集委員会事務局は学会事務局内におく」として1年経過。

第2号議案 2005(平成17)年度決算報告、監査報告
日本保健医療社会学会2005年度決算書

自2005年4月1日 至2006年3月31日

単位：円

収入の部				支出の部			
	予算額	決算額	差異		予算額	決算額	差異
前期繰越金	1,282,809	1,282,809	0	印刷製本費	1,540,000	943,660	596,340
会費収入	3,300,000	3,210,000	△ 90,000	郵送費	620,000	620,300	△ 300
学会誌刊行物売上	220,000	342,120	122,120	交通費	270,000	115,480	154,520
受取利息	10	13	3	事務局人件費	360,000	359,150	850
広告収入	30,000	0	△ 30,000	学会誌編集費	100,000	53,173	46,827
定例研究会参加費		6,000	6,000	消耗品費	210,000	254,582	△ 44,582
				会議費	80,000	6,280	73,720
				大会・研究会・部会活動補助費	360,000	340,440	19,560
				その他(振り込み手数料等)	3,000	4,255	△ 1,255
				予備費	1,289,819	2,143,622	△ 853,803
合計	4,832,819	4,840,942	8,123	合計	4,832,819	4,840,942	△ 8,123

日本保健医療社会学会2005年度会計についての監査の結果、適正なもの認めます。

2006年5月3日 会計監査 園田 恭一 印

2006年5月9日 会計監査 河口てる子 印

第3号議案 学会規約の改正

提案主旨：本学会は、研究会から学会に移行した当時は200人程度であった会員数も、十数年の歳月を経て、今日では600人を超えている。しかるに、役員等の体制は当時とほとんど変わっておらず、各役員等の負担が増大している。学会の安定した一層の質的量的発展のために、会員規模の増大に見合った組織の拡充整備はもはや一刻の猶予も許さない状況にある。そのため、今回の総会において、現行の規約の範囲内でもできる理事会・事務局・委員会・部会などの機能の充実や分担の改善に努めるといふ今年度方針とともに、次年度からの施行をめざし、多くの会員に学会活動を担って頂くことを趣旨とする、理事の増員と評議員制度の創設、渉外・国際活動の明記に関する規約改正を提案する。

<現行>

第3章 役員

第10条 本会は7名の理事を置く。

第11条 理事は次のように構成する。

1. 理事のうち、5名は会員の直接選挙によって選出する。選挙の手続きは別に定める。
2. 理事のうち、2名は専攻分野等を考慮しつつ、直接選挙によって選出された理事が指名する。

<改定案>

第10条 本会は10名の理事を置く。

第11条 理事は次のように構成する。

1. 理事のうち、7名は会員の直接選挙によって選出する。選挙の手続きは別に定める。
 2. 理事のうち、3名は専攻分野等を考慮しつつ、直接選挙によって選出された理事が指名する。
2. 評議員、評議員会の創設

<改定案>

第3章 役員 の第12条のあとに新しく、

第13条 本会には評議員を置く。評議員の任期は1期2カ年とし、選出方法および選出数については、別に定める。

を設ける。

現行の 第4章 会議 の第13条は、第14条とし、そのあとに新しく、

第15条 評議員会は、会長がこれを招集し、学会の重要事項について審議する。

を設ける。

現行の第14条以下第20条までは、条項の番号を、第16条以下第22条までに付け替える。

3. 渉外・国際活動の明記

<現行>

第1章 総則

第3条 本会は前条の目的を達するため、次の事業を行う。

5. 機関誌『保健医療社会学論集』の発行
6. 研究成果の刊行

<改定案>

5. 機関誌『保健医療社会学論集』その他の出版物の刊行
6. 国内外の関連学会等との連携

付則3 として

本規約は2007年4月1日に改正施行する。

を付け加える。

第4号議案 2006（平成18）年度事業計画

1. 日本保健医療社会学会大会・総会の開催について：第32回大会を立教大学（2006年5月）の開催。第33回大会は新潟医療福祉大学で（2007年5月26-27日）開催を予定
2. 保健医療社会学論集について：第17巻の特別号、1号、2号を発行。
3. 研究活動について
定例研究会、研究部会：2005年度の継承。

学会奨励賞の設置

- ①目的：保健医療社会学の若手研究者の活性化を目指す。
 - ②選考対象：過去1年間の本学会誌に掲載された投稿論文（原著、総説、研究ノート）のうち、特に優れたもので、著者の年齢が40歳未満であるもの、または研究歴が10年未満とみなせるもの。
 - ③選考数：若干名
 - ④選考方法：理事会が選任した選考委員による議を経て理事会が決定する。
 - ⑤発表：大会総会で授賞式をおこない、ニューズレターに選考経過を掲載する。
4. 会報、広報について：ニューズレター3回発行、ホームページの充実
 5. 理事・監事の改選
 6. その他：理事担当名称の若干の変更と新設について
『論集』編集担当理事→学会誌担当理事、定例研究会担当理事→研究活動担当理事
ニューズレター担当理事→会報・広報担当理事、渉外・国際活動担当理事を新設

第5号議案 2006（平成18）年度予算計画

日本保健医療社会学会2006年度予算書

自2006年4月1日 至2007年3月31日

単位：円

収入の部	予算額	支出の部	予算額
前期繰越金	2,143,622	印刷製本費	1,540,000
会費収入(6000円×480人分、新会員7000円×70人分)	3,370,000	郵送費	705,000
学会誌刊行物売上	220,000	交通費(理事会170,000円、編集委員会150,000円)	320,000
受取利息	10	事務局人件費	529,000
広告収入	30,000	学会誌編集費(郵送費、人件費、消耗品費)	100,000
		消耗品費	250,000
		会議費(理事会・編集委員会の会場費・茶菓代)	80,000
		大会・研究会・部会活動補助費	360,000
		その他(振り込み手数料等)	3,000
		予備費	1,876,632
合計	5,763,632	合計	5,763,632

第6号議案 著作権の学会帰属について（資料：総会報告の文末に添付）

近年、情報のデジタル化、データベースなどの普及により学会刊行物の著作についてその使用、転載を学会に認めていただく必要が生ずるようになってきました。学会出版物に掲載されている論文等の使用・転載が円滑に実施できる条件として、それらの著作権が学会に帰属していることを確認する必要があります。日本保健医療社会学会は2006年5月14日の総会において添付の著作権譲渡についての覚書を承認しました。

これにより著作者の権利を保全しつつ、学会刊行物を広く知ってもらうことが可能となります。

本件は2006年9月末投稿〆切時における新規投稿論文から適用され、掲載が決定した論文の著者には添付資料（「著作物使用・転載許可のおねがい」）にしたがい同意を得る手続きが取られることとなります。

閉会の辞

（総務担当理事：的場智子）

【総会資料】

『保健医療社会学論集』著作権譲渡についての覚書

1. 日本保健医療社会学会（以下「本学会」という。）総会（2006年5月14日）の決議により、本誌にて発表された論文等のすべての著作物について、その著作権は本学会に譲渡されるものとします。この著作権譲渡により、著者の皆さんの論文を印刷媒体あるいは電子媒体で複製する許諾の要請について、市場の動向および各国の著作権法の関連部分の改訂に応じて適法に取り扱われること、および、権利侵害から著者および発行者双方の権利を保護しながら、本誌を可能な限り広範に流通させることが保証されます。
2. 本学会は、著作権法の規定を遵守して、論文が発表される際に、著者名を表示し、その他の著作者人格権を尊重します。著作者人格権は本学会に移転せず、本学会はその管理権限を有せず保全管理の義務を負いません。
3. 著作権は譲渡されますが、著者は、将来自らの論集において当該著作物を無料で利用する権利を留保します。ただし、本誌（『保健医療社会学論集』）での先行発表を承認すること、および著作権者である本学会に事前に通知をすることを条件とします。
4. 著者は、著者自身の講義および研究の目的で、自身の論文を複写したり電子メールやFAXによって配布したりホームページに掲載することができます。ただしその場合には、(a) 複写物を転売してはならず、(b) 論文の全文複写・部分複写を問わず、全ての複写物（ホームページへの掲載の場合は当該ホームページ上）に出典（『保健医療社会学論集』）および著作権者（日本保健医療社会学会）を明記しなくてはなりません。
5. 著者抄録等に限りデータベース・サービスにより著作権使用料が生ずる場合にはそれを学会に寄付していただくこととし、学会は総会においてその会計報告を行います。

6. 論文を商業的な目的で再録する許諾を本学会が第三者に与える場合は、事前に著者の同意を求めます。(ただし、本学会に対して届出のあった最新の住所に書面を送付してから 30 日以内に著者から応答がない場合には、同意があったものとします。) 許諾に際して第三者から支払われる著作物利用料については、著者が受領するものとし、共著の場合には、さしあたり第一著者に対して支払います。共著の場合の内部分配については、本学会は関知しません。
7. 著者以外の者(例えば、著者の雇用主)が著作権者である場合には、著者は著作権者に対し、第三者に対して再録を許諾する権限を、本誌の出版社に対して非独占的に許諾させるものとします。かかる再録要請の処理は上掲第 6 項にしたがって行われ、全ての通知は著者に宛てて行われます。著者は、著作権者を代理して当該通知を受けるために必要な権限を著作権者から得ておくものとします。なお、第三者から支払われた著作物利用料金を著者と著作権者との間でどのようにに分配するかについては、両者の判断に任せるものとします。 以上

V. 定例研究会報告

第 185 回 関東地区定例研究会報告

日 時： 3 月 22 日(水) 午後 6 時～8 時

会 場： 東京大学医学部 3 号館 1 階 第 1 講義室

- ① 「心理学的疾患言説における精神/身体/外部環境
— 20 世紀日本の大衆メディア言説を対象として」
佐藤雅浩 (東京大学大学院人文社会系研究科)
- ② 「ケアの倫理」と「ケア労働」
山根純佳 (東京大学大学院人文社会系研究科)

今回はお二人の若手研究者に報告をお願いした。佐藤氏は、20 世紀日本の大衆メディアに現れた心理学的疾患に関する言説(「神経衰弱」、「ノイローゼ」、「ストレス」など)を検討して、近年問題化されている「社会の心理学化」が必ずしも近年だけの現象ではないことをそれぞれの時代背景と関連づけて報告した。

山根氏は、ケアの倫理とケア労働に関するこれまでの実証的研究が、もっぱら女性を研究対象とし、個人の道徳性の発達という文脈で論じられてきたことを明らかにし、ケア提供者のおかれた歴史的社会的条件が無視されてきたことのもつ問題性を指摘した。

いずれも、文献資料に基づく理論的な研究であったが、フロアからはこのような知見を臨床現場における実感や実践とどうつなげていくことができるのかについて質問や意見が出された。メディア、研究者、臨床家、一般大衆など、さまざまな立場から発せられる言説の相互関係について、あらためて注意深く考察をする必要があること

を感じた例会であった。

(研究活動担当理事：野口裕二)

看護研究部会報告

1) 平成17年度第5回例会

平成17年度第5回例会を平成18年1月7日(土)に開催し、2名の発表がありました。中村美鈴氏(自治医科大学)による「上部消化管がん患者が手術後の生活で困っている内容とその支援」の発表がありました。上部消化管がん患者が手術後の生活で困っている内容や問題を把握し、その支援方法を検討するため、自由記述式質問紙調査を行い、得られたデータを質的に患者の生活の視点からの分類抽象化の結果、14の生活で困っている内容が見出されました。その中で最も記述頻度が多いものは「生活行動において体力低下で困る」で、手術後の生活で筋肉の萎縮を予防し体力向上のための看護支援が重要であること、また、これらの14の生活で困っている内容は、術後の生活支援の指標となり、術前の情報提供となりうることが示唆されました。

板橋真木子氏(立正大学)による「看護職による『家族の医療化』と権利概念・人権思想」の発表がありました。今日、患者本人および患者の家族に対しても看護師たちの関心が向けられてきていることを踏まえ、新たな分野である「家族看護学」における家族の定義づけや、家族への「科学的」かつ「客観的」アプローチの方法から、看護のなかで(如いては医療において)立ち現れる家族観・家族像とその特徴についての基礎的な理解の試みが報告されました。中でも、「家族看護学」のなかでは家族は(1)集団として(2)個別の家族成員としての両方の意味を混在させて用いられており、それにはどのような事情があるかという点について、看護師、保健師などの職業的特質や立ち位置の違いなども含め、活発な議論が行われました。

2) ラウンドテーブルディスカッション

平成18年3月25日(土)に公開企画の「それぞれのケアという経験」と題し、発題者4名によるラウンドテーブルディスカッションが開催されました。

まず、板橋真木子氏(立正大学)が、「ケア提供者となる家族の経験」と題して、うつ病の夫を支える妻たちの経験について報告しました。妻たちが医学的知識・生活上の知識を学習する一方、近代家族規範のもとで苦しんでいることを明らかにすると同時に、妻たちを代替不可能な caregiver として捉えるのではなく、一時的にケアを担っているという意味での caretaker として捉えるあり方の重要性が提起されました。

次に、小玉敏江氏(東邦大学)が、「地域ケアにおける「保健婦」の経験」と題して、1960年代末期から1970年代における保健婦活動について、時代背景を踏まえた報告がありました。特に在宅老人が入院となる過程を事例検討するなかで、個人にとっての治療やケアは、性別をはじめ家族やそれを支える社会サービス等の社会的環境要素が治療やケアに大きく影響していることを明らかにしました。

続いて、中村美鈴氏(自治医科大学)が、「急性期医療現場での看護師の経験」と題して、急性期医療を受けている患者の生活を支えるための観点について報告がありました。急性期にある患者の体験や反応について記述し、その内容を踏まえケア提供者は患者の過去と未来を視野に入れた上での「現在」をより深く広く知りかかわるこの

ことの重要性、ならびに患者とケア提供者の相互関係がもたらす意味について提言されました。

最後に、本多康生氏（東京大学大学院）が、「療養施設のボランティアの経験」と題して、ハンセン病療養所の入所者や退所者の生活支援を行っている支援ボランティアの経験について報告しました。療養所の周辺地域に居住する住民の生活世界を丹念に辿ることで、療養所に無関心な人々が個別具体的な入所者と出会い、入所者と（具体的他者）として関わるのが、個々の入所者の社会関係を拡大する上で重要な意味を持つことが明らかにされました。

その後、参加者と1時間程度の濃密な議論が展開され、ケアの受け手の違い（うつ病の夫、在宅高齢者、急性期患者、ハンセン病療養所入所者）についてはもちろん、ケア提供者側の違い（家族、支援ボランティア、保健師と病院看護師）などについても検討されました。また、多くの事例に共通する点についても議論が展開され、社会性、具体的他者、代替不可能性などの概念について多角的に検討がなされました。

3) 平成18年度総会と第1回例会

平成18年4月に平成18年度総会と第1回例会が開催されました。総会では新役員体制への移行が議決され、会長は中村美鈴氏（自治医科大学）、副会長は三井さよ（法政大学）、事務局は清水準一氏（首都大学東京）、板橋真木子氏（立正大学）となりました。

例会では、吉田澄恵氏（順天堂大学）から、「看護師を対象とした看護学研究と社会学研究に関する一考察」という発表がありました。看護師を対象とした諸研究（社会心理学、社会学、管理論、経営論、教育制度論等も含め）に接近してきた報告者から、看護職である自らを測定用具としフィールドワークによって見出す研究成果は、社会学者が見出した成果とどのような点で異なるものとなる必要があるのか、という問題提起がありました。看護職を対象とした社会学研究は、看護職が構成員である社会状況を描きだし、看護学研究は、看護職が自らのおかれた社会状況を解釈することに貢献すると位置づけ、その社会状況の中で、看護職として何をどのように解釈し、どのように行為することが看護となるのか、また、看護を続けるためにどのような社会状況が必要なのか、社会状況に参加していくのかを示す必要があるのではないかと主張がなされました。

問い合わせ先：看護研究部会事務局；板橋真木子()
清水準一()

VI. 編集委員会報告

編集委員会は、第32回大会抄録集を第17巻特別号として刊行しました。引き続き、第17巻1号の刊行に向けて現在編集作業を進めています。次号は総説1編、原著論文2編、研究ノート2編、書評1件で構成される予定です。本来は6月末の刊行ですが、約1ヶ月遅れて7月下旬となる見込みです。

投稿の受付を締切制として昨年9月末、本年3月末とこれまでに二回経験し、徐々にはありますが定着してきたように感じています。締切制の一つの効果として、査

読プロセスが従来よりも迅速になってきております。これは査読を担当される先生方のご理解とご協力のおかげでもあり、この場をかりて感謝申し上げます。

大会前日に立教大学において編集委員会を開催し、さまざまな改善点について検討しました。可能なところから実現していきますが、次期の編集委員会体制に向けて今年度も引き続き検討してまいります。

なお、総会の報告にあるように、保健医療社会学論集に掲載された著作物の本学会への著作権の帰属が総会で議決されました。これに伴い、編集委員会では投稿規定を改定し、「10.本誌に掲載される著作物の著作権は日本保健医療社会学会に帰属する」を新規に追加し、現行の「10.」をずらし「11.本規定の改廃は編集委員会で決定する」とします。次回締め切り時における新規投稿論文から適用されますので、ご承知おきください。

さて、次の投稿締切は9月末です。大会で報告された方々、また、日ごろの研究の成果をお持ちの方々など、多くの会員からの投稿を期待しております。投稿の際の送付先は下記となります。

論文投稿先

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院医学系研究科健康社会学教室内、

日本保健医療社会学会事務局内、「保健医療社会学論集」編集事務局

電話： [REDACTED] ファックス： [REDACTED]

編集委員長連絡先：立教大学社会学部 木下康仁 [REDACTED]

(学会誌担当理事：木下康仁)

VII. 会員の声

講演会のお知らせ

フランスの経済学者であり、メディテラネ大学教授の P.モッセ (P.Mosse) 氏の講演会を開催します。同氏は、経済労働社会学 (LEST) の所長で、フランス厚生省政策エキスパートです。

日時：9月1日(金) 15時～17時

場所：東洋大学白山キャンパス5号館(会場へは入口の掲示に従ってください)

テーマ：「フランスと日本の医療改革」

東洋大学白山キャンパスへの交通機関

地下鉄三田線白山駅、南北線本駒込駅から徒歩5分です。

参加無料、事前申し込み不要

問い合わせ先：東洋大学社会学部 原山宛 [REDACTED]

公開シンポジウムのお知らせ

第22回日本社会病理学会公開シンポジウム

テーマ：社会変革と新たな排除——制度化のパラドクス

「教育」あるいは「福祉」という具体的な制度フィールドにおいて、「包摂」を意図した近年の制度改革が、現実的には新たな「社会的排除」を生み出しつつある現状を実証的データに基づいて提示すると同時に、こうした事態が社会病理学・社会問題論にいかなる問題を提起しているのかを検討することを目指します。

日時：2006年9月30日（土）14：15～17：15

会場：京都府立大学 合同講義棟3階 第7講義室

シンポジスト：矢島正見（中央大学文学部教授）

北野誠一（東洋大学ライフデザイン学部教授）

本田由紀（東京大学社会科学研究所助教授）

コーディネーター：進藤雄三（大阪市立大学文学部教授）

京都府立大学への交通機関

JR京都駅→地下鉄烏丸線「北山」下車または「北大路」下車

市バス4番→「北園町」下車、市バス1番205番・206番→「府立大学前」下車

参加無料、申し込み不用

問い合わせ先：京都府立大学福祉社会学部 高原研究室 TEL. (075) 831-2111

報告会のお知らせ

「患者の語り」データベースづくりに関心をお持ちの研究者へ

山崎喜比古（東京大学大学院健康社会学）

去る6月半ば、「患者の語り」データベースDIPExの日本版を作りたいということで発足したDIPEx-Japan設立検討委員会（委員長は別府宏圀氏、副委員長は中山健夫京大教授）の佐藤（佐久間）りか氏が日本保健医療社会学会長の私のところへ来られました。取り組みの趣旨に賛同でき、会員の参加協力への熱い思いも伝わりましたので、下記の報告会についてお知らせいたします。

報告会

「患者の語り」データベースの可能性を探る：DIPEx (Database of Personal Experiences of Health and Illness) について

報告者：佐藤（佐久間）りか（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター・社会学）

日時：2006年7月16日（日）午後1時～4時

場所：東京大学本郷キャンパス薬学部講堂（薬学系総合研究棟2F）

申込み方法：[住所]まで氏名・所属・連絡先を明記して申込む

定員：176人

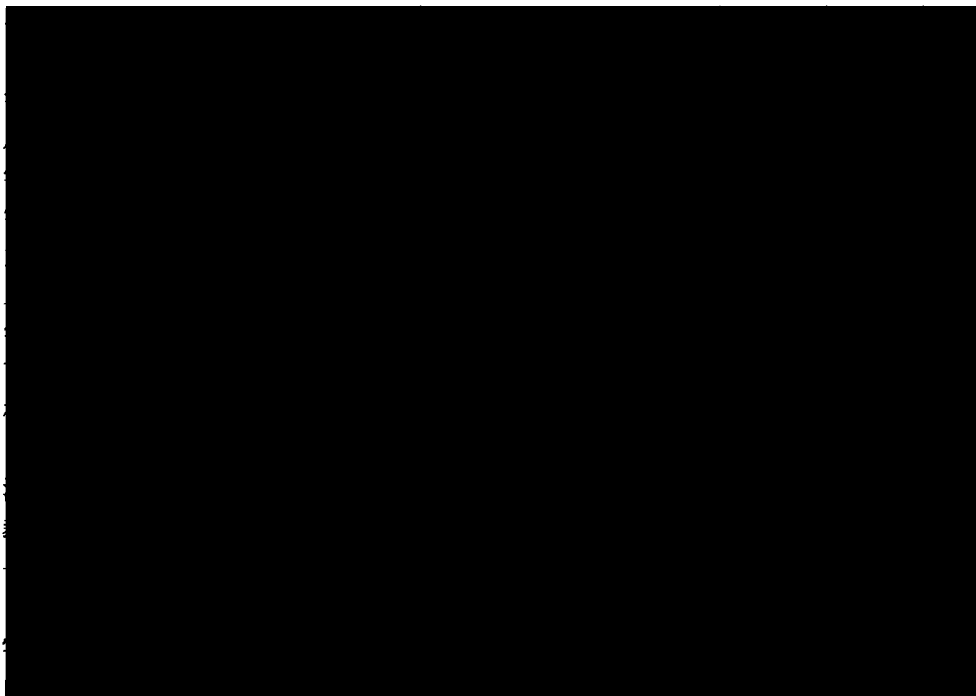
主催：DIPEx-Japan 設立検討委員会

http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_10_02_j.html

オックスフォード大学が作っているインターネット上の「患者の語り」のデータベースについて、2回の現地訪問で得られた情報を、国内のナラティブ・ベイスド・メディシン (NBM) や病 (やまい) 体験の質的研究、患者の主体的な医療参加に関心をお持ちの方々にお伝えし、日本版 DIPEx 設立の可能性について一緒に語り合う会です。DIPEx のサイトをご覧になったことのない方は、日本語のゲートウェイを作りましたので、そちらからアクセスしてみてください (<http://homepage2.nifty.com/dipex-j/>)。

新入会員および退会者 (敬称略) (11月27日～5月12日)

・入会



計 40 名

・退会



計 16 名

・資格喪失による退会



計 6 名

学会事務局からのお願い

連絡先がわからなくなっている会員の方 (敬称略)



連絡先をご存知の方は、学会事務局までお知らせ下さい。

学会事務局 (E-mail: [REDACTED]) FAX: [REDACTED]

(学会事務局次長：溝田友里)

VIII. 編集後記

今回は第32回大会および総会の報告と第33回大会のご案内等を掲載いたしました。木下大会長とご協力下さいました立教大学の皆様に心から感謝致します。

会員から講演会・シンポジウムのご案内を頂きました。今後とも「会員の声」をお寄せ下さい。

「会員の声」投稿先：

〒351-0197 埼玉県和光市南2-3-6

国立保健医療科学院 公衆衛生看護部内

「保健医療社会学会ニューズレター」編集事務局

FAX: [REDACTED] E-mail: [REDACTED]

なお紙面の都合により、原稿の採否、若干の修正はお任せいただきますことをご了承ください。

(広報担当理事：平野かよ子)

The Japanese Society of Health and

日本保健医療社会学会ニュースレター



No. 66 2006/11/17

日本保健医療社会学会事務局
東京大学大学院医学系研究科
健康社会学教室内
東京都文京区本郷 7-3-1
(編集:平野かよ子 発行:的場智子)

I. 第33回日本保健医療社会学会大会のご案内

1. 日程変更と大会テーマのお知らせ

第33回大会の日程については、すでに来年5月26日と27日ということでご案内してまいりましたが、都合により予定を1週間繰り上げて、以下の日程に変更いたします。すでにご予定を立てられている方にはたいへんご迷惑をおかけしますが、何とぞご了承くださいますようお願い申し上げます。

日時: 2007年5月19日(土)、20日(日)

会場: 新潟医療福祉大学 (〒950-3198 新潟市島見町 1398)

テーマ: 格差と保健・医療・福祉(仮)

趣旨: 近年、格差の問題が様々な形で取り上げられているが、保健、医療そして福祉の分野において、格差にかかわる問題は非常に古くからの課題であるといえる。そこで本大会においては、この課題を現代的な背景を踏まえて、新たに捉えなおすことを目的とし、様々な領域からこの問題に対してアプローチを行い、保健医療社会学という学問領域からの検討を行うこととする。

2. 「自主企画ラウンドテーブル・ディスカッション」の公募について

来年度大会における「自主企画ラウンドテーブル・ディスカッション」を公募いたします。

これまでの大会では、二つのラウンドテーブル・ディスカッションが同時開催され

るのが通例でしたが、近年の会員数の増加もあって、ひとつのセッションあたりの参加者数が多くなり、ラウンドテーブル本来の自由な討論がしにくいという問題がありました。

そこで次回大会では、最低でも4つのセッションが同時並行するようにして、個々のセッションの人数を少なくし、ラウンドテーブル本来の持ち味を出したいと思えます。これに伴い、会員の方々の「自主企画ラウンドテーブル・ディスカッション」を募集いたします。

応募要領

① 企画者および話題提供者:

企画者(兼司会者)1名と話題提供者2~3名でひとつのセッションとする。企画者は現に本学会会員であること、話題提供者は大会当日に会員であることを要する。

② テーマおよび企画の趣旨:

本学会で議論するにふさわしいテーマであること。

企画の趣旨を200字程度にまとめる。

③ 応募締切り: 2006年12月28日

④ 採否の決定: 研究活動委員会で採否を決定する。

企画者は、上記①と②を明記して、メールで下記研究担当理事宛にご応募ください。また、この件に関するお問い合わせもメールにてお願いいたします。

みなさまの積極的なご応募、ご参加をお待ちしております。

メールアドレス

(研究活動担当理事: 野口裕二)

II. 理事会報告

1. 第8回理事会 2006年7月1日(土) 13時より 於: 東京大学

出席者: 山崎喜比古(学会長)、小澤温、木下康仁、進藤雄三、野口裕二、平野かよ子、的場智子(各理事)、溝田友里(学会事務局次長)、望月美栄子(学会事務局次長補佐)

- (1) 第32回大会の総括: 大会長の木下理事より大会の決算報告を受ける。一般演題の中に、幾分研究として到達度が低いと思われるものがあつたことについて、今後は演題申し込み時の抄録で形式だけでもチェックし、求められた形式に則って作成されていないものは受け付けない旨を演題募集時に広く知らせていくということで合意された。またラウンドテーブルディスカッションとシンポジウムの実施の仕方についても討議された。
- (2) 第33回大会について: 今後、研究活動担当理事と次期開催校との間で開催テ

ーマや企画運営体制について検討することが報告された。

- (3) 学会誌の編集と発行について：木下理事より次号 17 号 1 号の編集状況について、また次々号の掲載予定論文について。また投稿締め切りを設定して以降、査読サイクルがほぼ安定してきていることも報告を受ける。
- (4) 定例研究会の開催について：担当の進藤理事、野口理事より今後の予定について報告を受けた。
- (5) 新入会員および退会者の承認：溝田事務局次長より 5 月 13 日から 6 月 30 日までの入会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。
- (6) その他：総務担当理事より、日本学術会議組織改革後の新体制として設立された社会福祉系学会連絡協議会への登録を済ませたことが報告された。医学文献配信サイト「メディカルオンライン」への学会誌の登録について討議し、登録することとなる。次回の理事会は 9 月 26 日 15 時より東京大学において開催されることとなった。

2. 第 9 回理事会 2006 年 9 月 26 日 (火) 13 時より 於：東京大学

出席者：山崎喜比古 (学会長)、野口裕二、的場智子 (各理事)、溝田友里 (学会事務局次長)

- (1) 第 33 回大会に向けて：野口理事より、新潟医療福祉大学の米林先生、藤澤先生と全体テーマやシンポジウムについて検討中であると報告を受ける。
- (2) 学会誌の編集と発行について：担当の木下理事が欠席のため、総務担当理事より、17 巻 1 号を 7 月に刊行したこと、17 巻 2 号は 12 月に刊行が予定されていると報告される。
- (3) 定例研究会について：担当の野口理事より、次回の予定について報告を受ける。
- (4) 新入会員および退会者の承認：溝田事務局次長より 6 月 30 日から 9 月 25 日までの入会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。
- (5) その他：山崎学会長より、事務局の外注化についてヒヤリングを実施したとの報告があった。次回の理事会は 12 月 10 日 (土) 13 時から東大で開催されることになった。

Ⅲ. 定例研究会報告

第 187 回 関東地区定例研究会報告

日 時： 9 月 26 日(火) 午後 6 時～8 時

会 場： 東京大学医学部 3 号館 1 階 第 1 講義室

講 師： 橋本英樹 (東京大学 22 世紀医療センター客員教授)

演 題： 「社会格差と健康： 社会疫学の現状そして批判的考察」

討論者： 朝倉隆司 (東京学芸大学)

今回は、最近出版された「社会格差と健康」の著者の一人である橋本英樹先生にお

願いして、この本の内容をご紹介いただくとともに、社会疫学の今後の方向性について論じていただいた。主な内容は、①内外の社会疫学的研究の展開、②社会疫学的研究と疫学研究の間の理論および方法論的論議、③社会疫学上の論争、④社会疫学の社会学的考察、とたいへん多岐にわたっており、そのすべてをここで紹介することはできないが、「社会疫学」と「疫学」の間には一般に想像される以上の大きな壁があること、社会疫学における社会学の変数の取り扱い方に関して乗り越えるべき理論的方法論的問題が数多くあること、さらに、社会疫学で関心を集めるトピックが時代の政治状況や政治理論と密接な関連があることなど、たいへん示唆深い内容だった。そして、近年の「格差社会」論の隆盛にもかかわらず、「実態すらつかめないうちに議論が先行」していること、「何の格差か、どの程度か、なぜ問題なのか」に関する理論的整理もいまだ進んでいないことなど、この問題を研究するうえでの多くの課題が明らかになった。討論者およびフロアからも、これら多様な論点に関して多くの突っ込んだ質問やコメントが寄せられた。たいへん密度の濃い内容であり、また機会をあらためて議論を継続していきたいと感じさせる研究会であった。(参考文献) 川上憲人・橋本英樹・小林廉毅「社会格差と健康」、東大出版会、2006 (研究活動担当理事:野口裕二)

第185回日本本保健医療社会学会関西定例研究会報告

今年の3月28日(火)、梅田駅前第二ビル6階の大阪市立大学の文化交流センター会議室にて、午後2時から5時まで、大阪大学コミュニケーションデザイン(OSCD)所属で医療人類学を専攻されている池田光穂先生を講師に迎え、「医療と人権——文化人類学の観点から考える」とのタイトルで報告頂きました。

報告の内容は、20世紀型人権概念の特徴をとらえた上で、日本における「医療と人権」派(=労働衛生学派、医学史研究会、東大PRC、『技術と人間』派)の思想に対して、澤瀉久敬から中川米造にいたる大阪大学の医学概論の系譜のなかに異なった思想的系譜を発掘し、両者の対比を強調した上で、現在の日本社会に生起しつつある「医療と人権」問題にどう切り込んでいくべきか、そのためにはいかなる研究方法が必要とされるのかに関し、ホンジュラス、グアテマラにおける民族誌調査を引き合いに出しつつ、問題提起がなされました。

日本の医療の歴史的文脈に対する解釈と、グローバルな人権問題、調査値での問題に関係づけた、ポレミカルな内容を含んだ講演で、報告後に活発な質疑応答がなされた。

今回は、12月3日(日)の午後に、看護職のバーンアウト研究をテーマに、山口県立大学の田中マキ子先生にご報告いただく予定となっております(田中先生の近刊書『看護教育の病理——バーンアウト再生産のしくみ』多賀出版、2005をご参照ください)。詳細が決定次第また連絡させていただきますので、ご参加くださいますようお願いいたします。

(研究活動担当理事:進藤雄三)

看護研究部会報告

2006年度第二回例会は、6月24日(土)13:30から、法政大学市ヶ谷キャンパスで行われ、山崎裕二氏(日本赤十字看護大学)から、「男性看護師の養成の歴史を学ぶ——看護教育のジェンダー問題を考えるために——」と題した報告がありました。報告内容は次の通りです。

男性看護師養成の戦前史として日本赤十字社と精神病院での養成があげられます。前者は、戦地救護員は男性に限るとの陸軍の要請を受け1896年から開始され昭和に入る頃まで行われていました。後者の代表である東京府巢鴨病院(後の松沢病院)では1903年から普通看護法講習を開始し、1906年から講習卒業者は警視庁免許看護人無試験検定資格が付与されました。戦後史を概観すると、1948年の保健婦助産婦看護婦法制定後、新制度の看護婦養成に準用して看護人養成が開始されました。1968年の同法改正により看護人の名称が看護師になったが、準用規定に変更はありませんでした。戦後長らく男子学生の母性実習は精神科実習に置き換えられてきたが、1989年の指定規則改正により男子学生も母性実習を履修する男女同一カリキュラムによる看護士養成が開始されました。1993年の保助看法改正により保健婦養成に準用して保健士養成が開始されました。これは看護教育の大学化の流れを背景とするものでした。2002年の同法改正により看護職の名称が男女同一の保健師・助産師・看護師になり、準用規定が廃止されました。

男性看護師養成史をもとに考えた看護教育のジェンダー問題が、以下のように挙げられました。①入学制限の問題：男子の入学を制限している看護学校(3年課程)の割合は1987年の58.3%から2001年の11.8%と減少していますが、男子に門戸が開かれたのは最近のことでした。②資格取得の問題：助産師資格取得および助産学教育を受ける権利が認められていません。③同性モデル不在の問題：看護学校に男性看護教員や先輩の男子学生が少ないのは学習資源の不足を意味します。④看護実習における女性患者との問題：実習で男子学生は女性患者のネガティブな反応に対処しなければなりません。男子学生の女性患者とのコミュニケーション技能向上に役立つ研究と教育が課題です。⑤就職・配属の偏向の問題：男性看護師の就職・配属には偏向があります。この問題解決のためには、上記と同様に女性患者のセクシュアリティを尊重した男性ケアの研究開発が必要です。

発表後、戦前の精神病院における有資格看護職の割合、看護実習における男子学生のセクハラ過剰意識の悪影響、看護教員や臨床指導者の対応が左右する男子学生の実習効果など、いろいろな質疑応答や体験報告、意見交換が行われました。

2006年9月16日(土)に、第三回例会が公開企画として行われました。「看護研究部会のこれまでとさらなる発展に向けて」と題したラウンド・テーブル・ディスカッションが、法政大学市ヶ谷キャンパスにて開催されました。

まず、島村忠義氏(日本赤十字看護大学)から、「看護研究部会の歴史と変遷」と題して、日本保健医療社会学会およびその下部組織としての看護研究部会の創設に至る経緯や背景、当時の看護職に関する社会学的研究状況などについてご紹介がありました。そして今後の看護研究部会で必要になってくる方向性としては、単なる社会的地

位の確立という問題を超えて、特化性・専門性などの課題が重要になるとの問題提起がありました。さらに、「看護」の内容と重要性を社会に訴えるためにも、当部会の研究成果を報告することも考慮してはどうかという提案がなされました。

そして、園田恭一氏（新潟医療福祉大学）からは、日本保健医療社会学会創設時の経緯にも触れつつ、学史的背景や現代的課題を踏まえ、これからの社会における、健康の社会学という観点の必要性和意味について、報告がありました。病気からの回復といったマイナス面の軽減や除去のみを掘り下げたり追及したりするというだけではなく、より人の生命や生活・人生を包括したライフの維持や向上を視野に入れた取り組みが必要であるとの問題提起がなされました。

その後、フロア全体を含めての活発な議論が行われました。司会は前半を板橋真木子氏（立正大学）、後半を吉田澄恵氏（順天堂大学）が担当しました。

議論の内容は多岐に渡りましたが、大別すれば次の二点にかかわるものでした。一つには、保健という概念が予防や医療という概念とどのような関係にあるのか、正常／異常という区分とのかかわり、病院内看護とのかかわりなどについて、様々な観点から議論が行われました。もう一つには、一方で看護技術や看護理論が確立されつつあるにもかかわらず、他方で現場になかなかそれが生かされないという指摘がなされ、現場で看護理論を生かすことを困難にしている制度的要因を明らかにするという取り組みが必要であるとの議論が行われました。

参加者は21名（部会員は13名、部会員以外では8名）でした。参加者の所属や専門分野も様々であり、非常に刺激的な議論のなされる場となりました。今回の経験を踏まえ、今後も同様に様々な領域の人々が交流する学際的な場を提供する企画を行っていきたいと考えています。

最後に、第四回例会は、11月25日（土）13:00から、法政大学市ヶ谷キャンパス内80年館7F中1会議室で、宇城令氏（聖路加看護大学）のご報告で開催する予定です。皆様のご参加をお待ちしております。お問い合わせ等は看護研究部事務局板橋真木子（[redacted]）、清水準一（[redacted]）までお願いいたします。

（看護部会長：中村美鈴）

IV. 編集委員会報告

編集委員会は現在、保健医療社会学論集、第17巻2号の刊行（予定時期、12月）に向けて取り組んでいます。この号には本年5月に立教大学で開催された第32回大会のメインシンポジウム「病い・老い・トラウマを生きる—保健医療の対象者像（他者像）の再発見—」の記録として朝倉、天田、溝田の3氏の論文が特集として掲載される予定です。他に、投稿論文、書評から構成されます。

また、9月末の投稿締切時に合計で12本の投稿がありました。すでに最初の査読プロセスが進行しています。次回の締切が来年の3月末ですので、学会員の方々からの多くの投稿を期待しています。

論文投稿先

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院医学系研究科健康社会学教室内、

日本保健医療社会学会事務局内、「保健医療社会学論集」編集事務局

電話： [REDACTED] ファックス： [REDACTED]

編集委員長連絡先：立教大学社会学部 木下康仁 [REDACTED]

(学会誌担当理事：木下康仁)

新入会員および退会者 (敬称略) <平成 18 年 5 月 13 日～9 月 25 日>

・入会

[REDACTED]

以上 22 名

・退会

[REDACTED]

以上 3 名

学会事務局からのお願い

連絡先がわからなくなっている会員の方 (敬称略)

[REDACTED]

[REDACTED]

連絡先をご存知の方は、学会事務局までお知らせ下さい。

学会事務局 E-mail： [REDACTED] FAX： [REDACTED]

(学会事務局次長：溝田友里)

編集後記

今回は第 33 回大会のご案内とラウンドテーブルの公募等のご案内いたしました。大会の日程の変更がありましたのでご注意ください。発表演題募集の詳細については次号でお知らせいたします。「会員の声」の投稿もお待ちしています。

「会員の声」投稿先：

〒351-0197 埼玉県和光市南 2-3-6

国立保健医療科学院 公衆衛生看護部内

「保健医療社会学会ニューズレター」編集事務局

FAX : ██████████ E-mail : ██████████

なお紙面の都合により、原稿の採否、若干の修正はお任せいただきますことをご了承ください。

(広報担当理事：平野かよ子)

The Japanese Society of Health and Medical Sociology

日本保健医療社会学会ニューズレター



No. 67 2007/1/18

日本保健医療社会学会事務局
東京大学大学院医学系研究科
健康社会学教室内
東京都文京区本郷 7-3-1
(編集:平野かよ子 発行:的場智子)

I. 新年の学会長あいさつ

今春の理事等の選挙・選出と第33回大会の新潟開催にあたって

学会長 山崎 喜比古

選挙・選出

この春、理事・監事の改選が行われます。この選挙は、昨年5月立教大学で開かれた第32回大会時の学会総会で、会員規模拡大に見合った理事の拡充（人数的には7人から10人へ。担当事項の拡充）と評議員（数十名。理事による指名選出）の新設を中心的な内容とする規約改正が行われた後に初めて行われる選挙で、学会の新しい発展の礎を築く画期的な意味をもった選挙です。

会費納入

こうした選挙にあたり、本号の記事にもありますが、選挙有権者の資格のためにも学会年会費の納入にぜひご協力下さいますようお願い申し上げます。

第33回大会

また、本年5月19・20日（土・日）には、新潟医療福祉大学にて第33回大会が開催されます。大会を、東京地域以外で隔年で開催するようになって今年は4回目、北陸で初めて開催される大会です。また、定例研究会担当理事改め研究活動担当理事が現地の会員の皆様とともに、大会の企画に当たるという新しい方式で準備されており、理事会としてもこのところの大会と同様どうしても成功させたい大会です。

本号で発表演題の募集もご案内していますが、会員の皆様、どうか今度の大会へのご発表、ご参加も心からお願い申し上げます。

II. 第33回日本保健医療社会学会大会のお知らせと演題募集

1. 日程 2007年5月19日(土)、20日(日)
2. 会場 新潟医療福祉大学(新潟市島見町1398)
(新潟駅南口より送迎バスを運行予定)
3. 大会長 米林喜男(新潟医療福祉大学)
4. プログラム概要
 - 5月19日(土)
 - 午前 シンポジウムA
 - 午後 一般演題セッション①
 - 大会長講演
 - シンポジウムB
 - 懇親会
 - 5月20日(日)
 - 午前 一般演題セッション②
 - 午後 総会
 - 一般演題セッション③
 - ラウンドテーブル・ディスカッション
5. シンポジウム
 - シンポジウムA 「看護と介護の異同」
 - 企画コーディネーター: 大槻美智子(新潟医療福祉大学)
 - 司会: 佐山光子(新潟大学)、小玉敏江(茨城キリスト大学)
 - シンポジスト: 臼井キミカ(長崎大学大学院)
 - 堀内ふき(茨城県立医療大学)
 - 渡辺裕美(東洋大学)
 - 是枝祥子(大妻女子大学)
 - シンポジウムB 「格差と保健・医療・福祉」
 - 企画コーディネーター: 福田吉治(国立保健医療科学院)
 - 司会: 野口裕二(東京学芸大学)、橋本英樹(東京大学大学院)
 - シンポジスト: 河内一郎(ハーバード大学大学院)
 - 中谷友樹(立命館大学/歴史都市防災研究センター)
 - 近藤文彦(元東京都庁/特別養護老人ホーム調布八雲苑)

6. ラウンドテーブル・ディスカッション

①「ケアの組織を考える」

企画者：原山 哲（東洋大学）

②「健康生成力 SOC 研究の魅力とインパクト」

企画者：戸ヶ里泰典（東京大学大学院／日本学術振興会）

③「保健医療におけるモダン／ポストモダン」

企画者：中川輝彦（龍谷大学）

④「医療ソーシャルワークと社会福祉士」

企画者：村上 信（新潟医療福祉大学）

⑤「医療社会学と社会疫学：対象への異なるアプローチ」

企画者：高尾総司（岡山大学大学院）

⑥「今、医療における協働（collaboration）を問い直す」

企画者：看護研究部会

7. 参加費

会員 5000 円、非会員 6000 円、学生 3000 円

（事前振込による割引および昼食申し込みに関する詳細は別途お知らせします）

8. 一般演題募集

一般演題を募集いたします。下記の要領に従ってご応募ください。

- (1) 発表時間は、1 演題につき、発表 12 分、質疑 8 分です。
- (2) 発表者は研究者、共同研究者とも会員であることが必要です。会員でない方は大会までに入会手続きを済ませてください。入会手続きは学会事務局（東京大学健康社会学教室）までお願いします。
- (3) 発表抄録を下記の要領で 2 部作成し、演題申し込みカード（別紙）に必要事項を記入の上、下記大会事務局あて郵送してください。また、念のため、抄録を添付ファイルにして E メールで大会事務局あてお送りください。
- (4) 抄録作成要領
形式：A4 版 1 枚、横書き、40 字×40 行、余白上下左右 30mm、明朝体、
1 行目に演題 14p 中央寄せ、3 行目に氏名（所属）10.5p 右寄せ、5 行目から本文 10.5p を標準の目安とします。なお、抄録集の段階では B5 版に縮小されますので、図表等の大きさにご注意ください。
内容：①研究の目的、②対象と方法、③結果、④考察、の 4 点が明確になるように留意してください。
- (5) 締め切り 2007 年 2 月 28 日（必着）
- (6) 問い合わせ・申し込み先

第 33 回日本保健医療社会学会大会事務局

〒950-3198 新潟市島見町 1398

新潟医療福祉大学社会福祉学部・藤澤研究室内 担当：佐藤

TEL&FAX： XXXXXXXXXX（直通）

E-MAIL： XXXXXXXXXX

Ⅲ. 理事会報告

第10回理事会 2006年12月10日(土) 13時より 於：東京大学
出席者：山崎喜比古(学会長)、小澤温、進藤雄三、野口裕二、的場智子(各理事)、
溝田友里(学会事務局次長)

- (1) 第33回大会に向けて：野口理事より、新潟医療福祉大学の米林先生、藤澤先生とシンポジウムや当日のタイムテーブルについて検討中であると報告を受ける。
- (2) 学会誌の編集と発行について：担当の木下理事が欠席のため、小澤理事より、次号の発行予定と査読の進捗状況について報告を受ける。
- (3) 定例研究会について：担当の野口理事と進藤理事より、前回の研究会、次回の予定について報告を受ける。また学会奨励賞の選考についても討議する。
- (4) 新入会員および退会者の承認：溝田事務局次長より9月26日から12月8日までの会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。
- (5) 選挙について：総務担当理事より、今年度は理事・監事改選の時期に当たり、選挙実施に向け準備を進める旨の報告を受け、今後のスケジュールについて確認した。
- (6) 論集の販売について：これまで学会誌の販売は大会当日に限定していたが、今後は常時、論集3000円、特別号1000円で販売することが承認された。
- (7) その他：山崎学会長より、2007年、2008年大会の開催地についても今後検討を進める必要であると提案される。総務担当理事より、事務局用にパソコンを購入したと報告を受ける。次回の理事会は3月19日(月)13時から東大で開催されることになった。

選挙のお知らせと会費納入のお願い

今年度は理事・監事改選の時期に当たります。

2007年1月末日の納入状況で選挙人名簿を作成いたします。

2006年度及び2005年度以前の未納のある方には納入状況と振込用紙を同封致しますので、ご確認の上、お支払い下さいますようお願いいたします。

なお、お問い合わせは学会事務局()までお願いします。

IV. 定例研究会報告

第188回 関西地区定例研究会報告

昨年12月3日(日)、大阪市立大学法学部棟6階第二会議室にて、午後2時から5時まで、山口県立大学の看護学部にて在職され長年看護職研究に従事されてきた田中マキ子先生を講師に迎え、「看護職のバーンアウト—教育と臨床現場のはざま」とのタイトルで報告頂きました。

報告の内容は、看護職のバーンアウト生成の要因を総合的に把握しようとする一方で、「現代型」バーンアウトの構造的・特殊要因の解明を同時に志向する野心的な試みを、データに基づいた解釈に依拠して提示するものでした。特に刺激的と思われたのは、1) 看護職教育の構造・事象がバーンアウトを生成しないし促進する側面がある、2) 専門学校・短期大学・大学という学校種別によるバーンアウト発生関連要因にいくつかの明確な差異が認められる、3) 看護職の受け持ち制(担当制)という現場におけるシフトが現代型バーンアウト発生に関連している、という指摘であったように個人的には受け止めました。80年代以降流行化し、90年代に数々の実態調査がなされるなかで研究テーマとして次第に「忘却」されつつあったかに見える「バーンアウト」研究において、看護職をめぐる地位上昇が進展する環境変化にもかかわらず、なぜバーンアウト率に変化が見られないのか—バーンアウト率の「変化のなさ」それ自体の「問題性」を見据えようとする、息の長い、腰を据えた取り組みに、強い印象を受けたというのが実感でした。報告後は、1)～3)を中心にしつつも、看護教育携わる方々を含め、多方面からの活発な質疑が交わされました。

今回は、講師とテーマはまだ未定ですが、3月下旬あたりに例会を開催する予定です。ご希望のテーマなどありましたら、ご連絡くだされば幸いです。

(研究活動担当理事:進藤雄三)

第189回 関東地区定例研究会報告

日時: 2006年12月12日(火) 午後6時～8時
会場: 東京大学医学部3号館1階 第1講義室
演題: 「ソーシャルキャピタルと健康」
講師: 藤澤由和先生(新潟医療福祉大学)

今回は近年注目されることの多い「ソーシャルキャピタル」の概念をめぐって、海外の研究動向に詳しい藤澤由和先生に論じていただいた。「ソーシャルキャピタル」の概念は社会学的概念でありながら、社会学プロパー領域よりもむしろ公衆衛生など医療や政策領域で注目されてきた。そこには、疫学的研究における「社会的要因の再発見」とも呼べる動向に関連しており、また、「健康の地域間格差」という問題意識が関連している。しかし一方で、この概念の定義や意味内容は研究者によってまちまちであり、その整理が難しいことなどが紹介された。具体的な調査においては、「信頼」、「互酬性」、「集団参加」などが測定されることが多いが、それらはそもそも互いに関

連する面をもっており、これらを「ソーシャルキャピタル」というひとつの概念に括ることはどのような意味をもつのか、また、個人単位で測定されたデータをコミュニティや州のレベルにまとめた集変数として扱うことの統計学的意味はどうなるのか、などをめぐって、フロアを含めて活発な議論がおこなわれた。社会学プロパー領域では、カルチュラルキャピタルについてはこれまで多くの関心が寄せられてきたが、ソーシャルキャピタルへの関心はそれに比べると弱い。このあたりの関心の違いは何に由来するのか、しかし一方で、健康・医療社会学にとってはこの概念は何かを刺激するものをもっているのはなぜか、など多くの新たな課題を示唆された有意義な研究会であった。

(研究活動担当理事：野口裕二)

看護研究部会報告

2006年度第四回例会が、11月25日(土)13:00から、法政大学市ヶ谷キャンパス内80年館7F中1会議室で開催されました。宇城令氏(聖路加看護大学)から、「急性期病院における『医師-看護師協働尺度の開発』」と題したご報告をいただきました。報告内容は次の通りです。

医療組織における協働(Collaboration)に関する研究は1970年ごろより始められ、欧米では主に医師と看護師の2者関係に焦点を当て研究が進められてきました。この協働の測定には、「信頼」や「対等性」、「コミュニケーションのよさ」等の職種間の関係性などに職種間の関係性を重視し、認識で評定する認識の側面を強調するものとなっていました。

しかし、協働とは行為であり、医療提供過程において具体的に何をしていることが協働なのかを示す必要性があると考え、新たに尺度を作成しました。なお、医療提供過程には医師と看護師以外の職種も関わっていますが、各病院病棟において病棟での役割等が様々であることから、どの病院や病棟においても働き方がほぼ同様である医師と看護師に着目しました。

尺度作成過程については、協働(Collaboration)に関する文献レビューおよび急性期病院急性期病棟における観察とインタビュー、内容・表面妥当性、プレテスト、本調査を経て医師と看護師両者共通の3つの構成概念から構成された尺度を作成しました。

発表後、尺度構成概念、尺度項目等について活発な議論がなされました。今後この協働と医療の質指標との関連や協働を促進する要因の検討を行い、より現実的かつ具体的な協働的な医療提供のあり方を考案する必要性が示されました。

第五回例会は、1月13日(土)13:30から、法政大学市ヶ谷キャンパス内80年館7F中1会議室で、千葉京子氏(日本赤十字看護大学)・本多康生氏(東京大学大学院)からご報告いただく予定です。

また、第六回例会は、3月24日(土)13:30から、板橋真木子氏(立正大学)・織田あゆみ氏からご報告いただく予定です(場所は未定)。

皆様のご参加をお待ちしております。

お問い合わせ等は看護研究部会事務局板橋真木子()、清水準一()までお願いいたします。

(看護部会長：中村美鈴)

V. 編集委員会報告

編集委員会は次号、第17巻2号の編集作業を進めています。昨年5月に立教大学で開催された第32回大会のメインシンポジウム「病い・老い・トラウマを生きる－保健医療の対象者像（他者像）の再発見－」の記録（朝倉氏、天田氏、溝田氏の論文）、投稿論文、インフォメーション、書評で構成の予定です。現在、刊行に向けての作業を鋭意進めておりますが、多少遅れて2月初め頃になる見込みです。

次回の投稿の締め切りが本年3月31日となります。年二回の締め切り制に移行してから今回で4回目の締め切りとなります。徐々に定着してきており、論文作成が計画的になされているように思います。会員の皆さまからの多くの投稿を期待していますので、日ごろの研究の成果をぜひ形にしてください。

なお、投稿に関するお問い合わせ等は下記の編集事務局または編集委員長までお願いします。

論文投稿先：

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院医学系研究科健康社会学教室内、
日本保健医療社会学会事務局内、
「保健医療社会学論集」編集事務局
電話： () ファックス： ()

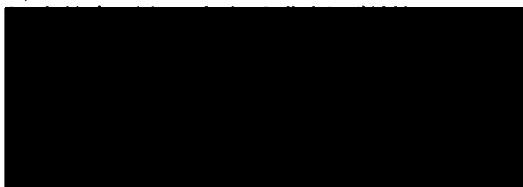
編集委員長連絡先（できるだけメールでお願いします）：

立教大学社会学部 木下康仁 ()
電話&ファックス： ()
〒171-8501 豊島区西池袋3-34-1

(学会誌担当理事：木下康仁)

新入会員および退会者（敬称略）〈9月25日～12月5日〉

・入会



以上5名

・退会
なし

学会事務局からのお願い

連絡先がわからなくなっている会員の方（敬称略）：



上記の方々と連絡先をとれる方がいらっしゃいましたら、学会事務局のほうにご連絡いただけますようお願いください。

学会事務局 E-mail：  FAX： 

（学会事務局次長：溝田友里）

編集後記

暖冬とはいえ、CO₂対策ということで室温19度の設定で寒々しく過ごしていますが、皆様におかれましてはお変わりございませんでしょうか。



今回は新年の会長挨拶や第33回大会のお知らせと演題募集等を掲載いたしました。多くの会員の皆様の演題をお待ちします。また、「会員の声」の投稿もお待ちしています。

「会員の声」投稿先：

〒351-0197 埼玉県和光市南2-3-6

国立保健医療科学院 公衆衛生看護部内

「保健医療社会学会ニューズレター」編集事務局

FAX：  E-mail： 

なお紙面の都合により、原稿の採否、若干の修正はお任せいただきますことをご了承ください。

（広報担当理事：平野かよ子）

The Japanese Society of Health and

日本保健医療社会学会ニューズレター

No. 68 2007/4/19



日本保健医療社会学会事務局
東京大学大学院医学系研究科
健康社会学教室内
東京都文京区本郷7-3-1
(編集:平野かよ子 発行:的場智子)

I. 第33日本保健医療社会学会大会 開会開催校からのお知らせ

第33回日本保健医療社会学会大会会長 米林 喜男

桜のたよりが聞かれる季節になりましたが、会員の皆様には益々ご清栄のことと存じます。

さて、第33会も約1ヶ月後と迫ってまいりました。新潟医療福祉大学のスタッフ一同、会員の皆様の来新に備え鋭意努力を重ねております。ここに33回のタイムテーブルをお知らせ申し上げますとともに、上越新幹線の到着時刻を参考に準備いたしました新潟駅南口から医療福祉大学までのチャーターバスならびにJR白新線豊栄駅からのスクールバスの運行につきましても合わせてお知らせ申し上げます。なお、新潟バスターミナル(新潟駅万代口から徒歩約10分)からの新潟医療福祉大学又は太郎代浜行のバス時刻についてもご参考までにお知らせいたします。

また、探しておりました本学会の前身である保健医療社会学研究会時代の会報第1号が偶然にも見つかりました。そこで、当時の発起人代表であった那須宗一先生の“研究会の発足にあたって—保健医療社会学の動向—”という巻頭言を中心に「保健医療社会学の過去・現在・未来」と題する部会を急遽組むことにいたしました。幸い新潟医療福祉大学には、本学会の会長経験者が私を含めて4人(山手 茂、園田恭一、渋谷優子の各先生)が現役で在職しておりますので、各先生に話題提供者として参加していただくことにいたしました。また、新潟医療福祉大学学長の高橋榮明先生に司会の労をとっていただくことになりました。何卒ご期待下さい。それでは5月に食と花のまち新潟で会員の皆様とお目にかかれまことを楽しみに致しております。

学会大会・総会タイムスケジュール

19日(土)

8:00	受付開始
8:45 - 11:30 (昼食)	シンポジウム：『看護と介護の異同』
12:30 - 14:10	一般演題セッション
14:20 - 14:40	大会長講演
14:45 - 17:45	メイン・シンポジウム： 『格差と保健・医療・福祉』
18:00 - 20:00	懇親会

20日(日)

8:30	受付開始
9:15 - 11:20	一般演題セッション
11:30 - 12:30 (昼食)	総会
13:20 - 15:25	一般演題セッション
15:30 - 17:30	ラウンドテーブル・ディスカッション

- ① 『ケアの組織を考える』
- ② 『健康生成力SOC研究の魅力とインパクト』
- ③ 『保健医療におけるモダン/ポストモダン』
- ④ 『医療ソーシャルワークと社会福祉士』
- ⑤ 『医療社会学と社会疫学：対象への異なるアプローチ』
- ⑥ 『今、医療における協働 (collaboration) を問い直す』

チャーターバス時刻表 1

新潟駅南口 →→ 新潟医療福祉大学

5月19日(土)

9:05新潟駅発	→→	9:45着
11:50新潟駅発	→→	12:30着
13:40新潟駅発	→→	2:20着

5月20日(日)

8:30新潟駅発	→→	9:15着
12:50新潟駅発	→→	13:20着

5月19日(土)

18:00大学発 →→ 18:40着

20:30大学発 →→ 21:10着

5月20日(日)

18:00大学発 →→ 18:40着

II. 理事会報告

第11回理事会 2006年3月21日(水) 13時より 於:東京大学

出席者:山崎喜比古(学会長)、小澤温、進藤雄三、野口裕二、平野かよ子、的場智子(各理事)、溝田友里、望月美栄子(学会事務局)

- (1) 第33回大会に向けて:野口理事より、大会の準備状況や演題申し込み状況などについて報告を受ける。
- (2) 学会誌の編集と発行について:担当の木下理事が欠席のため、小澤理事より、次号の発行予定と査読の進捗状況、次期編集委員会への申し送り事項について報告を受ける。
- (3) 選挙について:総務担当理事より、開票結果と今後の予定について報告がされた。
- (4) ニュースレターの発行と構成について:平野理事より、次号の構成と発行予定と業務について次期理事会への申し送り事項を受ける。
- (5) 新入会員および退会者の承認:溝田事務局次長より12月5日から3月20日までの入会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。
- (6) その他:総務担当理事より、日本社会福祉系学会連合についての報告を受ける。次回の理事会は5月18日(金)19時から新潟市内で開催されることになった。

【理事および会計監査選挙の結果報告】

選挙管理委員会から、去る3月7日に行われた開票の結果にもとづき、得票数の多い方から7名および次点の方について報告を受け、理事就任の依頼をした。最終的に受諾頂いた7名の選出理事は、以下の方々である(敬称略、50音順)。

天田城介、朝倉隆司、黒田浩一郎、進藤雄三、野口裕二、三井さよ、山崎喜比古

続いて行われた上記選出理事による協議の結果、指名理事として選ばれ、かつ、最終的に就任を受諾して頂いた3名の指名理事は、以下の方々である(敬称略、50音順)。

樫田美雄、河口てる子、溝田友里

同時に行われた会計監査選挙の結果、選出され、就任の受諾を頂いた2名は以下の方々である(敬称略、50音順)。武川正吾、平野かよ子

【日本社会福祉系学会連合と連合主催シンポジウムについてのお知らせ】

以前にもお知らせいたしましたが、「日本学術会議法の一部を改正する法律」により、2004年4月より登録学術団体制度がなくなりました。現在は「広報協力団体」が日本学術会議による広報活動を協力しており、本学会も広報協力団体になっています。この度、かつての日本学術会議 社会学委員会社会福祉学分会の所属学会が基礎となり、「日本社会福祉系学会連合」が設立しました。この連合は、所属する学会の活動に関する情報交換、シンポジウム等の開催、日本学術会議の活動に対する支援と協力をするを目的としています。

シンポジウムは1回ごとに連合所属の3～4学会が登場し、2年間で全学会に廻る予定です。シンポジウムの内容は、各学会の紹介、活動状況、近年の主要テーマ、研究方法などを中心に、各回ごとに参加する学会で検討されることになっています。その第1回シンポジウムが7月7日(土) 東洋大学朝霞キャンパスにて開催されます。第1回目の登壇学会は日本医療社会福祉学会、日本保健医療社会学会、日本在宅ケア学会です。ホームページもごさいます。あわせてご覧下さい。<http://www.swsl.jp>

(総務担当理事 的場智子)

III. 関東地区定例研究会

《第190回 関東地区定例研究会報告》

日時： 2007年3月28日(水) 午後6時～8時

会場： 東京大学医学部3号館1階 第1講義室

講師： 武井麻子先生 (日赤看護大学)

演題： 「感情労働と対人サービス ―職業としての善意をめぐる―」

今回は、感情労働と対人サービスについて論じた著書¹⁾を出版された武井麻子先生にご報告をお願いした。はじめに、「感情は関係の中で生まれ、社会の根幹を形作る」という基本的前提が紹介され、「感情管理」「感情ワーク」「感情の器」などホックシールド以来の感情社会学の基本概念が紹介された。その後、看護を含むヒューマン・サービス一般がもつ社会的特徴が示され、さらに、「サービス提供者の感情的破綻」「援助的職業症候群」などのネガティブな帰結へと至るプロセスが示された。そして、最後に「感情労働の時代を生き延びる」ためのいくつかの具体的方策が示された。

感情労働と看護の関係については、武井先生の前著²⁾以来、関心が高まっていたが、今回は対人サービス一般にまで視野を広げて論じたこと、その結果、逆に看護とその他の対人サービスとの異同が浮かび上がってきたことが興味深かった。また、社会学が疎外論の文脈でこの問題を論じる傾向があるのに対し、看護領域では看護実践に必然的に伴うものとしてとらえ、そのネガティブな帰結にどう対処するかというより実践的な関心から論じられる点も興味深かった。そして、看護労働や医療労働を論じる際にもはや避けて通れない重要な視点であるにもかかわらず、わが国での実証的研究はいまだ少ないことにもあらためて気づかされた。

参加者は50名を超え立ち見が出るほどの盛況になり、多くの質問や意見が出された。とくに現場の看護師からさまざまな経験やエピソードが次々と語られ、このテーマへの関心の高さをうかがわせた。今回の研究会で浮かび上がったさまざまな論

点をめぐって、あらためて議論できる機会をぜひとも設けたいと考えている。

(注) 1 武井麻子「ひと相手の仕事はなぜ疲れるのか」、大和書房、2006

2 武井麻子「感情と看護」、医学書院、2001

(研究活動担当理事：野口裕二)

IV. 関西地区定例研究会

《第 191 回関西地区定例研究会のご案内》

日時： 2007 年 4 月 21 日 (土) 午後 2 時～5 時

会場： 大阪市立大学 文化交流センター (梅田駅前第 2 ビル 6 階 小会議室)

テーマ： 「マスメディアと医療従事者の役割—戦後日本における生殖の
統制の事例から」

講師： 田間泰子先生 (大阪府立大学)

近著 『「近代家族」とボディ・ポリティクス』(世界思想社 2006) から、
特に生殖統制と医療の関わりを中心に論じていただきます。

「戦後日本では、生殖のありようが激変した。人々が生殖を統制するに
あたって、マスメディアと医療従事者がどのような役割を果たしてきたかを
幾つかの事例をもとに考察し、より良いあり方を探る一助としたい。」

との言葉をいただいています。

司会： 進藤雄三 (大阪市立大学)

参加費： 無料

お問い合わせは下記学会事務局までお願いします。

日本保健医療社会学会事務局

東京大学大学院医学系研究科健康社会学教室内

TEL： ██████████ FAX： ██████████ (担当 望月美栄子)

(研究活動担当理事：進藤雄三)

V. 看護研究部会

2006 年度第 6 回例会が、3 月 24 日 (土) に、首都大学東京荒川キャンパス校舎棟
4 階在宅看護実習室 (466 号) で開催されました。

第一報告は「看護師のケアと役割葛藤—看護管理学への社会学からの期待—」と
題して、織田あゆみさんからご報告をいただきました。報告内容は次の通りです。

臨床看護師の社会調査を通して、これまで報告者が分析してきた「役割葛藤」の概
念を、臨床へフィードバックし活用するための方法論の検討を主眼とした報告でした。
実際に病院内で看護師を組織し運用、教育する機関としての「看護部」「看護管理者」
に着目し、個々人の看護師の葛藤状況への理解、対処法などや、「看護管理学」の知識
体系について、いくつかの資料をもとに試論を提示しました。

看護師の「葛藤」「バーンアウト」といった概念を、「看護管理学」の中では、看護
師の成長過程として個人の枠組みで捕らえるといった理解が多くみうけられました。
そこで、報告者の立場である、社会学的理論枠組みにおける、構造機能主義的な役割

理論の理解と分析方法のメリットを主張しました。つまり、これまであまり注目されてこなかった、機能や構造、システムからみた「看護師の役割葛藤」の視座の有用性について考察をしました。看護師個人を取り巻く、環境の分析や改善につながるものであり、「看護管理」という知識体系に提示していければ、臨床に還元していけるものと考えた報告でした。

報告後の質疑では、まず、社会学的役割理論の相互作用論的理解と構造機能主義的理解の差異について、議論が交わされ、双方における立場の違いの理解がされました。さらに、一つの現象を理解する場合に、相反する理解ではないという討議がされました。次に、「看護管理学」の相対化について活発な議論が交わされました。試論には精緻化が課題であるが、妥当性を検証できれば、理論枠組みの構築にむけて関与していける可能性も示唆されました。報告者の今後の研究の方向性（調査対象、役割葛藤図解のサブカテゴリー化など）にも多くの意見が寄せられ、多角的な議論が展開されました。

第二報告は、『うつである夫の妻』であること——『ケア提供者』とすることへの躊躇——と題して、板橋真木子さん(立正大学)に報告していただきました。報告内容は次の通りです。

「うつである夫の妻」に対し聴き取り調査を進めるなかで、「妻」を「ケア提供者」として位置づけることに対する躊躇について報告がありました。この躊躇の理由の第一点として「家族=ケア提供者」論への違和感があり、大きく①法制度上の規定②ケアの社会化論③家族の医療化④近代家族規範の四つに整理し、「うつである夫を持つ妻」との関連からその違和感について説明がありました。第二に「ケア」の「提供者」とすることへの違和感を①ケアの「提供者」とすることへの違和感として、「うつである夫の妻」たちの経験の中ではケアを「提供している」ことよりも、「提供すること」の困難、中断、断絶という経験こそが彼女達の経験の核となっており、不断にケアを提供し続ける存在としてしまうことの問題について述べられました。さらに②「うつである夫の妻」は「ケア」を提供しているといえるのか、そのように位置づけてしまうことへの違和感について述べられました。「ケア」の一部とすることは「妻」たちの経験が「ケア」という言葉に包摂され平板化されてしまうという点について指摘がありました。

2007年度の総会は、大会開催中である5月20日(日)の昼に、新潟医療福祉大学で開催する予定です。日頃東京にはなかなかお越しいただけない方々も、この機会にぜひ参加していただければと存じます。2007年度第1回例会は、6月23日(土)に開催する予定です。

お問い合わせ等は看護研究部会事務局板橋真木子()、清水準一()までお願いいたします。

(文責：三井さよ)

(看護部会長：中村美鈴)

VI. 編集委員会

1. 第17巻2号を定期刊行時期より約一カ月遅れで、2007年1月25日付で刊行し

ました。昨年、立教大学で開催された第 32 回大会のメインシンポジウム「病い・老い・トラウマを生きる－保健医療の対象者像（他者像）の再発見－」の記録と投稿論文で構成されています。

2. 次号、第 18 巻 1 号は 2007 年 6 月末の定期刊行の予定で現在、編集作業を進めています。
3. 現編集委員会は 5 月の大会までの任期となります。2007 年 3 月末締め切りの投稿論文の審査と継続中の審査に関しては次期編集委員会の発足まで現編集委員会が担当します。それまでの問い合わせ等は学会事務局内編集事務局または現編集委員長の木下（立教大学社会学部）にお願いします。
4. 現編集委員会において検討してきた種々の改善案を含め、次期編集委員会への引き継ぎを行っていきます。

なお、投稿に関する問い合わせ等は下記の編集事務局へお願いします。

論文投稿先：

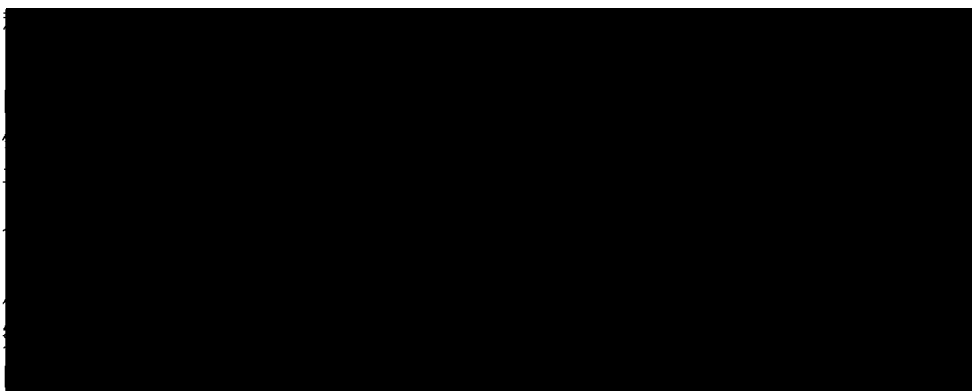
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学大学院医学系研究科健康社会学教室内、
日本保健医療社会学会事務局内、
「保健医療社会学論集」編集事務局
電話： ██████████、 ファックス： ██████████

(学会誌担当理事 木下康仁)

VII. 新入会員および退会者の承認 (敬称略)

<2006 年 12 月 5 日～2007 年 3 月 20 日>

・入会



以上 21 名

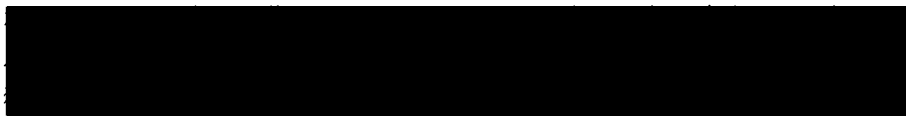
・退会



以上 14 名

学会事務局からのお願い

連絡先がわからなくなっている会員の方（敬称略）：



上記の方々と連絡先をとれる方がいらっしゃいましたら、学会事務局のほうにご連絡いただけますようお願いください。

学会事務局 E-mail :  FAX : 

(学会事務局次長：溝田友里)

VIII. 編集後記

新年度を迎え、お忙しい日々をお過ごしのことと思います。

今回は第 33 回大会の最終のご案内をさせていただきました。また、理事会報告として次期学会役員の選挙結果をお伝えしました。会員の皆様の大会そして総会への参加を期待いたします。

また、引き続き会員の声もお寄せください。

「会員の声」投稿先：

E-mail : 

なお紙面の都合により、原稿の採否、若干の修正はお任せいただきますことをご了承ください。

(広報担当理事：平野かよ子)

The Japanese Society of Health and Medical Sociology

日本保健医療社会学会ニューズレター



No. 69 2007/7/27

日本保健医療社会学会事務局
東京大学大学院医学系研究科
健康社会学教室内
東京都文京区本郷7-3-1
(編集:河口てる子 発行:溝田友里)

I. 第34回日本保健医療社会学会大会 大会長からのお知らせ

第34回日本保健医療社会学会大会会長 星 旦二
首都大学東京・都市環境学部・都市システム科学専攻長

暑い夏がやってまいりましたが、会員の皆様には益々ご清栄のことと存じます。

次年度の第34回日本保健医療社会学会の大会長を引き受けさせていただき、予定の首都大学東京（東京都立大学と三大学の統合大学です）の星と申します。皆様のご支援をいただき、意義のある学会になりますように努力したいと思っています。

ご存じのように、都市部平均寿命は相対的に低下し続けています。85年までは東京都は全国第1位でしたが、男性20位、女性33位に低下し、特に女性では最近36位にまで低下しています。その他、都市は様々な健康関連課題を抱えています。このような課題解決で注目されるのは、ヘルスプロモーションだと思います。その背景としては、医学が寄与する健康度への影響力よりも生活モデルが主流となりつつあるからだと思っています。まさに、日々の生活を大切にした **Healthy city** づくりそのものです。新しい健康づくりでは、保健も医療も社会もそれぞれが不可欠ばかりでなく、市民参画による連携や協働を推進させるモデルや実践方法論の蓄積がとても大切であると思っています。

そこで、メインテーマとして「都市の健康づくりとヘルスプロモーション・その理論と実践・仮」にしたいと考えています。都市の健康水準と背景を明確にすると共に、その課題解決のための方法論としてヘルスプロモーションの視点から、女性の政策決

定関与も含めて具体的で実践的な方法論について検討し、今後の展望を期待したいと思えます。

会場は、八王子南大沢駅から徒歩 10 分程の首都大学東京 12 号館の予定です。開催日程は、5 月 17 日(土)と 18 日(日)を候補として考えています。多くの皆さんからの優れた研究発表とともに、参画による学問深化を期待したいと思えます。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

II. 第 33 回日本保健医療社会学会大会の報告

第 33 回日本保健医療社会学会大会
大会長 米林 喜男

去る 5 月 19 日(土)、20 日(日)の 2 日間、新潟医療福祉大学で開催された第 33 回日本保健医療社会学会大会は、幸い天気にもめぐまれ、おかげさまで、盛会裡に終えることができました。ご参加下さいました皆様に、心からお礼を申し上げます。参加者は会員、非会員、学生及び関係者を合わせまして 500 名近くにのぼりました。地方で開催する大会は今回で 4 度目になりますが、今迄の地方大会の中では、もっとも多くの参加者を得たことになり、開催責任者として大変嬉しく思っております。

シンポジウム・ラウンドテーブル・一般報告ともに質の向上が伺われるという山崎会長のコメントもいただきました。企画にあたった当番校と学会学術担当理事とのコラボレーションの成果ではないかと自負をいたしております。もちろん、発表された会員の皆様のご研究の成果こそが本大会を成功に導いたもっとも大きな鍵であったことはいまでもありません。

また、保健医療社会学の過去・現在・未来という特別セッションを設けることが出来たことも本学会の発起人の 1 人として大変感慨深いものがありました。多くの方々の“縁”によって、ここ新潟の地で大会を開催出来たことを心から感謝申し上げます。今後、本学会が更なる飛躍をとげ、来る世界社会学者会議 (ISA) 日本大会の保健医療社会学部会が本学会の会員の皆様の発表で埋めつくされるようになることを夢見ております。

なお、学会初日の懇親会に対し、新潟医療福祉大学の高橋榮明学長先生をはじめ、山手茂、園田恭一、澁谷優子の前学会長であった 3 人の先生方から多大なご寄付をいただきましたことを感謝をこめて、会員の皆様にご報告をさせていただきます。

終わりに、抄録の路線バス時刻に一部誤りがあり、帰路についてご迷惑をおかけしましたことをまずお詫び申し上げます。また、初日の土曜日はアルビレックス新潟と鹿島アントラーズのサッカーゲーム大会の影響で新潟駅南口が混雑しており、学生ア

ルバイトの案内係を配置していたのですが、結果としてチャーターバスの位置がわかりにくかったことも重ねてお詫びをいたしたいと存じます。

なお、下記の演題は発表2時間前に取り消しのご連絡がありましたので、記録として記載させていただきます。

インドネシアにおける妊娠・出産・育児第1報 ～西ジャワ州A地区の家族計画を事例に～ 鹿児島大学 医学部 保健学科 宮菌夏美

Ⅲ. 来たる2年を担当させて頂く新理事会を代表してのご挨拶

学会長 山崎喜比古（東京大学大学院健康社会学）

2007年5月19・20日、新潟医療福祉大での第33回大会は、質・量とも盛会裡に終わることができました。外国からの素晴らしいゲストと海外在住の学会奨励賞受賞会員をお招きした学会史上初めての大会となりました。年々質が向上していることを感じたのは私だけではありません。学会誌を見ても然りです。また、大会では、大学を挙げての心温まるもてなしもありました。大会長の米林先生、事務局長の藤澤先生をはじめ新潟医療福祉大学の皆様、有り難うございました。そして、学会と研究等活動のこの1年間におけるまた新たな発展を会員の皆様とともに喜び合いたいと思います。

もう一つご報告申し上げたいことがあります。この大会時にはご報告できず皆様にご心配をおかけした来年2008年度の第34回大会は、首都大学東京の星旦二先生が引き受けて下さることになりました。学会史上にまた新しい発展が記される大会になる予感が致します。新理事一同も連携に努めますので、星先生、どうか宜しくお願い致します。

今回の学会総会では、15年以上前の会員200人に満たない学会創生期の体制をそのまま引き継いでいた学会の機構が600人以上にもなった会員規模とその後の持続的発展を支えるにふさわしい形へと大幅に改革されました。理事会は拡充され、評議員会が創設されました。学会事務や細則も整備が進みました。今後、前年度年会費未納者には、学会誌が送られなくなります。年会費はできるだけ当該年度当初に、遅くとも年度内には納入下さいますよう、また、図書館会員が新設されましたので、本学会誌のご利用・普及に努めて下さいますようお願い致します、等々です。

去る2年間、学会の発展のために尽力下さった旧理事や委員の皆様、有り難うございました。来たる2年間、学会の更なる発展と会員の皆様の一層のご活躍がありますことを祈念し、新理事一同はその先頭に立って働くことを約束申し上げまして、新理

事を代表してのご挨拶とさせていただきます。

IV. 総会報告

学会の総会は2007年5月20日に新潟医療福祉大学にて行われた。議事次第と審議結果は以下のとおりである。

開会の辞

学会長挨拶

議長選出

栗岡幹英（奈良女子大学）が議長に選出される。

第1号議案 2006（平成18）年度 事業報告

1. 日本保健医療社会学会大会・総会の開催について

第32回大会（立教大学、2006年5月）の開催および第33回大会（新潟医療福祉大学、2007年5月）の準備。

2. 保健医療社会学論集について

学会大会抄録集を論集の特別号とし、第17巻は特別号、1号、2号の3号分を発行した。

3. 定例研究会・研究部会について

定例研究会—関東3回、関西2回の開催、看護研究部会—6回の開催。これらに対し、学会から財政的補助が図られた。

4. 日本保健医療社会学会ニューズレターについて

4号分発行された。

5. その他

理事選挙選出および評議委員の選考が行われた。

「学会事務局は当分の間、東大大学院健康社会学におく」、「事務局次長を設け、理事会にオブザーバー参加してもらう」として6年経過。「編集委員会事務局は学会事務局内におく」として2年経過。

第2号議案 2006（平成18）年度決算報告、監査報告

日本保健医療社会学会2006年度決算書

自2006年4月1日 至2007年3月31日

単位：円

収入の部				支出の部			
	予算額	決算額	差異		予算額	決算額	差異
前期繰越金	2,143,622	2,143,622	0	印刷製本費	1,540,000	901,320	638,680
会費収入	3,370,000	3,494,000	124,000	郵送費	705,000	537,209	167,791
学会誌刊行物売上	220,000	374,220	154,220	交通費	320,000	84,440	235,560
受取利息	10	0	△ 10	事務局人件費	529,000	520,000	9,000
広告収入	30,000	0	△ 30,000	学会誌編集費	100,000	100,000	0
				消耗品費	250,000	220,999	29,001
				会議費	80,000	1,228	78,772
				大会・研究会・部会活動補助費	360,000	361,146	△ 1,146
				その他(振り込み手数料等)	3,000	296,080	△ 293,080
				社会福祉系学会連絡協議会分担金	0	50,000	△ 50,000
				予備費	1,876,632	2,939,420	△ 1,062,788
合計	5,763,632	6,011,842	248,210	合計	5,763,632	6,011,842	△ 248,210

1) 特別号印刷費が大会事務局より支払われた

2) 事務局用パソコン及びその付属品(29万2千)、振り込み手数料(4千円)

日本保健医療社会学会2006年度会計についての監査の結果、適正なものと認めます。

2007年4月24日 会計監査 園田恭一 印

2007年5月11日 会計監査 河口てる子 印

第3号議案 学会規約の改正

提案内容および改正点は以下のとおりである。

(1) 図書館会員及び単年度会員とその規定の新設

◆【改定前】第2章会員第4条 本会の会員は、通常会員、名誉会員、賛助会員とする。

⇒【改定後】第2章会員第4条 本会の会員は、通常会員、名誉会員、賛助会員、図書館会員、単年度会員とする。

◆【改定前】第2章会員第7条 賛助会員は、本会の趣旨に賛同し、本会の事業を後援するため財政的援助等をなすもので、理事会の承認を得た個人及び機関とする。

⇒【改定後】第2章会員第7条 賛助会員、図書館会員、単年度会員は以下に該当し、理事会の承認を得た個人または機関とする。

4. 賛助会員 本会の趣旨に賛同し、本会の事業を後援するため財政的援助等をなす個人及び機関

5. 図書館会員 本会機関誌を定期的に購入する図書館

6. 単年度会員 単一年度に限り会員である者

◆【改定前】第5章会計第20条 会費は次のものとする。

1. 通常会員の会費は年額 6,000 円とする。

2. . . .

3. . . .

⇒【改定後】第 5 章会計第 20 条 会費は次のものとする。

1. 通常会員、図書館会員、単年度会員の会費は年額 6,000 円とする。

2. . . .

3. . . .

《提案理由》

かねてより、事実上の図書館会員は賛助会員とみなし、年会費 10,000 円を請求し徴収し、本会機関誌だけを送ってきましたが、図書館関係の個人が通常会員になって図書館に学会誌を割安の値段で購入し置く場合や、図書館としての定期的購入を断念する図書館が少なからず現れてきています。これにより、学会誌関係事務が煩雑になっているばかりか、全国の図書館への学会誌の普及の妨げにもなってきました。学会誌関係事務の簡素化と、全国の図書館への学会誌の普及のために、新たに図書館会員という種類の会員を設け、会費を通常会員と同額にするという規約改正を提案した次第です。

あわせて、会員がメンバーになっている共同研究プロジェクトチームの研究を学会発表するとき、非会員のメンバーが共同発表者として名を連ねるためにのみ会員となる場合がしばしばあり、そういう会員の中から、退会手続きを取り忘れ不本意にも長期滞納に至るケースが続出し、学会費関係事務を著しく煩雑にし、学会の財政運営を不健全なものにもしています。そうしたケースの出現は、本学会のように学際性の強い学会には避けられない事態と考えられます。そこで、そのような共同研究者・共同発表者のために、入会時に単年度会員として入会していただけるシステムを用意することが有効と考え、新たに単年度会員という種類の会員を設けるという規約改正を提案した次第です。

(2) 退会に関する規定の改正・明確化

◆【改定前】第 2 章会員第 9 条 会費を 2 ヶ年にわたり滞納した者は、脱会とみなす。

⇒【改定後】第 2 章会員第 9 条 本会を退会しようとする者は、退会届を提出するものとする。ただし、単年度会員の会員任期が満了する場合はその限りではない。

2. 退会する者は、滞納金があれば、滞納金を納めなければならない。

3. 会費を 3 ヶ年以上滞納した者は、原則として資格喪失退会とし、ニューズレタ一等に氏名を公表する。

《提案理由》

6 年前に学会事務局を東京大学大学院医学系研究科健康社会学教室に置くようになるまでに、第 9 条は有名無実化し、本会は少なからぬ 5 年以上滞納者を抱え、かつ、

その者の処遇や整理に苦慮するようになっていました。6年前より、学会事務局は、理事会での討議・承認と総会での報告・承認を経つつ、5年以上滞納者を資格喪失退会とし、ニューズレター等に氏名を公表し、ニューズレターの送付を止め、また、3年以上滞納者には学会誌の送付を止めるという措置を講じてきました。しかし、本会の規約に退会規定がなく、かつ第9条が実情に合わないため、退会をめぐることは、退会の意思を伝えてあったのに処理されていないというクレームや、特に滞納分の支払いをめぐる熾烈なトラブルが絶えず、学会事務局も滞納者への対応には大変苦労してきました。

今回の規約改正のポイントは、退会手続きを明記し明確化する点と、資格喪失退会を5年以上滞納者から3年以上滞納者にする点とにあります。後者は、一見滞納者に対して厳しくなっているように見えますが、3年以上滞納者の滞納金が高額になっているため5年以上滞納による資格喪失退会につながりやすくなっている実情から考えて、むしろ滞納金が以前よりも低額になり支払いやすくなる、したがって通常退会がしやすくなる点で、滞納者にとってはより優しい措置であるともいえます。

また、この規約改正に伴い、学会誌の送付を前年度未納者から止めること、そのことを理事会決定としてニューズレター等で周知することにより、会費納入を促進し、無償の送付件数を減らし、学会の財政運営が一層健全化されることが期待できます。

第4号議案 2007（平成19）年度事業計画

1. 日本保健医療社会学会大会・総会の開催について

第33回大会（新潟医療福祉大学、2007年5月）の開催および第34回大会（関西地区での開催を予定）。

2. 保健医療社会学論集について

第18巻の特別号、1号、2号の3号を発行。

3. 研究活動について

定例研究会、看護研究部会は2006年度の継承。
学会奨励賞の選考。

4. 会報、広報について

日本保健医療社会学会ニューズレターを4回発行。ホームページの充実。

5. 渉外、国際について

第5号議案 2007（平成19）年度予算計画

日本保健医療社会学会2007年度予算書

自2007年4月1日 至2008年3月31日

収入の部		支出の部	
	予算額		予算額
前期繰越金	2,939,420	印刷製本費	1,540,000
会費収入(6000円×500人分、新会員7000円×70人)	3,500,000	郵送費	540,000
学会誌刊行物売上	375,000	交通費	800,000
受取利息	10	事務局人件費	598,000
広告収入	30,000	学会誌編集費	100,000
その他*	65,000	消耗品費	205,000
		会議費	127,000
		大会・研究会・部会活動補助費	370,000
		社会福祉系学会連合分担金	50,000
		その他(振り込み手数料・学会奨励賞等)**	64,000
		予備費	2,515,430
合計	6,909,430	合計	6,909,430

*前年度定例研究会補助残金

**学会奨励賞1万、学会奨励賞受賞者への旅費補助5万を含む

第6号議案 名誉会員の推挙について

木下安子会員 山手茂会員

閉会の辞

(総務担当理事：溝田友里)

V. 新理事、新監事、評議員、名誉会員の紹介

第33回日本保健医療社会学会大会の総会にて承認されました新理事、新監事、評議員、名誉会員をご紹介します。(五十音順、敬称略)

【新理事】

担当

研究活動	朝倉 隆司	(東京学芸大学)
学会誌編集	天田 城介	(立命館大学)
研究活動	檜田 美雄	(徳島大学)
会報広報	河口 てる子	(日本赤十字看護大学)
研究活動	黒田 浩一郎	(龍谷大学)

学会誌編集 進藤 雄三 (大阪市立大学)
渉外国際 野口 裕二 (東京学芸大学)
総務 溝田 友里 (国立がんセンター)
研究活動 三井 さよ (法政大学)
学会長 山崎 喜比古 (東京大学)

【新監事】

武川 正吾 (東京大学)
平野 かよ子 (国立保健医療科学院)

【事務局】

担当

事務局長 溝田 友里 (国立がんセンター)
事務局次長 望月 美栄子 (東京大学)

【評議員】

姉崎 正平 (近畿福祉大学)	蘭 由岐子 (神戸市看護大学)
大島 巖 (日本社会事業大学)	小澤 温 (東洋大学)
金子 雅彦 (防衛医科大学校)	木下 康仁 (立教大学)
栗岡 幹英 (奈良女子大学)	渋谷 優子 (新潟医療福祉大学)
島村 忠義 (日本赤十字看護大学)	杉澤 秀博 (桜美林大学)
杉田 聡 (大分大学)	杉山 克己 (青森県立保健大学)
園田 恭一 (新潟医療福祉大学)	田口 宏昭 (熊本大学)
立岩 真也 (立命館大学)	田中 マキ子 (山口県立大学)
百々 雅子 (山梨県立大学)	中川 薫 (首都大学東京)
中田 知生 (北星学園大学)	中村 美鈴 (自治医科大学)
中山 和弘 (聖路加看護大学)	二木 立 (日本福祉大学)
早坂 裕子 (新潟青陵大学)	林 千冬 (神戸市看護大学)
福島 道子 (日本赤十字看護大学)	星 且二 (首都大学東京)
牧野 忠康 (日本福祉大学)	松田 亮三 (立命館大学)
宮本 真巳 (東京医科歯科大学)	山田 富秋 (松山大学)
米林 喜男 (新潟医療福祉大学)	

【名誉会員】

相磯 富士雄
木下 安子

杉 正孝
芦沢 正見
中野 進
西 三郎
橋本 正巳 (物故)
山手 茂

(総務担当理事：溝田友里)

VI. 理事会報告

1. 2007年度第1回理事会

2007年5月18日(金) 19時より 於新潟 魚や割烹魚國屋

出席者：2005年～2006年度理事－山崎喜比古(学会長)、小澤温、進藤雄三、野口裕二、的場智子(各理事)

2007年度～2008年度理事(再掲含む)－山崎喜比古(学会長)、天田城介、榎田美雄、河口てる子、進藤雄三、野口裕二、三井さよ、溝田友里(各理事)、望月美栄子(学会事務局次長)

オブザーバー参加－米林喜男(第33回大会長)

- 1) 第33回大会について：大会の運営ならびに総会に報告・提案する事項についての検討が行われ、決定した。
- 2) 新旧理事による引き継ぎが行われた。
- 3) 新事務局次長の紹介：山崎学会長より、望月・新事務局次長の紹介が行われた。
- 4) 新入会員および退会者の承認：望月事務局次長より、2007年3月21日以降5月15日までの新入会員および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。
- 5) 次回理事会の日程：次回理事会は、7月4日(水)14時より、東京大学にて開催することになった。

2. 第2回理事会報告

2007年7月4日(水) 14時より 於東京大学

出席者：山崎喜比古(学会長)、天田城介、榎田美雄、河口てる子、進藤雄三、三井さよ、溝田友里(各理事)

- 1) 学会誌の編集規定の改定について：学会誌編集担当の天田理事、進藤理事より新規編集委員や編集規定の改定などについて提案があり、審議の結果承認された。内容については、本ニューズレターに別途記載。
- 2) 研究活動について：研究活動担当の榎田理事、三井理事より、今後の活動につい

- て報告を受け、討議を行った。内容については本ニューズレターに別途記載。
- 3) 広報活動について：会報広報担当の河口理事より今後の活動について報告を受けた。また、ニューズレター原稿について討議を行った。
 - 4) 第34回大会について：第34回日本保健医療社会学会大会の大会長を首都大学東京の星且二先生が引き受けてくださることになったとの報告を受け、大会の持ち方と研究活動担当理事の関わり方について自由討議を行った。大会についての詳細は、本ニューズレターに別途記載。
 - 5) 年会費の早期納入等の周知徹底について：溝田理事より、規約改正と提案理由説明にもとづき、年会費の前年度未納の場合は学会誌は送付されなくなる旨等、ニューズレターで周知徹底することが報告された。
 - 6) 新入会員および退会者の承認：溝田理事より、5月16日～6月29日までの入会および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。
 - 7) 次回理事会の日程：次回理事会は、9月24日（月）13時より、東京大学にて開催することになった。

（総務担当理事：溝田友里）

Ⅶ. 編集委員会

2007年7月4日の理事会において、新編集委員会の以下の体制が承認されました。

1) 新編集委員会は、編集委員が査読委員を兼ねるという従来の体制を改め、「編集」と「査読」の機能を分化することとし、この原則に基づき、a)「編集規定」の変更（第6項「編集委員は査読者となることができる」の箇所を「編集委員は投稿論文を受け、査読者の評価を確認・調整する」と変更）、およびb) 編集委員会の機能的組織化のため、委員の数を13名から5名に変更しました。委員は、進藤雄三（理事、編集委員長、大阪市立大学）、天田城介（理事、副編集委員長、立命館大学）、早坂裕子（新潟青陵大学）、杉田聡（大分大学）、松田亮三（立命館大学）です。

2) また、投稿規程に変更があり、英文要約およびフロッピーディスクの提出が義務化されます。これらは本年10月1日施行ですが、次回の投稿分（9月30日締切）から適用したいと考えておりますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

3) 他に、編集事務局の住所が下記編集委員長所属先となりますので、送付、連絡の際にはお間違いのないようご注意ください。

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

編集委員長 進藤雄三（大阪市立大学）

TEL & FAX [REDACTED]

Email [REDACTED]

（編集担当理事：進藤雄三）

VIII. 関東地区定例研究会

《第1回関東地区定例研究会のご案内》

日時：2007年9月29日(土) 14:00～

会場：未定

講師：星加良司(東京大学先端科学技術研究センター 特任助教)

障害学の最前線や臨床現場との架橋についてご報告いただく予定です。

IX. 関西地区定例研究会

《関西地区定例研究会(9月)のご案内》

日時：9月22日(土) 14:00-18:00

場所：キャンパスプラザ京都 (<http://www.consortium.or.jp/campusplaza/index.html>)

発表：

(1)発表者：座主果林(奈良女子大学人間文化研究科)

タイトル：障害の社会モデル

概要：「障害」を個人の属性ではなく社会的な不利益や制約の問題とみなす「障害の社会モデル」を、社会構造上障壁と観念上障壁という面から検討し、障害の問題の特質について考察する。

(2)発表者：佐藤令奈(奈良女子大学人間文化研究科)

タイトル：アトピー性皮膚炎の社会史

概要：我が国においてアトピー性皮膚炎は、1990年代を中心に社会問題化されてきた。薬害、環境、育児、セルフケア等々、今日病を抱える人々が直面する多くの問題を一手に抱え込んだ疾病である。本報告ではアトピー性皮膚炎をめぐるこれらの問題が、歴史的にどのように展開され、またどのように社会的意味付けがなされてきたかについて整理・検討する。

(3)発表者：山本智子(奈良女子大学人間文化研究科)

タイトル：AD/HDはいかに構築されてきたか

概要：人の自然的差異を「障害」として範疇化し、社会的差別に転化していく「医療化」への疑問を視点として、AD/HDが構築されてきた歴史的経緯を紹介し、AD/HDという障害の形成過程における問題点を考える。

(4)発表者：中西和子(奈良女子大学博士研究員)

タイトル：奈良県大淀病院事件からみる地域医療システム構築の現状と課題—救急医療体制にみる“地域の理論”と“系列の理論”—

概要：昨年、奈良県大淀病院で妊婦死亡事件がおこった。マスコミでは、“医療ミス”として取上げているが、ここには、地域の救急医療体制の未整備という大きな問題が

ある。奈良県における、県北部に集中する高度医療施設と県中南部との地域格差の問題と、あわせて3次救急医療システムそのもの問題について報告する。

問い合わせ先：黒田浩一郎@龍谷大学

(e-mail： XXXXXXXXXX)

X. 看護研究部会

今年度の総会は、初の試みとして、日本保健医療社会学会の大会時に開催することになり、2007年5月20日12:30～13:30に新潟医療福祉大学の管理棟2F B209教室をお借りして開催しました。遠方で日頃はおいでいただけない方々にも足を運んでいただき、久しぶりにお会いできた会員の方もいらっしゃいました。昨年度の活動報告・会計報告が行われ、今年度の活動方針（6回の研究例会、うち1回は公開企画）が確認されました。

また、同日15:30～17:30にD303教室をお借りし、看護研究部会企画のラウンド・テーブル・ディスカッション(6)「今、医療における協働 (collaboration) を問い直す」が開催されました。話題提供として、宇城令さん(自治医科大学看護学部)、塩澤幹雄さん(自治医科大学医学部)、細田満和子さん(コロンビア大学)から報告がありました。宇城さんからは「医療における協働を測定する試み」と題して、チーム医療の機能を協働と捉え、27病院の医師と看護師を対象とした調査をもとに、両者共通尺度による協働の測定や、認識の差などの結果が提示され、協働を促進する組織での取り組みについて提案がありました。また、塩澤さんからは「チーム医療の広がり」と題して、多くの職種が標榜科を超えて専門的な知識を持ち寄って協働する試み、また患者とともに構築する患者会の試みなどの紹介と提言がありました。細田さんからは「転換期における医療に関与する人々」と題して、医療において協働やチーム医療を大切にするものへの変化を「文化変容」として捉える視点が提供されました。

司会者は板橋真木子さん(立正大学)が担い、フロアから多数の意見が相次ぐ活発な議論が展開されました。チームや協働という概念に関する考察から、病院や在宅などの場がもたらす相違など、様々な論点が挙げられました。

第1回例会は、6月23日(土)13:30から首都大学東京荒川キャンパス校舎棟4F在宅看護実習室(466)で開催され、本多康生さん(日本学術振興会)から「ハンセン病療養所における生活ケア」と題した報告がありました。本報告は、論文投稿を予定しているため、内容の紹介は最小限に留めます。

ハンセン病療養所における入所者の生活領域の自律化のプロセスを解明するため、入所者一介護職間のミクロな相互行為分析から、療養所における生活ケアの特性を明らかにしました。報告後は活発な議論が展開されました。まず、センター(不自由者

棟)で現象するコンフリクトの位相に照準が合わされ、センターの生活ケアを特養・老健等の居住型施設に敷衍することの意味について、討議が交わされました。次に、入所者の生活領域の自律化への志向性が持つ、いわゆる“患者学”への示唆が論じられました。最後に、入所者の「生の自律」が議論の遡上に上り、生活領域の自律化等の他の概念との関わりについて、多角的に検討がなされました。

第2回例会は、7月14日(土)13:30から首都大学東京で開催します。報告者は織田あゆみさんです。

また、第3回例会は公開企画としてラウンド・テーブル・ディスカッションを開催する予定です。9月22日(土)13:30から(場所は未定)、「ケアとジェンダー／セクシュアリティ」と題して、話題提供者には会員から朝倉京子さん(新潟県立看護大学)、山崎裕二さん(日本赤十字看護大学)にお願いし、非会員からは春日キスヨさん(松山大学)にお願いする予定です。

第4回例会は11月17日(土)13:30から開催します(場所は未定です)。報告者は清水準一さん(首都大学東京)です。

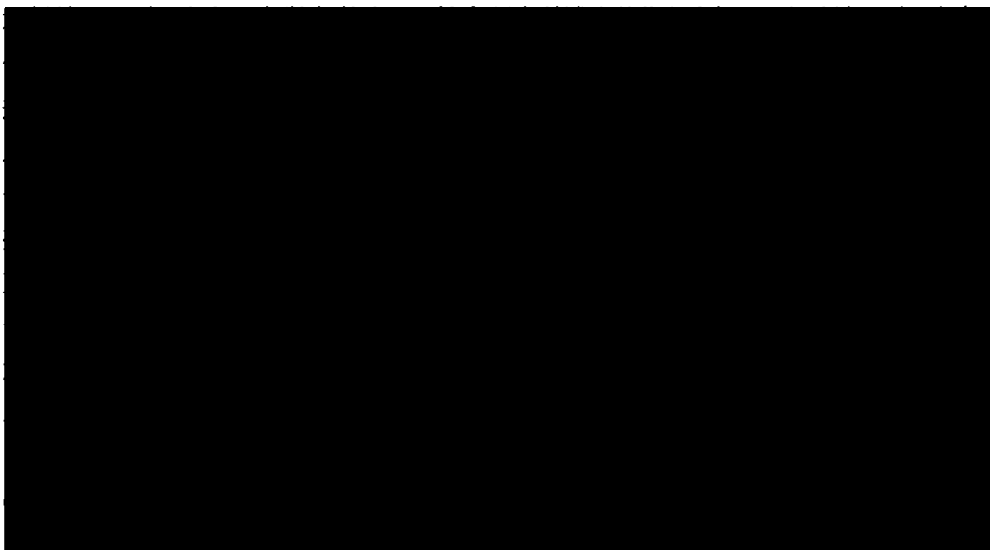
皆様の積極的な参加をお待ちしております。お問い合わせ等は看護研究部会事務局板橋真木子()、清水準一()までお願いいたします。

(文責：三井さよ)

XI. 新入会員および退会者の承認(敬称略)

<2007年3月21日～2007年6月29日>

・入会



以上 28 名

・退会

以上 10 名

・資格喪失

以上 7 名

学会事務局からのお願い

連絡先がわからなくなっている会員の方（敬称略）：

上記の方々と連絡先をとれる方がいらっしゃいましたら、学会事務局のほうにご連絡いただけますようお願いいたします。

学会事務局からのお知らせ

規約の改正に伴い、2007 年 5 月 20 日より、前年度（2006 年度）分会費を未納の方への学会誌の送付を停止させていただきます。前年度までの会費に未納分がある方は、ぜひ納入してくださいますようお願いいたします。

学会事務局 E-mail : [redacted] FAX : [redacted]
(学会事務局次長:望月美栄子)

X II. 編集後記

暑い夏を迎えての日々、会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

これから 2 年間ニューズレターを担当させていただくことになった日本赤十字看護大学の河口てる子です。どうぞよろしく願いいたします。

はじめて担当したニューズレターが、新体制ということもあり、通常 8 ページのも

のが16ページという情報満載のレターになりました。じっくりとお読みいただければ幸いです。特に、総会で承認されました退会規定や年会費未納入の場合の機関紙の送付停止など、少々耳の痛い議案がありますが、ご周知いただきたい内容です。

また、懸案でありました第34回大会長も首都大学の星旦二先生に決まりました。来年の大会が楽しみです。首都大学の先生方は短期間での準備ですので、たいへんかと思えます。近くの先生方には直接のご協力を、遠くの先生方にはご参加をどうぞよろしくお願い申し上げます。

ニューズレターでは、たくさんの会員の方々のご意見を掲載したいと思いますので、引き続き「会員の声」に原稿をお寄せいただきますようお願いいたします。

「会員の声」投稿先：

E-mail： XXXXXXXXXX

なお紙面の都合により、原稿の採否、若干の修正はお任せいただきますことをご了承ください。

(広報担当理事：河口てる子)

日本保健医療社会学会ニューズレター

No. 70 2007/12/14



日本保健医療社会学会事務局
東京大学大学院医学系研究科
健康社会学教室内
東京都文京区本郷 7-3-1
(編集: 河口てる子 発行: 溝田友里)

I. 第34回日本保健医療社会学会大会 大会長からのお知らせ(第2報)

第34回日本保健医療社会学会大会会長 星 旦二
首都大学東京・都市環境学部・都市システム科学専攻長

日時: 5月17日(土)・18日(日)

テーマ: 都市の健康課題とヘルスプロモーションの推進(仮)

会場: 首都大学東京 12号館

《医学モデルから生活モデルへの展開》

少子高齢社会の中で様々な改革が推進されています。特に医療改革や保健分野の改革は、グローバルスタンダードな視点で見れば、社会的対応が十分と言えるだろうか。医療費や要介護率の地域較差は、県別で約二倍の開きがあり、都市部ほど平均寿命は伸びない背景をくらしや社会の視点から検討したい。

来年度の大会では、様々な健康課題を解決していくためには、ヘルスプロモーションを重視し、様々な分野との連携を強化して人々のセルフケア能力の向上を目指した地域のエンパワーメントと市民参画、それに informed choice をキーコンセプトとして展開したいと構想しています。

このような視点から、大会の主題を「都市の健康課題とヘルスプロモーションの推進(仮)」とする予定です。サブテーマとしては、地域のエンパワーメントとともに、他職種間の連携、健康生成論(SOC)、医療改革、特定検診の課題を取り上げました。この分野の先駆者の先生方に依頼する予定です。

健康生成論は、医学の基礎となっている病理学に対峙する学問体系であり、我が国への紹介者である山崎先生に依頼しています。医療制度改革では、これまでの改革を体系的

に鋭く分析している二木先生に依頼しています。そのほか、保健医療社会学の過去現在未来の第三弾も継続することを提案したいと考えています。その他、ラウンドテーブル・ディスカッションも継続していきたいと考えています。多くの投稿演題と企画を含めた主体的な参画を期待しています。よろしくお願いします。

Ⅱ. 「自主企画ラウンドテーブル・ディスカッション」の公募について

2008 年度大会における「自主企画ラウンドテーブル・ディスカッション」を公募いたします。2007 年度は初の試みとして、ラウンドテーブル・ディスカッションをあらかじめ自主企画として公募する形で開催しました。最低でも4つのセッションが同時並行するようにして、個々のセッションの人数を少なくし、ラウンドテーブル本来の持ち味を出したいという意図からです。実際にやってみたところ、各ラウンドテーブルでそれぞれ活発な議論が展開されました。そのため、2008 年度も同様の形式でラウンドテーブル・ディスカッションを開催したいと思います。それにともない、会員の方々の自主企画ラウンドテーブル・ディスカッションを募集いたします。

《応募要領》

① 企画者および話題提供者:

企画者(兼司会者)1名と話題提供者2~3名でひとつのセッションとする。
企画者は現に本学会会員であること、話題提供者は大会当日に会員であることを要する。

② テーマおよび企画の趣旨:

本学会で議論するにふさわしいテーマであること。
企画の趣旨を200字程度にまとめる。

③ 応募締切り: 2008年1月20日

④ 採否の決定: 研究活動委員会で採否を決定する。

企画者は、上記①と②を明記して、メールで下記研究担当理事宛にご応募ください。また、この件に関するお問い合わせもメールにてお願いいたします。

みなさまの積極的なご応募、ご参加をお待ちしております。

メールアドレス XXXXXXXXXX

(研究活動担当理事: 三井さよ)

Ⅲ. 理事会報告

《2007年度第3回理事会》

2007年9月24日(月)13時より 於東京大学

出席者:山崎喜比古(学会長)、天田城介、樫田美雄、河口てる子、黒田浩一郎、進藤雄三、野口裕二、溝田友里(各理事)、望月美栄子(学会事務局次長)

1) 社会学系コンソーシアム等の参加に関して

社会政策関連学会協議会、社会福祉系学会連合、社会学系コンソーシアムについて野口理事より説明が行われた。今後も理事会で検討を重ね、来年度の総会で決定することとなった。

2) 編集委員会に関して

進藤理事より、第1回編集委員会が10月6日に大阪にて行われること、9月23日現在の投稿状況は再々・再投稿3本(研究ノート2本、原著論文1本)、新規投稿2本(原著論文2本)であることが報告された。

3) 論集収録論文のweb上公開について

進藤理事より、メディカルオンライン等、web上での論文の公開についての説明があり、検討された。Web上の論文の公開については引き続き検討を行うこととなった。

4) 研究活動報告

樫田理事、黒田理事より、関西地区の定例研究会についての報告および次回の案内が行われた。また、学会奨励賞および研究活動担当理事の抱負について、今号ニューズレターに掲載することとなった。

5) 来年度大会について

昨年と同様、ラウンドテーブル・ディスカッションの公募を行い、次号ニューズレターで募集、2007年12月28日を締め切りとすることが決定した。(その後理事による協議を行い、締め切りを2008年1月20日に変更)

6) 次号ニューズレターについて

河口理事より、次号ニューズレターの構成について提案され、討議が行われた。

7) 新入会員および退会者の承認

望月事務局次長より、2007年6月30日以降9月21日までの新入会員および退会希望者の報告があり、いずれも承認された。

8) 次回理事会の日程

次回理事会は、12月9日(日)13時より、東京大学にて開催することとなった。

(総務担当理事:溝田友里)

IV. 研究活動担当理事から

今年度から名称と人員数が変更され、名称は、「定例研究会担当」から「研究活動担当」に、人員数は「2名」から「4名」になりました。新規の業務を少しずつ開拓していきたいと思っております。

内容としては、いまのところ2つのことを考えています。ひとつは研究奨励に関わる「賞」の選考を行うことです。今年度から若手会員を対象とした賞が創設されましたので、さらなる研究意欲の向上に貢献したいと思っております。もうひとつは、大会企画・例会企画の充実です。昨年から大会時のラウンドテーブルを公募していますが、この企画を発展・定着させることが今期の我々の活動の重要課題であると考えています。ふるってご応募ください。学会を会員への「サービス機関」と考えると、「学ぶ場」の提供は重要な課題です。大会での教育講演企画の充実を図っていきたく思っています。それぞれの研究分野に軸足を置きつつ、広く他の領域の動向を学ぶ機会を提供することは、本学会のような学際的な学会において重要だと考えるからです。もちろん、これまで同様、関東で3回、関西で2回の定例研究会も開催していきます。

(お詫び: 上記所信表明は、本来は先便ニューズレターに掲載すべきものであり、その旨先便レターの理事会報告末尾にも記載していましたが、諸事情から本便での掲載になりました。ご了承ください)

第1回日本保健医療社会学会奨励賞

若手研究者の奨励を目的に新たに設置された第1回日本保健医療社会学会奨励賞は、選考委員会による審査の結果、以下のように決定しました。授賞式は、第33回日本保健医療社会学会大会総会においておこなわれ、賞状と副賞が贈られました。

受賞者: 浦野慶子(ハワイ大学大学院博士課程)

受賞作: 「ソーシャル・キャピタルをめぐる保健医療社会学の研究展開」

(保健医療社会学論集第17巻1号、pp 1-12、2006)

受賞理由: 近年さまざまな領域で注目を集めているソーシャル・キャピタルの概念について、数多くの先行研究を整理検討し、その保健医療社会学における意義と今後の課題を明らかにした。

なお、この賞は、前年度1年間に本学会機関誌「保健医療社会学論集」に掲載された若手研究者による論文(総説、原著、研究ノート)を対象にして選考されます。(若手研究者とは年齢35歳未満、または、研究歴10年未満とみなせる者を指します)。若手研究者の積極的な投稿を期待します。

(学会奨励賞選考委員会)

V. 編集委員会

1) 編集委員会では2007年7月に18巻1号を刊行しています。引き続き、現在、次号18巻2号の編集作業を進めております。次号は2007年5月19日(土)、20日(日)の両日に新潟医療福祉大学にて開催された第33回大会のシンポジウムA「看護と介護の異同」の記録(臼井キミカ氏、堀内ふき氏、渡辺裕美氏、是枝祥子氏の論文)ならびにシンポジウムB「格差と保健・医療・福祉」の記録(河内一郎氏、中谷友樹氏、近藤文彦氏、宮下榮子氏)の記録、投稿論文、書評などで構成される予定です。現在、2008年2月上旬の刊行を目指して鋭意作業を進めております。

2) 2007年10月6日(土)に大阪市立大学梅田サテライトキャンパスにおいて、新編集委員会の体制で第1回日本保健医療社会学会編集委員会を開催いたしました。編集委員会では、新編集委員会の体制と査読システムの確立、『論集』18巻2号投稿論文の査読者と査読プロセスの決定、投稿規定ならびに論文執筆要綱など審議・検討が行われました。また、編集委員会としては査読の確認などを随時メーリングリスト等を通じて行っています。

3) 投稿規程の変更にもなっており、英文要約およびフロッピーディスクの提出が義務化されております。また、今後、『論集』投稿者には原稿コピー3部を編集委員会事務局に書留にて郵送していただくのと同時に、編集委員長宛てにメールにて原稿ファイルを送付していただくこととなります。投稿の際には必ず確認して頂きますようお願いいたします。詳細については次号のニューズレターなどでご連絡いたしますので、必ずご確認ください。

4) 編集委員会では『論集』に掲載された投稿論文などを著者による掲載承諾を得た上でウェブ上で公開する方向性について慎重に検討しているところです。また、論文執筆要項においてウェブ上での情報を引用・参照する場合についても明示することなどもあわせて検討しています。この点については追ってご連絡をいたします。

5) 第4回(12月9日)の理事会*で編集委員長である進藤理事の退任と天田理事の新編集委員長就任が承認されました。それに伴い、事務局の住所は下記新編集委員長所属先へと変更になりましたので、送付、連絡の際にはお間違いのないようご注意ください。

* 第4回理事会報告は次号ニューズレターに掲載予定です。

新編集委員会事務局:

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学大学院先端総合学術研究科

編集委員長 天田 城介

TEL & FAX [REDACTED]

Email [REDACTED]

(編集担当理事: 天田城介)

VI. 関東地区定例研究会

《第193回関東定例研究会 報告》

障害学を専門とされている星加良司さん(東京大学)をゲストスピーカーに迎え、9月29

日に学士分館8号室にて「障害を社会現象として捉えるということ——個体決定論/環境決定論を越えて」というタイトルで発表していただいた。会員、非会員20名ほどの参加者があり、討論者の深田耕一郎さん(立教大学)のコメントを皮切りに、参加者による活発な質疑、討論が交わされた。

星加さんは、イギリスの障害の社会モデルをベースに障害学(disability studies)がなぜ生まれ、それにより障害理論がどのように変わるのか、さらにどのような課題が今後待っているのかなどについて、歴史的な経緯をふまえて理論的に展開された。(詳細:「障害とは何かーディスアビリティの社会理論に向けて」(生活書院、2007)。

誤解を恐れずに、発表からいくつか個人的に興味深かった点などをあげてみる。まずは、障害学が、当事者運動と表裏一体で生まれてきたものであり、問題解決という名目で行われてきたことが、当事者にとって“抑圧的な”体験であった。1950/60年代に声を上げてきたのは障害者を取り巻く人々で、当事者の体験が“社会的な文脈”のなかで、新たに“リアリティ”が語り直されてきたという点。このような背景から障害学、障害の社会モデルが、おそらく実践と少し距離をおきつつ理論的に発展してきたようである。「実践する前に、何が問題かを問うことが障害学にとって重要」という発言は、実践と運動に傾斜しがちな障害研究への警句のように聞こえた。このような展開は、医療における“患者”をめぐるでも共通した歴史的経験であることに、気づかれる会員も多いと思う。また、個人原因論と社会(あるいは環境)原因論の二項対立軸も、他の学問領域でも問題となってきたことである。このような観点からみて、障害学あるいは社会モデルの新しさや意義はどこにあるのか。興味深いコメントや質問と応答があり、刺激的であった。

(研究担当理事 関東地域 三井、朝倉。文責:朝倉)

Ⅶ. 関西地区定例研究会

〈関西地区定例研究会のご案内〉

下記のとおり、研究会を開催します。演者は阿部俊彦氏(東海学院大学)と川島理恵氏(日本学術振興会)のフレッシュなお二人です。コメンテーターは、栗岡幹英氏(奈良女子大学)にお願いしました。ゆったりとした時間編成にしています。フロアを交えての討論の時間も十分に取ってありますので、皆様奮ってご参加下さい。

日時: 2008年3月15日(土) 14:00~18:00 (参加費無料/参加条件なし)

場所: キャンパスプラザ京都 第二会議室(2階)

(地図 <http://www.consortium.or.jp/campusplaza/access.html>)

※JR 京都駅ビル駐車場西側・京都中央郵便局西側、京都駅より徒歩3分
連絡先: 榎田美雄(徳島大学総合科学部) XXXXXXXXXX

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/kasida/presentation/presentation.html>

プログラム:

- 14:10 第一講演 阿部 俊彦氏(東海学院大学総合福祉学部)
「阪神淡路大震災後の遺児ケアの問題について」
- 15:10 コメント:栗岡幹英氏(奈良女子大学)、質疑応答
- 16:00 第二講演 川島 理恵氏(日本学術振興会特別研究員/埼玉大学教養学部)
「意思決定過程における『説明』のジレンマ:不妊治療の会話分析」
- 17:00 コメント:栗岡幹英氏(奈良女子大学)、質疑応答
(文責:研活担当理事・樫田美雄)

VIII. 看護研究部会

第2回例会は、7月14日(土)首都大学東京荒川キャンパスにて行われ、織田あゆみ氏から「医療システムの中の『看護』」と題して報告がありました。発表者は医療システムの構造的側面から看護を捉え返すことを意図し、日本の医療システムについて、国民皆保険制度の概念などを簡単に要約しました。議論では、制度として看護ケアを構築していくという研究上の立場について、「誰がケアを享受するための議論か?」という指摘がありました。画一的な制度化の困難な看護ケアの有り様について、看護システム、諸外国との比較、経済的側面、人員需給の側面、看護体制の現況、看護ケア評価の数値化などの議論が多角的になされました。

第3回例会は、公開企画として、9月22日(土)順天堂医院において、「ケアとジェンダー/セクシュアリティ」をテーマに行いました。参加者は25名(うち部会員は11名)でした。社会におけるジェンダー/セクシュアリティのあり方がケアの実践へどのような影響を及ぼしているか、あるいは逆にケア提供場面におけるジェンダー/セクシュアリティのあり方が何を社会に投げかけているかをあらためて問い直し、議論することが重要であるという認識の下に設定されました。司会は吉田澄恵氏(順天堂大学)、話題提供者は朝倉京子氏(新潟県立看護大学)、山崎裕二氏(日本赤十字看護大学)、春日キスヨ氏(松山大学)にお願いしました。

報告後の議論では、参加者から看護や介護職など専門職によるケアとジェンダー/セクシュアリティに関して、特に男性の看護職、介護職の現状やかかえる問題についての意見が出されました。また家族成員によるケアとジェンダー/セクシュアリティについては、男性が女性をケアする場合に関する意見として、ケア能力の問題や、男を優位とする刷り込み、女性の身体を性的と見なす意識とその変容等に関して指摘がありました。他にも参加者と話題提供者、司会との間で活発な議論が行われました。

今回の公開企画を通じて、看護研究部会として、女性がケア提供の担い手とされてきたこと、中心に担ってきたことの意味や問題を確認し、様々な視点から問い直すことが出来たという「成果」を得られただけでなく、特に異なった性別間のケア提供場面におけるジェンダー/セクシュアリティの問題は、いっそうの検討が必要な「課題」として残されました。

第4回例会は、11月24日(土)13:30から首都大学東京荒川キャンパス校舎棟4F在宅

看護実習室にて、三井さよ(法政大学)が『思い』を介した協働——特養における介護職と看護職への聞き取りから』(仮)と題して報告する予定です。

(文責：板橋真木子・三井さよ)

IX. 新入会員および退会者の承認 (敬称略)

<2007年6月30日～2007年9月21日>

・入会

[Redacted]

[Redacted] 以上8名

・退会

[Redacted] 以上5名

学会事務局からのお願い

連絡先がわからなくなっている会員の方(敬称略)

[Redacted]

上記の方々と連絡先をとれる方がいらっしゃいましたら、学会事務局のほうにご連絡いただけますようお願いください。

学会事務局からのお知らせ

規約の改正に伴い、2007年5月20日より、前年度(2006年度)分会費を未納の方への学会誌の送付を停止させていただきます。前年度までの会費に未納分がある方は、ぜひ納入してくださいますようお願いいたします。

学会事務局 E-mail: [Redacted] FAX: [Redacted]
(学会事務局次長:望月美栄子)

X. 編集後記

今年の秋はいかがでしたでしょうか、秋が来たかな?と思ったら、足早に冬が来たようです。会員の皆様にはインフルエンザなど、お気をつけください。

「会員の声」投稿先: E-mail: [Redacted]

なお紙面の都合により、原稿の採否、若干の修正はお任せいただきますことをご了承ください。
(広報担当理事:河口てる子)